

### 第十五

### 缸瓦寨(感王寨)の攻撃

正面より  
紅瓦寨に  
向ふ

敵の歩兵  
頑硬に銃  
撃す

砲兵の下加河に達したる際(午後一時)より、其放列陣地を造り出たさしめむか爲に、第六聯隊の第一大隊は、正面より缸瓦寨に向ひ、第二大隊は左方なる敵の騎兵の據守せる村落に向ふ、午後二時、第二大隊は敵の騎兵を撃退して其村を奪へり。我砲兵は目標を變換して缸瓦寨に向ひ之を射撃したれども、距離尙ほ遠くして効力薄弱なり。乃ち第六聯隊第一大隊の援護に依りて更に有効距離まで前進し、二時卅分頃放列を布きて缸瓦寨なる敵の砲兵及び歩兵を射撃す。初め敵は速射砲四門を備へて我軍を射撃したりしも、我大砲十二門を以て彼を射撃するに及びて、彼の砲は沈黙せり。然れども、敵の歩兵は、益す頑硬に銃撃して我に抗し、我歩兵は、前進すると能はず。唯各地物に伏し、彼に應撃して以て後續部隊(大島部隊)の來るを待てり。若し彼敵にして普通近世兵術に通ずる將帥と、普通近世歐式の訓練を受けたる兵卒ならしめむには、此時大迫隊は頗る危険の地に在りしなり。幸にして彼敵兵は新式訓練

不知律の  
兵士兵術  
に暗きを  
將校

大島部隊  
の急行

激戦の最  
中

を乏しき錯雜なる不規律の兵たり、其將校も亦近世兵術兵略に暗き者なりしか故に、大に此虚に乗じて我兵を惱ます能はざりしは、我軍の幸運を謂ふべし。

桂中將の命令に依り、午前第十一時五十分、大島部隊の第六聯隊第二大隊及び第十九聯隊、第二大隊は、瞭甲山附近より及び八里河子附近より引返し、師團總豫備と爲り三里の長途を殆んど駆け足にて急行したりと雖、今朝來の行軍に既に疲れたる後となるか故に、其缸瓦寨戰場に到達するを得たるは、午後四時頃なりき。時に砲烟彈雨前面を蔽遮し、敵の所在は分明なり難く、大陽は赤色を放ち滿地の積雪に映射し我兵士の眼光を眩して敵に利益を與へたり。新來の大島少將は前方の戦況を望めば、敵は驚くべき長線に散開して、大迫部隊の各隊を掩撃せむと謀るものゝ如く、頗る強大なる兵力を現はし、大迫部隊は必死を極めて之に當り、激戦の最中なり。大島少將は第七聯隊長三好大佐(成行)に命じ、下加河より缸瓦寨迄戰場を東西に貫通せる凹道の右方即ち道の北方に三箇中隊半を撤開せしめ、其凹道の左方即ち南方に一箇中隊を撤開せしめ、以て大迫部隊第六聯隊の第一第二兩大隊の中間に挿入し、而かも第十九聯隊第二大隊の三箇中隊は、小笠原大隊長芳次郎に屬し、凹道



敵兵南方に現出する

敵陣距離の測定精確なり

支那砲兵の射撃は極めて正確なり

を前進して、第七聯隊の左方に進出せしむ。第六中隊は總豫備隊の豫備として、凹道中に留まり、第七第八中隊は梯隊を爲りて敵前六七百米突の地位に撤開し、十二門の山砲は更に放列を左翼に布きて、砲撃を始めた。午後四時過

是より先に、午後二時卅分頃、一旦沈黙したる敵の速射砲は、缸瓦寨の中央最初の位地より轉じて、其南方に現はれ、我か砲兵に向はすして、左翼の歩兵を射撃せり。此射撃を被むりたるものは、我第六聯隊の第一中隊を最と爲し、之に次くものを第十九聯隊の二個中隊及び第七聯隊の一個中隊とす。敵の砲弾は着發彈なるか、其距離の測定精確なるか、從來清兵には未だ曾て其比類を見ざる所なり。故に其彈は毎發來りて、我諸隊の前後左右に落ち、轟然として雪と泥とを其巨彈の破片と共に、我人馬に浴せしむ。蓋し、其士官の之を指揮する、あれは支那砲兵の技倆も亦侮るべきに非ざらざるべし。

又敵の歩兵若干は、其の砲兵の左なる前面に前進して現はれ、障壁地物等に依らずして、直立急射撃を爲すと、數十分間の久しきに及べり。我左翼則ち第十九聯隊の各中隊と第七聯隊の左端一個中隊とは、此射撃線と正面敵陣との中間に介在し、

地物なき雪中の空原に立つ

敵兵抗戦固せず

諸隊の苦戦

十字火に掛けられたるか故に、其死傷特に多かりき。我兵は全体概して、開豁にして、地物なき雪中の空原に立ち、猛烈なる敵の銃砲火を受け、力闘奮戦すると、數時、大迫部隊は午後一時より、而かも大島部隊の來着展開してより、既に廿分を過ぎ、四時廿分に及びて、我か第一線隊は進みて突撃を以て、敵の防禦線第一線を占奪したれども、敵兵頑硬にして、尙ほ第二防禦線を守り、抗戦して屈せず。我中央諸隊即ち第七聯隊と第六聯隊の第二大隊とは、敵の棄てたる松林を占領し、之に據りて、益す缸瓦寨の敵軍を攻撃せり。

三好聯隊長は、日没前に於て、敵の第二防禦線を占奪せむと欲し、敵前三百乃至四百米突の處迄突進せり。此時我右翼第十八聯隊の第一大隊は、既に馬圈子を占奪し終りて、益す南西方に前進し、缸瓦寨を距る三百米突の處に達し、中央諸隊も亦之と一線に列せむとするに近し。然れども、我兵頗る疲れたるを以て、猛然迅進するを難んず。是より先きに第六聯隊の第二大隊長小野寺少佐實は、第六中隊を率ひて、此時すでに凹道中に在り。元來第六中隊は、此日總豫備隊中の又豫備たるか故に、敵の逆襲を慮かり、凹道中に靜止し居たりと雖も、今や日没に近づき、而かも我諸隊兵の苦戦は



第六中隊の擡開

缸瓦寨の占領

彼我の死傷

見るに忍びざるを以て、且つ敵の右翼前面に挺前せる敵兵若し此際に乗じて突貫し來らむには、我軍の大困頓に陥らむと必然なるべきを思認したるか故に少佐は、終に第六中隊をして撤開せしめたり、此新加の援兵は、全隊に活氣を與へたるを以て各隊齊しく前進して敵前二百米突の處に至り、各將校は今朝來雪中行軍と半日の劇戰とに疲れたる兵卒を鼓舞作興し、特に第十九聯隊第七中隊長塚本大尉芳次郎の如きは右肩に貫通傷を負ひたるをも顧みず、陣頭に率先して部兵を勵ましたるか故に全軍吶喊して一進再進之に次ぐに三回吶喊突貫を以てし、終に缸瓦寨の東端防禦線に突入し、敵は支へずして退却せり。是に於て、我軍は全く缸瓦寨を占領したり、實に午後五時五分。

然れども、海城根據の守備單弱なるを慮かり、桂中將は、一部隊を留めて缸瓦寨を守らしめ、師團司令部及び他の各隊は此夜を以て海城に還りたり。

此日の戰は、午後一時卅分に始まり、午後五時五分に終る。其死傷最も多きは第十九聯隊第二大隊にして之に次ぐもの第七聯隊の第二大隊とし、第十八聯隊第一大隊

之に次ぐ。

隊別	戦死	負傷	計
第十九聯隊第二大隊	人	人	一六四
第七聯隊第二大隊			九六
第十八聯隊第一大隊	七	六八	七五
第六聯隊			七六
總計	五四	三五七	四一一

敵軍の死傷は詳かならずと雖も、死者は少くとも三百人に降らざるべし

### 第十六

#### 我野戰衛生事務の經驗

野戰病院  
 缸瓦寨の戰に於て、最も困難を感じたるものは實に野戰病院也。

此日衛生隊は、下加河村落の民家に繃帶處を設け、而かも此役戰線の廣さ一里餘に亘れる處に向て、擔架の兩中隊を出し、傷者を收容し、暗夜積雪中にして、運動不便をを極めたるも、一同之を冒かして奮勵從事し、以て傷者を繃帶所に送り、繃帶の終る

傷者收容



に隨て之を海城第三野戰病院に復送したるが、其收容患者の總數二百廿名、内準士官以上八名、下士廿八名、兵卒百八十四名にして之を重輕傷に區別すれば、重傷廿二名、輕傷九十八名。

又従前の戰役に比すれば、重傷者と砲創との多きは、是此日戰場に蔽遮物の乏しかりしと、敵砲の着發彈が善く命中破裂したる者多きとに由れり。

但し前掲の死傷數と病院收容患者の數と相合はざるは、輕傷患者が入院せずして各隊に歸營したる者あるを以て也。負傷の外に、凍傷患者は各中隊に各十名以上あらざる莫し。雪上に横れる傷者の全身凍結し、運動知覺共に廢したる者尠からず。被服の鮮血に染みたる部分は凍硬鐵板の如く、又脚絆靴等は堅く皮膚に氷着し、之を脱せしむるを得ず。僅かに剪刀を以て其周圍を剪裁し、傷部を微温湯に入れて之を解除するとを得たる等、我衛生隊員は非常の困難を経験せりと云ふ。

凍傷患者

### 第十七

#### 勅語及奉答

缸瓦寨の捷報が大本營に達するや、大元帥陛下は第一軍に左の勅語を賜はれり

#### 勅語

其軍ノ一部海城地方ニ於テ優勢ノ敵ヲ邀撃シ雪中數時間ノ激戰ニ堪ヘ猛烈ノ奮闘ヲ以テ之ヲ破ル  
朕深ク其忠勇ヲ嘉賞ス

第一軍司令官野津中將は此勅語に對し奉答すると左の如し

#### 奉答文

海城地方の戰捷は前司令官の計畫、第三師團長の指揮共に宜しきを得、將校以下の忠勇に依ると雖も、是れ偏へに陛下御威徳の致す所なり。今や優渥なる聖勅を賜ふ、臣等感激の至りに堪へず。益々奮勵將來の成功を期せむとす。謹んで奉答す。

明治廿七年十二月

第一軍司令官陸軍中將子爵野津道貫

### 第十八



### 廿七年歳末に於る海城の形勢

海城占領の任務は、此に於て僅に其初一段だけを了せりと雖、其實は海城と第二軍との連絡尙ほ未だ通達せざる也。

海城と金州との中間咽喉の地とも謂ふべき蓋平城は、尙ほ清軍五千人の據る所たり、而かも營口牛莊及び遼陽等の各要處は、互に相聲勢を通じ、以て清軍の根據地と爲りつゝあるものなるが故に、海城は殆んど敵中に斗出せる堡寨の姿を爲せり。故に此末、日本軍の兵站線、大に敏活開達を加へ、海城日本軍をして優勢の地位を占有せしむるの日に非ざれば、海城占領の目的は未だ達せりと謂ふを得ざる也。

### 第十九

### 清軍の情勢及蓋平の地勢

明治廿七年歳末に當り、遼東に於る我軍の戦線は、東は賽馬集帥家口連山關より西は海城方面に至る、大約五十餘里に延亘せりと雖、賽馬集帥連山關方面の敵は、黒龍江將軍依克唐阿の部下五千、人及び提督聶士成と總兵呂本元の部兵五六千にして、其

敵中に突  
出せる堡  
寨

戦線五十  
餘里

敵軍の主  
力營口牛  
莊方面に  
在り

其退却溝  
は大敗挫  
折したる  
に非ず

高刊  
蓋旗溝

動運は頗る活潑なるも、作戰計畫は統一する所無きが故に、我鳳凰城立見旅團を以て之を率制するに足れり。

然れども、敵の兵力最も集中せる處は、營口牛莊方面に在り、敵將馬玉崑、劉盛休、徐邦道等各部を合し、大約一萬に降らず、而かも之を統括するに、宋慶を以てす、彼は海城を一たび失ひたるより之を回復せむと企てしも、紅瓦寨に於て激戦して敗れたるが故に、其一軍は蓋旗溝に、其一軍は高刊附近に退却せり、然れども、其退却せるは、決して大敗挫折したるか爲に非ずして、彈藥糧食の繼加ざるか爲に退きたるに過ぎず、彼が更に海城回復の志を止めざることを固よりなり。

高刊は海城を距る大約九里、營口を距る約五里十五丁に在り、蓋旗溝は營口を距る五里、蓋平城を距る約四里三十丁に在り、敵は紅瓦寨を退きて、此二地方向に赴むきたる後、依然として營口蓋平高刊の三點を連絡し、以て我軍の北進を扼制するの方畧を取り、山海關方面よりは益す援兵を増發し、以て我海城を回復せむとする企圖あること疑ひ無きもの、是れ廿七年歳末の實況にてありき。

抑も支那兵弱しと雖、其補充隊數は尙ほ陸續として南方より之を増發せらるるか故



に、其援兵の大集せざるに先だちて、蓋平城を攻畧し、以て我第二軍と第一軍との連絡を通し互に其臂勢を援くるの必要あり。是に於て我第一軍は蓋平城攻撃の計を決定せり。

蓋平の地理

蓋平は、金州半島より北に進みて、遼河に出つべき本道第一の要地たり。城は、蓋州河の北に在り。河幅六百米突、水流の幅約百米突、水底は黄沙にして水清し。深さ四米突。平時渡舟を以て人馬を渡す。

東南二面は、廣濶なる平原なり。城北に二高丘あり、以て城中を俯瞰すべし。鳳凰山と曰ふ。是より四五丁を隔て北方は山崗起伏すると斷へず。

城内人口三萬、市街繁盛にして、民産も亦裕かなり。商賈多し。盛京省南部第一の市邑たり。江蘇江西浙江三省商人の會館及び山東山西商人の會館、福建商人會館等皆城中市街に在り。

四通の便地

東は岫岩鳳凰城に、東北は遼陽に、南は海城に、西は營口及び牛莊に、西南は熊岳金州に達すへく、實に四通の便地たり。其金州復州及び海城營口等の距離は左の如し。

里 數 計 里 數

金州より普蘭店まで	十三里五丁		
復州まで(普蘭店より)	十二里卅丁半	(金州より)	廿六里弱
普蘭店より娘々宮まで	十六里廿丁		
普蘭店より莫家屯まで	廿七里廿丁半		
莫家屯より蓋平城まで	七里五丁	(金州より)	四十七里卅五丁半
復州より熊岳城まで	廿三里八丁		
復州より蓋平まで	三十二里弱		
蓋平より營口迄	九里卅丁		
岫岩より大石橋まで	廿九里		
大石橋より蓋平まで	六里		

### 第二十

## 我混成旅團蓋平進軍

是より先に、我か第二軍は、廿七年十一月廿一日を以て旅順を陥れたる後、十一月廿



第二軍第一旅團の復州に向ふ

復州に於る徴發

八日旅順を發して金州に移り、軍司令部を金州に置き、而して第一軍の第一師團第一旅團の一小部隊歩兵第一聯隊及び山砲一中隊騎兵一中隊は復州占領の目的を以て十二月一日金州を發し、同五日三官廟(普蘭店より北方一里)を發し、復州に向ひしが、此時敵は夙に城を棄て、北方に退却したる後にして、滿城寂然たり。是に於て、部隊司令官第一聯隊長隱岐中佐(重節)は、該部隊の前進を止め、單に第三大隊第八中隊第十一中隊及び騎兵一中隊より編成せる徴發隊を出し、之に五十頭の駄馬を附し、復州城に到りて大徴發を爲さしめたり。

此徴發は、歐洲近世軍制の例規に依り、先づ城門を鎖し、各中隊各其區域を定め、各民家に就き相當代價を拂て必用物品を徴發し、之を一處に集積するものなり。然れども、城中の人民大半亂を避けて逃竄し、其偶ま留まりて家に在るものと雖、亦清兵の暴掠に懲りて我兵を避け、戸を開くを拒むもの多し。因て止むを得ず、強て戸を推し、之に示すに代價即拂徴發の趣意を以てしたりと雖、財產概ね之を他に運び去り、其家に置くもの至て稀れなり。故に各戸殆んど空虚の狀にして、徴發頗る困難なり。而して其徴發し得たるものは多量なる赤白黒砂糖を第一とし、他の食物は茸類、麵

蓋平城攻の際の任務

乃木少將

包粉、之に次く、米は殆んど無し。防寒用としては毛皮數百點を得たるのみ。既にして、蓋平城攻撃占領の任務は、第一師團の混成旅團に命令せられたり。此混成旅團の組織は左の如し。

- 一 前衛 第十五聯隊第一大隊○騎兵一分隊○工兵第一大隊の第一中隊○司令官齊藤少佐(德明)
- 一 獨立騎兵 第一大隊内二小隊と二分隊とを欠く○司令官秋山騎兵少佐(好吉)

- 一 右側枝隊 第一聯隊第三大隊を欠く○騎兵一小隊○司令官隱岐大佐(重節)
  - 一 本隊 騎兵一分隊○歩兵第十五聯隊○砲兵第二大隊○歩兵第一聯隊の第三大隊○衛生隊半部○輜重兵第一梯隊○第一野戰病院○歩兵彈藥第一縱列○第一糧食縱列○輜重兵第二梯隊○第二歩兵彈藥縱列○第二第三糧食縱列
- 本隊は、混成旅團長乃木少將親ら之を率ゆ。
- 以上各部隊は、廿八年一月二日を以て、張家屯(普蘭店より北方一里内の村落)なる第一旅團本部の附近に集合し、其翌三日午前八時を以て北方に向て進發せり。



獨立騎兵大隊は、深く前進して、各地敵情を偵察捜査し、之に次きて我本隊と枝隊とは左右に分し本隊は熊岳街道より進み、枝隊は蓋州街道(直線に莫家屯に出るもの)を取る、其行程左の如し。

日	枝	本隊
一月三日	瓦房店 (張家屯より五里半)	
四日	半拉山 (瓦房店より約六里)	
五日	老虎峪 (半拉山より約五里半)	(普蘭店より廿里)
六日	正白旗 (老虎峪より約六里廿丁半)	
七日	莫家屯 (正白旗より一里)	(普蘭店より廿七里廿丁半)
八日	四台子 (莫家屯より約二里弱)	熊岳城
九日	老爺廟 (四台子より約五里餘)	榆林堡 (熊岳城より五里〇五丁)

我偵察騎兵三日以來、既に敵の哨騎と觸接し、爾後毎日觸接せざる無く、我彼を逐ひ、或は彼れ我を追へりとの警報は、日夜相踵きて到達したるか故に、我各隊將士は一層戒心を加へ、九日の如きは、蓋平城已に咫尺に在るを以て、途上兩軍の衝突あらむ

五里半  
〇〇〇  
〇〇〇  
三〇〇  
我戒心

ことを覺悟し、將士各其防塞外套の外は務めて身輕の裝を爲し、本隊は、午前八時を以て熊岳城を發して蓋州本街道を進行し、枝隊は四台子より右に折れ、間道を前進し、行く行く左右に斥候を放ち伏兵に注意し、毫も疎忽すること無く前進せしが、終に敵兵に遭ふこと無く、前衛は蓋州河を距る二千米突の處に宿營し、本隊は蓋州城を距る二里廿五丁の處榆林堡に宿營し、枝隊は前衛の後方約十二三丁の處老爺廟に宿營せり。  
此夜乃木少將は、蓋平城の攻撃期を明十日と定め、其の一般方略を命令すること左の如し。

○命令

- (一) 歩兵第十五聯隊長河野大佐は、第二第三の二個大隊を率ゐ敵の右翼に向て、牽制攻撃を爲すべし。
- (二) 右側枝隊長隱岐大佐は、第一第二の二個大隊と騎兵一小隊とを率ゐ、敵の左翼に向ひ攻撃を爲すべし。
- (三) 余乃木少將は、歩兵第一聯隊の第三大隊と第十五聯隊の第一大隊及び野戰

蓋平攻撃の命令



砲兵大隊、工兵中隊を以て中より進む。  
但し歩兵第一聯隊の第三大隊は、右側枝隊の左翼に於て、敵の正面に展開する  
豫定。

第十五聯隊は豫備と爲し、余の直轄と爲す。

又衛生の任務に關しては、必要なる命令を下し、野戰病院は、之を六里村近に開設するの準備を爲さしめたり。六里村は、二台子と小米寨との中間に在り。蓋平を距ること大約二里の處なり。

患者輸送部、及び衛生豫備廠は、二台子蓋平を距る一里三十丁に於て後命を待たしめ、而かも歩兵彈藥の一縱列及び砲兵彈藥の半縱列は、二台子に於て、後命を待たしめたり。

榆林堡は、蓋平城蓋平を距る二里廿五丁の南方に集合せしめ、第三糧食縱列は蛇台堡に糧食を置き、熊岳城兵站部より糧秣を分け取りて蛇台堡に到らしむ。

第二糧食縱列は十日午前十時榆林堡に來り、糧秣の分配を爲すべきことを命令せり。

衛生隊の任務  
患者輸送部  
衛生豫備廠

榆林堡は蓋平城を距る二里廿五丁

以上の命令は、嚴格に執行せられたること、は言ふを俟たざる也。

### 第二十

#### 敵軍の兵力及ヒ其防禦方略

清軍は、旅順大敗の日に於て、金州回復の爲に、復州より一大部隊を發したりと雖其目的全く齟齬したるか故に、清將宋慶は復州の地勢は以て日本軍に抗すべからざるとを察し、寧ろ之を棄てて蓋平の險要に據り、以て營口と連絡して日本軍を防かむと謀れり。

故を以て、宋慶は旅順の敗將張光燾一に張光前とありに命し其部兵を率て蓋平城の主將記名提督章高元(或は章鼎臣と記載せるものあり)に協同せしむ、而して蓋平の守兵は約五千人(章軍八營張軍四營)大砲(新式)千餘門に降らざるとは偵察騎兵及び我間諜清人の報告に依りて知られたり。  
又偵察の所報によれば、敵軍は章、張、兩將共に城に籠らすして、出でて城の南門外に陣し、而かも章軍の一部は記名提督總兵楊壽山之を督して城東大約千四百米突の

張光燾と章高元

目的齟齬



處なる鳳凰山の高地に據守し、參將總兵銜李仁昂も亦章軍の一部隊を率ゐて之を助け鳳凰山に陣し、以て日本兵の來攻するもの、其右側を瞰射するに十分なる好地位を占領しつつありと云ふ。

清軍は又其城の南邊を繞れる蓋州河の北岸を以て防禦線と爲し、本街道の左右各千米突の防禦面を占有し、其前地は平坦廣濶にして銃砲の最大距離までを射撃し得べきの、好防禦地たり。故に日本兵は正面より迫る運動を遮蔽すべきの地物を有せず。

### 第二十一

### 蓋平の攻撃占領

○一月十日午前五時半、我中央部隊第一聯隊の第三大隊大隊長今村少佐信敬は先づ敵軍に觸接せり。

昨夜の作戰命令によれば、第十五聯隊の第二第三二個大隊(河野大佐指揮)が、率制攻撃を爲す筈なりしも、此朝に於ては、命令の如くなる能はず、我左翼は、未だ進戦を始

好防禦地

○一月十日  
○の太陰曆  
は十二月  
十五日な  
り

中央部隊  
最初に開  
戦を始む

鳳凰山蓋  
平の天  
王山の  
右翼勢力  
減縮

めざるに先ちて、中央部隊(即ち本隊)最初に戦を始めたか、故に、忽ち猛烈の射撃と爲り、我右翼隊隱岐大佐の第一大隊第二大隊も直ちに攻撃を開始し、第二大隊長香川少佐(富太郎)は些の地物も無き平坦曠濶なる畑中を眞一文字に進行し、優勢なる敵兵と對戦せり。

我左翼の河野隊は、未だ運動を始めざるに、敵軍は夙に要地を占めて我を要撃する勢なれば、隱岐大佐は、戰場を一覽するに、蓋平城の東方大約千三四百米突の處に峙立せる一高地(鳳凰山)の上に、敵の旌旗凛々として朔風に翻へり、騎歩兵數百人に據るものあり、大佐以爲らく、是れ、此高地を奪はずんば、蓋平城は、抜くべからず、と、則ち第壹大隊長竹中少佐(安太郎)に命し、此山を占奪せしむ。時に午前七時五十分、諸隊の戦争方々に激烈と爲り、砲聲地に轟き、呐喊山を震ふ。我歩兵第一大隊第一聯隊は、力戦奮闘して、終に鳳凰山を占領せり。是れ實に此日の天王山なりき。

敵軍が第一要地と恃みたる鳳凰山の陥落に由りて、敵の左翼勢力は頗る減縮せり。隱岐聯隊長は此機に乗じ、第二大隊香川少佐に命し、急進して蓋平河を渡らしめ、而かも、隱岐聯隊長自ら豫備の二個中隊を率ゐ、直ちに進みて、敵の左翼を托する所の



左翼の  
と爲る

防禦家屋に突入して、之を奪取せしかば、敵は支ゆる能はずして、西方畑路より悉く敗走し、敵の左翼は終に空虚と爲れり。

此時鳳凰山を奪ひ取りたる第一大隊は、峰を降りて蓋平河涯に來り、敵の敗兵を一齊射撃したれば、彼等は忽ち雪中に斃るるもの百餘人、殘兵は狼狽逃走せり。

退路を  
断す

隠岐大佐の豫備隊は、益々敵を追撃し、終に蓋平城南門に達し、逃入せむとする城外の敵を中斷して、其退路を絶ちたるが故に、敵の敗兵、鳳凰山或は蓋平河岸に備へたる敵の敗兵は、彌上狼狽し、僅かに身を以て免かれ、西方或は北方に逃走せり。

小川少尉  
の魁進

第一聯隊の旗手小川少尉(賢之助)は、彈丸雨注の間を驍步前進し、此時其左脚に負傷したるをも顧みず、其護衛兵二名の負傷したるをも省みず、猛然魁進して、蓋平河の東南角に攀登し、第一聯隊の隊旗を高く壁上に翻へして、以て先登第一の勳功を奏したり。時に午前八時十五分なりき、之に次て、城の南門樓上に登りたるは、隠岐大佐、及び川崎副官(聯隊)及び豫備の二個中隊なりしが、其先登の迅速なりしが爲に、我が砲兵陣地に在るものは、之を望み見て、敵兵と誤認したりけん、城樓に向て忽ち二三發の散弾を注射せり、幸にして我兵之に觸るゝものあらざりき。

先登第一  
の功

又本道より進みたる中央部隊の先頭たる第一聯隊の第三大隊、及び右側枝隊の第二大隊は、共に正面の敵を撃破して、蓋平河岸に進み、又左翼たる第十五聯隊は、敵を牽制しつゝ、進撃して河岸に迫れり、而かも野戰砲兵第二大隊長松本少佐(鼎)は、本街道の左右兩側に布列せる八門の大砲を漸次に繰り進めて、敵の中堅を射撃し、終に河岸に進みて、敵壘を烈しく射撃したり。

松本少佐

蓋平城東南角が、既に我隠岐大佐の占むる所と爲りたる頃、優勢なる敵兵縱隊を作り、營口方面より續々として我左翼の前方に來襲し、其勢甚だ猛烈にして、一時我軍をして殆んど躊躇せしめたりしが、乃木少將の一大喝に勵まされ、諸隊齊しく呐喊して、蓋河に躍りつつ猛進せり。此時川は全面堅氷處々凸凹傾斜を爲し、其滑澤なると實に太甚だしく、我兵は之が爲に滑倒せられ、隨て起きれば隨て倒れ、其困難に名狀すべからず。故に此河中氷上に於て、敵の爲に狙撃せられたるもの頗る多し。蓋し清將は古來同國の兵略として、此堅氷を利用し、故さらに水を處々に洒流して、以て氷上凸凹傾斜の最も太甚たしき形体を造成したるもの如し。然れども、我精銳勇烈なる將士は、此困難を凌ぎ、終に彼岸に達し、敵壘に突入し、以て之を占奪し、蓋平

敵兵の來

乃木少將  
の一大喝  
全而堅氷  
倒我兵の滑

日清陸戦史卷七 第二十二



城占領の功を奏せり。時に午前九時四十分頃也。

### 第二十三

### 死傷捕虜及び戦利品

此役嚴寒非常、氷凍滿地、我軍猛勇を以て困苦を排し、逆境を冒かし、右側枝隊は鳳凰山の高地に向て鷲進し、中央部隊は蓋州河流幅五十米突乃至七十米突の氷上を滑歩し、敵は彼岸高地より猛烈射撃するも、我は地物の毫も依べきもの無し、而かも、敵兵は、従前の如く戰術に拙劣ならずして射撃操縱頗る其度に中れり。故に我死傷頗る多し。左の如し。

戦死	一	將校	下士卒
負傷	八		四五
計	九		二五五
			三〇〇

將校の名官職氏を區別すれば左の如し。

我軍の死傷者

戦利品

戦死	第十五聯隊歩兵中尉	白川震一郎
負傷	第一聯隊第一大隊長	竹中少佐(安太郎)
同	同第二大隊第六中隊長	吉田大尉(百三)
同	同第七中隊長	及川大尉(恒昌)
同	同第七中隊附	庭田中尉(重直)
同	同第八中隊附	小川中尉(良正)
同	同第一大隊第一中隊附	伊集院少尉(郁五郎)
同	同第一聯隊旗手	小川少尉(賢之助)
同	同第十五聯隊附	新納大尉(幸太)

敵軍の死者は其副將我少將大佐の間位楊壽山、參將我大佐李、及賈氏等を始めとし、大約四百餘人、負傷者之に稱ふ。

戦利品は、新式大砲四門、小銃二百餘、彈藥若干、旌旗百餘、其他武器各種若干。

清人此日の戦狀を記するもの、左の如し。



西曆一月九日倭兵五千來犯し其翌十日黎明倭兵九路に分れて進み鳳凰山に迫る。章鼎臣統領の軍之と血戦し副將楊壽山參將李君君帶賈君共に衆を督し力戦し敵を殺す頗る多し敵終に高地を奪ひ下に臨み俯瞰して我軍を猛射す。楊君賈君均しく戦死し李參將は肩に重傷を被ひり後に没す。城南門外に在る統領張光燾が應援に勉めざるを以て章軍は衆寡敵せずして敗走し新開嶺方向に退く。倭兵猛進して東門に入る。蓋平縣令何君は此日未明より南門城樓上に在り望遠鏡を以て兩軍の戦狀を審觀せしが敵兵の東門に入るに及びて始めて樓を下たり避走せり。

此役我軍四千人陣亡五百人受傷三百人倭奴の死傷六百人と云ふ。蓋州城終に陥れり。

若し營口より救援の爲に來れる宋慶軍の到着をして二時間早からしめたらむには此城決して陥落に到らざりしならむに宋軍の失機は惜むべし。此記事は一月十五日營口發の第一通信及び同日發の同港第二通信にして中倭戦守始末記第二卷各處に載する所を參抄せるものとす。

## 第二十四

### 蓋平の戦に關する我參謀官の評

蓋平の戦は我軍の方略能く其圖に中り而かも敵軍は其應援の時機を誤まりたるが故に我軍の全勝に歸せりと雖此日清軍の運動は従前に比すれば革新進歩を加へたるものあり我か第二軍司令部の參謀少佐關谷銘次郎氏が此戦況を評せるもの左の如し。

一月十二日小官は蓋平の戦場に在り實地に就き其十日の戦況を聽きたるに此後支那軍の戦闘法は從來彼等か慣用する所と大差あるとを發見せり。故に其略を左に記して報告す。

#### 一 蓋平城の地形

蓋平城は金州復州の兩城に比すれば其位地遙かに優れり。城中家屋壯大美麗にして能く整頓せるを見れば以て此地方商工業の中心點たるを察知するに足れり。

清軍運動の革新進歩

商工業の中心點



敵は城に據らず

一 敵軍の防禦

敵は城に據らずして、其南邊なる河岸を以て防禦線と爲せり。河幅五百米突、其流水幅五十乃至七十米突、目今凍氷し氷上を通行し得へきも、氷面滑走し急歩すべからず。我兵之を渡るとき猛烈なる彼岸敵兵の射撃を受け多数の死傷を生じたりと云ふ。

敵の前地は平坦廣潤

敵の前地は平坦廣潤にして砲銃射程最大距離まで洞然射撃し得べくして、而かも我兵は一つも掩蔽すべきの地物を有せず、故に割合に死傷多かりしなるべし。

一 兩軍の戦闘  
我混成旅團は、本道の右に、二隊、左に二隊を展開し、中央に他の二隊と砲兵一隊（砲八門及び工兵一隊を進めたり。敵は是迄と違ひ旗を廢滅し、靜かに我軍の近くを待ち、小銃の有効射程内或は近接四五百米突の處迄我兵を引き寄せたる上、一齊猛烈なる射撃を爲す。此時我死傷したるもの若干ありしと云ふ。我兵は急に撤開應戦し、砲兵は本道の左及び右に各一隊つつ砲列を布き射撃を始めた。我歩兵は例の如く一進一止して、且つ射り且つ進む。敵は我兵の停止する間は之

我兵の苦戦危殆

に向て射撃せずして、我兵の前進を見るや、激烈射撃せり。且つ彼が射撃を始むるに戦線の右翼より始め、而かも之を終るにも亦右翼よりする様に思はれたり。と云ふ。

午前七時より八時頃までの間は、我兵頗る苦戦危殆なりしと云ふ。其故は、我隱岐枝隊（即ち右翼）は敵の戦線か意外に長く且つ稠密なることを報告し、而かも我左翼（河野大佐の牽制隊）は、敵軍か我左翼に向ひ迂回せむとするの景況あることを報告し來るも、之と同時に我中央は空隙ありて之を填實するの必要に迫りたり。此くの如く左右翼共に増援隊を送らざるべからざるの勢なるも、中央空隙を填實すること最も緊要なるか故に、不得止豫備工兵隊を以て之に填充し、猛烈なる射撃を行ひつつ前進せり。

九時卅分頃營口方面より、敵の一大部隊が將に蓋平に來接せむとするの景況あるを知り、急に戦を決するの必要を感じたり。乃ち豫備隊第十五聯隊第一大隊をして充分に戦線に前近せしめたる後、中央二隊を以て急に河を越へて突貫し、左翼の一隊及び右翼の二隊（第一聯隊の第一第二兩大隊）も亦同時に突貫せり。敵は



比較的頑固の抵抗

戦法の差

敵の騎兵一新す

比較的頑固に抵抗し、戦線の或る點は我兵突進して百米以内に入るも尙ほ留まりて射撃したり。然れども敵は終に支ゆる能はずして、二縦隊と爲りて、退却し。其一部は大石橋方面に他の一部は營口方面に向へり。而かも敵の増援隊は、前新店(海山寨の附近にして蓋平を距る一里餘)に一部隊を進めて其敗兵を收容せり。我兵は歩兵一隊に砲兵一隊を附し、海山寨迄敵を追撃せしめ、其掩護に依り、旅團本隊は其隊伍を整頓し、以て蓋平を確實に占領したり。

敵が從來慣用せる戰鬪法と此役の戦法との差異を擧ぐれば左の如し、

- (一) 城に據らずして城外に出て防戦したると。
- (二) 全く旗旗を廢したると。
- (三) 遠距離より發射せざると。
- (四) 我兵の停止せる間は射撃せずして前進するを見るや激烈に之を射撃する。
- (五) 後衛を留めて退却せると。

此他傳聞によれば、敵の騎兵の如きも其運動面目を一新し、我騎兵の追撃を見る

や止まりて展開して我を待ち射撃し、我騎兵彼の優勢約五百騎許なるを見て停止するや、彼は再び其隊を閉收し退却運動を始め、幾回も此の如くして終に退却を完うせりと云ふ。

### 第廿五

### 第二軍と第一軍との本連絡

第二軍と第一軍との連絡

第二軍と第一軍との本連絡は、此に至りて始めて通せり。是より先に、第一軍第三師團長桂中將は、我第二軍混成旅團の蓋平に進軍攻撃すべき報知を得たるか故に一月三日、第十八聯隊第二大隊長門司少佐時に、柵木城に屯駐に命じ、蓋平城の敵軍背面牽制するか爲に、其部隊を率ゐて進向せしむ。門司少佐は先づ第五中隊を以て先發とし、一月五日柵木城を發し、蓋平に向はしめ、七日少佐自から第二大隊本隊及二個中隊を率ゐて柵木城を發し、翌八日王家屯に至れば、先發隊より偵報あり、曰く敵騎約一百我偵騎と此日午前八時財神廟に於て衝突せり。我兵負傷無しと。一月九日門司少佐は、午前八時より偵察隊を出し、財神廟及ひ小杉馬嶺大杉馬嶺を

偵察の衝



搜索せしめたるに敵兵は悉く退却し、我偵察隊は大杉馬嶺を占領せり。午前十一時少佐の本隊は治兒勾を發し大杉馬嶺に進み、此に宿營せしが、土人の言によれば、該嶺の西五十清里團嶽と云へる處に敵兵千餘人ありと云ふ。

十日は蓋平攻撃の豫定期日なるか故に、門司少佐の一部隊は急行して團嶽(村名)に至りしに、敵兵は昨日悉く退却せりと云ふ。土人の言によれば、大八嶺の南には尙ほ夥多の敵兵ありと、我前衛(第五中隊)は極めて警戒を嚴にし、難無く前進して大八嶺を占領するや、會々一清人の蓋平より來るものあり、之に就きて敵情を聞くに、彼曰ふ「蓋平は既に日本軍の陥る所と爲り、清兵は悉く走り去りて隻影無し」と。我兵乃ち嶺上に登りて之を望み見るに蓋平城は眼下に在り。土人の言に違はず、途上に復た一敵兵無し。故に門司少佐は一直線に全隊を進め、午後一時三十分を以て蓋平城内に入れり。

若し此門司部隊の運動をして、一層駿速快敏ならしめ、九日夜早く大八嶺に占據し、十日未明、嶺を降り、蓋平城の北東より敵軍の側背に出て之を夾撃せしめたらむには、同城攻撃の奏功は蓋し一層迅速なるべかりしに、其然る能はさりしは、他無し、門

清兵隻影無し

騎兵極めて乏し

連絡貫通の結果

大斥候の功

竹中少佐

司部隊の騎兵極めて乏しくして、前方偵察の迅速と完全とを得るに由無かりしを以て也。我軍隊に於て比較的騎兵の缺乏なるか爲に、此の如き遺憾を致せるは、後來の爲に我陸軍一般の好警戒と爲るに足るべき也。然れども、兎に角に第一軍と第二軍との真正連絡は茲に始めて貫通し、以て海城に於る我軍をして其左側の危殆を免かれしむるを得たるものは、實に此蓋平城占領の結果たるには言ふを俟たずして明かなり。

### 第廿六

### 大斥候の任務及び其成功

第一軍第二軍の真正連絡を貫通せるは、此蓋平城占領の結果たるに前述の如し。雖之に先ちて、夙に其連絡の端緒を開發したるものは、我大斥候の非常なる盡力に由れり。

是より先に旅順陥落し、金州逆襲の敵軍も亦大敗して遠く走りたる後、我第一聯隊(隊長隱岐大佐)第一大隊(大隊長竹中少佐)安太郎は秋家屯、普賴屯附近村落に宿營せ



勇悍中の

しが、十二月廿日上官の命令あり、曰く「該大隊は、大斥候隊を組織して、熊岳城と蓋平城附近との敵狀を偵察し、且つ第一軍との連絡を通すべし」と。

大田中尉

大隊長即ち部下に令して曰く「此大斥候は最も危険なり、勇悍中の最も勇悍なる者に非ざれば能はず、志願者は自から其旨を申し出てよ」と。我兵固より素養あり、此令を聞くや奮躍して之に應じ、従行せむとを争ふもの算ふべからず。竹中大隊長乃ち志願者を點檢し、其人を撰拔して七十名を得たり。此撰拔兵七十名を率ゆへき隊長の任務は、大隊副官太田中尉(米丸)に命せられたり。之に従ふ下士官は左の諸氏なり。

第一大隊特務曹長

田中實

第一中隊一等軍曹

吉野彌五郎

第二中隊二等軍曹

野口集美

第三中隊二等軍曹

中原某

第四中隊一等軍曹

田中鶴吉

精兵七十名

大斥候隊長太田中尉は部下七十名の精兵と共に各々非常用として道明寺乾飯三日分を携ふるの外には、糧食の準備なく、到る處民家に就き徴發して其飢を凌ぐべしとの命令を奉し、十二月廿日午前九時を以て一行隊伍を整へて秋家屯を出發せり。

時方に嚴冬酷寒、北風凜然として利刃の如く、飛雪紛々として流丸の如く、前途濛々茫々として、地理方針行程を定むると極めて難し、于家屯に一宿し、翌廿一日同處を發し、沿道其携ふる所の銀貨を以て、民家に就きて粟を徴發す。此邊從來米に乏しき處、戦亂以來支那南方よりの米穀輸入の途を斷られたるが爲に、各村絶へて米を藏するもの無く、僅かに貯ふる所の者は粟あるのみ。

廿三日熊岳城に着し、直ちに敵狀を偵察す。土民六七十人歡ひ迎へて、曰く「歩騎より成れる清兵若干は一昨日迄此に在りしが、皆蓋平及び山海關に向て逃走し、一人も在るもの無し」と。

是に於て我兵は敵の空營中に入り、其遺せる所の書類及び各物品を點檢し、始めて此附近其他の各處を守れる敵將の姓名を審かにし、且つ種々なる好材料を得たり。

此時我手に獲られたる所の地圖一葉は、極めて粗漏なるものなりと雖此一行の前途に關しては、大に参考の便を與へたり。

好材料を得たり

民家に就て徴發す各村米を藏するものなし



粗悪なる支那米

敵兵三千人襲撃を謀る

斥候隊危険を免る

乃ち電信局に闖入して之を破壊し、武庫中の兵器は運搬の便を得ざるが故に、悉く之を破壊したり。此日一行は始めて粗悪なる支那米若干を得て、肌腹を肥やせり。既にして、一行は漸く北に進み、敵の大部隊が蓋平に在るとを確知し、直ちに其附近を偵察せり。是より先に敵兵約三千人香家屯附近に在りしが、我大斥候隊の香家屯に宿したるを、探知し、之を掩撃せむと謀れり。然れども、此日大風雪にして天地晦冥咫尺を辨し難し、故に此地に慣れたる敵兵も此惡天氣に畏れて終に戦を開く能はず。我が大斥候隊は此の如き危険なる大敵の咫尺に在りたるとを知らずして、此地を通過し、幸にして危険を免れたりと云ふ。此香家屯に於る我兵危険に瀕せし一事は、當時我第一軍の間諜某氏偶々其附近村なる敵軍三千人と同處に在りたるが故に、眼前親しく支那軍が將に一擧の下に、我大斥候隊を掩撃せむとするを目撃し、手に汗を握りて之を苦慮し、我大斥候が襲殺せられむとするを危惧したりとて、其後右の間諜某氏は海城に還り、桂中將を始め各將校にも其趣きを語りしか幸にして、意外大風雪の爲に敵軍の掩撃を妨けたるか故に、我大斥候は其萬死の危険を脱るるを得たるなり。

大斥候任務の一半を得

第一軍萬歳の聲

第二軍萬歳の聲

非常の饗應日本飯

廿六日一行は、土門子、胡家屯及び下哈塔に於て蓋平の敵狀を偵察し、大に獲る所あり。是に於て、大斥候任務の一半を得るを得。廿八日一行は更に進みて、石間長村名に出つ。遂かに日本軍人三人の徘徊するを望み見て、是れ第一軍の斥候なるべきとを知り、一行欣然第一軍萬歳の聲は、覺へず七十餘人の口頭より迸發せり。之と同時に又第二軍萬歳の聲は、彼三人の絶叫する所と爲りぬ。三人中の一人は、軍曹にして他の二人は兵卒なり。直ちに此大斥候一行を導き、菜花勾に伴ひ、宿舍に一宿せしむ。其翌日太田中尉は是より二千米突なる小孤山の兵站部を訪ひ、其司令官に面會して此行の始末を告げ、第一第二兩軍の連絡玆に通せり。

同廿九日太田中尉一行は、海城に達し、桂中將に面謁し、具さに其來由を語る。閑院宮殿下陸軍騎兵少佐は、此一行の來着を聞いて、召され直ちに之を引見し、中將と共に一行の勤勞を慰め、非常の饗應を賜りたり。非常の饗應とは何ぞ、他無し、日本米の飯是れ也。是より先に、我兵站は氷雪の爲に、澁滯を極め、日本米は極めて缺乏せるが故に、第一軍第三師團海城に在る者は、桂師團長と雖、閑院宮殿下の尊貴と雖亦小豆と粟とを以て常食とせらるるのみ。況んや其以下をや。軍中傷者及び病者の外は、日本



厚遇優待

米飯を食ふとを得ざるもの既に久し。故に今太田中尉一行に對して特別に、日本米飯を賜はりたるは非常の厚遇優待たるを知るべき也。

萬死の決心

一行は海城に於て暫く其事狀を視察し明治廿八年の元旦を此地に迎へしも、今は直ちに歸途に就かむと欲し、其由を桂中將に告ぐ、中將之を留めて曰く、近日蓋平攻撃は第二軍の任務と決したりと雖、我軍よりも亦將に一大隊を派して、蓋平攻撃の第二軍に伴はしめむとすると期す。君等も亦此隊を待ちて、共に蓋平に向ふべし。然らずんば、歸途甚だ危険なり」と。然れども、太田中尉一行は當初固より萬死の決心を以て其任務に従事したるものなるか故に、復命の急にせざるべからざる所以を告げて、桂中將に謝し、決然一月三日を以て、海城を辭し、氷雪を冒かし、無人の山道を迂回すると四日にして、正白旗村蓋平を距る八里に出で、玆に恰かも隠岐大佐の枝隊に會して、始めて任務を完遂し、詳かに復命するを得たり。

功績多し  
せざる可  
けんや

太田中尉大尉候の任務は、實に重要なると言ふを俟たず、酷寒氷雪を冒かし、前程不明を極むる所の山道を跋涉し、孤獨の一小隊を以て、強勢なる敵中を經過し、以て能く其任務を完うしたるの功績は、豈に深く多とせざるべけんや。

騎兵不足  
の經驗

### 第廿七

#### 日本軍騎兵の不足より起れる經驗

我日本軍に於て騎兵の不足なるとは、遼東半島の如き土地に在りて、著るしく經驗を與られたると、固より枚擧に遑あらず。既に鉦瓦寨の役に於て其第一著大なる經驗を得たるとは、前章に於て之を記せるが如し。而かも、今又蓋平役の前に於ても、亦第一軍騎兵の不足なるか爲に、不利不便の著るしきとを見るに足れり。

太田中尉大尉候の一行が海城に来るや、實に廿七年十二月廿九日に在り、此一行の偵察せる結果によれば、當時海城と蓋平との間に於る敵兵は、其數たる僅かに千人に超へず、又其中間要地たる大杉馬嶺大八嶺の如きも、亦殆んど空虚なりしか如し、之を要するに、此際我第三師團にして、充分なる騎兵の餘裕ありしめたらんには、柞木城駐營の第十八聯隊第二大隊門司少佐の率ゆる所と共に、若干獨立騎兵三中隊(騎兵一中隊は大約將校五名下士十一名、騎兵百四十二名、乘馬百五十三頭なり)を以て、一月七日に於て、柞木城より營口に達する街道大石橋迄の間を搜索し、而かも一



好機會ありしなり

牽制運動其効を見ず

方は南進して、大杉馬嶺大入嶺を扼し、以て十日の戦は於て蓋平の側面背面を牽制するに於て有効なる運動を逞うするを得べきの好機會ありし也。果して然るときは蓋平の攻撃に於て彼れが如き多數の死傷を出たさざるも能く鳳凰山の要地を攻奪すべく、又蓋平河岸の敵軍をして其後背を顧み、早く屈撓せしむるを得べかりしならむとす。

然れども當時我騎兵の不足なるが故に海城方面の警備の爲に殊に必要なる騎兵の任務あるを以て、其餘騎兵は幾何ばくも有らざる也。故に蓋平攻撃の際（一月十日）第三師團より出す所の一部隊は僅かに歩兵一大隊のみにして騎兵中隊なるもの無し。其牽制運動が殆んど効力を見ざるの遺憾ありしめたるものは抑も亦宜べならずや。

# 日本陸軍史卷八

## 海城及鳳凰城方面の戦闘

### 第一

#### 海城に於る清軍の來襲

清軍清應の便を失す  
來襲二回  
又來襲二回

海城の地たる遼東半島の中樞たるを以て、我第一軍第三師團が此地に占據したるより後、遼東の清軍は其策應の便を失し、糧食の供給も亦不便を加ふるを以て、日を逐て彌よ太甚たし、是に於て清軍の將帥は専ら熱心して海城を回復せんことを企て、廿八年一月に及びて、又大舉して海城に向て來襲する。二回に及びし、毎回我第三師團の撃破する所を爲り、而かも其二月に至り、又大舉して來襲する。二回に及びし、亦又我軍第三師團の撃破する所を爲りて、敗走せり。今項を分ちて其毎回の戦狀要領を記せむに、其來襲戦闘の要點、左の如し。

第一回 明治廿八年一月十七日午後四時來襲開戦、午後五時三十七分止戦



敵の兵力 歩兵 約一萬五千 砲 十三門

第二回 明治廿八年一月廿二日午前九時五分開戦、午後二時三十分止戦  
敵の兵力 歩兵 約二萬餘 砲 十四門

第三回 同年二月十六日午前九時卅分開戦、午後五時止戦  
敵の兵力 歩兵 約二萬餘 砲 十四門

第四回 同年二月廿二日午前九時四十分開戦、午後二時三十分止戦  
敵の兵力 歩兵 約二萬餘 砲 十四門

之に對する各回の戦に於る我兵力は左の如し

第一回戦

- 第三師團司令部
- 第六聯隊(第三大隊欠)
- 第十八聯隊
- 第五旅團司令部
- 第六旅團司令部
- 第七聯隊(第三大隊欠)
- 第十九聯隊(第三大隊欠)
- 騎兵第三大隊

第二回戦

- 砲兵第三聯隊(第二中隊欠)
- 衛生隊
- 計 歩兵 九大隊
- 騎兵 二中隊
- 砲 三十門
- 第三師團司令部
- 第五旅團司令部
- 第六聯隊(第三大隊欠)
- 第十八聯隊(第三、第五、第六、第八の四箇中隊欠)
- 第六旅團司令部
- 第七聯隊(第三大隊欠)
- 第十九聯隊(第三大隊欠)
- 騎兵第三大隊
- 砲兵第三聯隊(第二中隊欠)
- 衛生隊
- 計 歩兵 七大隊と四中隊
- 騎兵 二中隊
- 砲 三十門



第三回戰

- 第三師團司令部
- 第五旅團司令部
- 第六聯隊(第三大隊欠)
- 第十八聯隊(第一大隊(第一中隊欠))
- 第六旅團司令部
- 第七聯隊(第三大隊欠)
- 第十九聯隊(第三大隊欠)
- 砲兵第三大隊
- 豫備砲廠
- 分捕野砲
- 衛生隊
- 計 步兵 六大隊と三中隊
- 騎兵 二中隊
- 砲 四十三門
- 第三師團司令部
- 第五旅團司令部
- 第六聯隊(第二大隊欠)

第四回戰

- 第十八聯隊
- 第六旅團司令部
- 第七聯隊(第三大隊欠)
- 第十九聯隊(第三大隊欠)
- 騎兵第三大隊
- 砲兵第三聯隊
- 豫備砲廠
- 分捕野砲
- 衛生隊
- 計 步兵 九大隊
- 騎兵 二中隊
- 砲 四十三門

第二

海城に於る我軍の防禦及清軍の兵力戰略

前章に於て既に記せる如く海城の四方平垣開豁殊に其西北南は渺々たる廣野平原なりと雖城に附近に四五の高邱峙立して以て自然に此城の外衛たる地勢を具

高邱峙立



せり其高邱は即ち左の如し

(一) 瞭甲山 (或は亮甲山とも記せるものあり)

城の西方千五百米突の處に在り。

(二) 唐王山

城の西南二千五百米突の處に在り。

(三) 歡喜山

城の北方

(四) 双龍山

城の北方

守備を嚴にす

是より先に、昨廿七年十二月十九日我軍紅瓦寨の戰に捷ちて海城に凱旋するや、更に同城の守備を嚴にし、第五旅團大迫少將の率ゆる所は城の西南部に、第六旅團大島少將久直の率ゆる所は城の東北部に舍營して、各其方面を警備し、其前哨として、瞭甲山及び唐王山には第六聯隊隊長塚本大佐勝藏及び第十八聯隊隊長佐藤大佐を配備し、双龍山には第七聯隊隊長三好大佐を備へ、歡喜山には第十九聯隊隊長粟

海城回復の難

宋慶日本軍の整備を知らず

清軍の兵力

敵軍の腹

飯原大佐を配備し、此各隊より各中隊遞番交代して各山上要地に陣し、而かも、此他に騎歩斥候の前哨線外に發遣せらるるもの若干組ありて、警備至らざる所無し。又、後方兵站との連絡は困難ながらも、我兵站主務官の盡力に由りて、大孤山より岫岩を経て海城に供給すること、陸續として斷へず、故に彈藥、糧食共に完整し、敵軍假令三、四万の優勢を以て來り攻むるも、海城を回復するに難きは必然の勢にてありき。

然ども、清軍の將帥は、我日本軍の此の如く兵備の完整せるとを知らず、以爲らく『日本軍は、遠く朔北に入りて暴露すると已に久しく、糧食缺乏、此氷天雪地の中に在り、其兵力の日に倦勞せると必せり、故に海城一舉して陥るべき也』と。

清軍が海城に向て來襲せるものは鎮邊軍、吉林親軍營隊、敵懷營、靖邊營、鎮東營、及び韓邊外の部兵等を合せて大約一萬五千人、砲十三門、其將校は吉林將軍長順、黑龍江將軍依克唐阿、及び韓邊外等なり。

敵は遼陽街道より數線に分れて、海城に向へり、我偵察騎兵の偵察する所によれば、一月十五日、敵軍大約二萬、遼陽街道普賴屯海城を距る凡そ五里餘、双廟子、乾線堡、海



漸次南進

城を距る約四里十丁等に在り。漸次南進するもの如し。師團長桂中將は、參謀鑄方大尉德三をして敵情を視察せしむ。然れども午後二時を過くるも、敵は前進の狀無く、其向ふ所を詳かにする能はず。

既にして、我斥候騎兵の報あり。曰く

『敵兵約二千は進みて柳河子に入れり。柳河子は海城を距る三里弱遼陽街道の枝路に在り。』

之に次て將校斥候は報して曰く

『敵兵三縱隊は、南に達み、脱龍寨海城と普賴屯との街道に在り。海城を距る四里強、及ひ楊相公屯に向ひ。又別に敵兵約五六百は大富屯海城を距る二里餘に進入せり。』

是に於て、桂中將は、敵軍が彌上海城に來襲するの計畫たることを確知したり。同十六日、我參謀士官は歡喜山に登り敵狀を望察したれども、此日霧深くして、充分なる遠望を遂ぐる能はず。時に將校斥候は、返り報して曰く、

『敵は長虎台海城の北方相距る二里弱より更に沙河沿及び小王屯に進入し、民家

霧深く遠望を遂ぐる能はず

連綿三里に亘る

一千里眼界豁然

の土壁を穿ちて銃眼を設くるものあるを實見せり。』

幾はくも無くして午後一時頃、敵兵約五百交界台より展開して進み來り。同十七日來明より敵の大兵遼陽街道に顯はれ、其前隊は漸次展開し、其本陣は長虎台の後方に在り。其左翼は頭河台海城を距る二里餘北東に在りより、其右翼は牛莊街道二台子波羅堡子に至る迄、弧線狀の攻撃隊形を取り、連綿三里に亘り、海城を包圍せむとするもの如し。其撤兵線は二里或は三重なり、兵數大約一萬二三千に降らず。而かも、敵の主要なる部隊は大富屯海城の東北約一里餘附近に在り。時に一月十七日、滿目平原積雪、暁々として、銀世界の如し。我師團長は、軍司令官野津中將時に來りて海城に在りに、隨ひ双龍山を巡視し、歡喜山に到り、俯して、前面を望めば、一望千里眼界豁然として、一つも蔽遮するもの無し。故に今や遼陽街道より南に向て進み來る敵軍が、整々堂々、其歩兵の展開し、騎兵の馳驅する景象は、燦然として、畫くが如く、眺望の壯且つ美なる人をして快と叫ばしめたり。

第三



### 兩軍の戦闘

歡喜山を以て中央と爲す

我軍は歡喜山(城)の北方を以て中央と爲し、砲列を其山上に布き、其山麓即ち教軍場には、第十九聯隊第一大隊長藤本少佐太郎をして民家の土壁に據らしめ、我右翼双龍山には第七聯隊長三好大佐三個大隊を以て遼陽街道に備へ且砲列を山上要地に布けり。

我左翼は叫廠村、徐家園子に據り、第十九聯隊第二大隊第三大隊を以て之に備へ、同聯隊長粟飯原大佐之を指揮す。且砲十二門を分ちて之を徐家園子の南端及び北端に布列せしめたり。他の諸隊は皆海城の西門及び南門外に集合せしめ以て豫備隊と爲し、大行李及び彈藥縱列も亦各戦闘準備を整ひて以て次の命令を待たしめ、別に第五旅團の第六聯隊をして、原甲山上に據らしめ、且つ其一箇大隊(隊長小野寺少佐)をして歡喜山に麓に備へしめ、騎兵大隊は遼陽街道に出て之を警戒せり。三好聯隊(第七)の前哨大隊より遼陽街道に派遣せる將校斥候は、十七日午前六時双龍山を發し、北方に進むと二里餘にして頭河堡に達し、十時に於て報告せり。曰く

頭河堡に進む

『敵の縦隊は其先頭たる歩兵約四百、騎兵約四十遼陽街道より頭河堡に進み、尙ほ南進せむとする景狀なり。』

前哨大隊長富永少佐(政利)は此報告を得るや、直ちに双龍山に登り、敵情を望察し、一面は左の報告を作り、一面は直ちに守備線各哨兵を戒め戦闘準備を整へしめ、憩水溝双龍山の西南麓に在りに備へたる前哨第八中隊長淺村大尉及び立子村に在る前哨第五中隊長溝口大尉をして、各其隊を率ゐて戦闘陣地に占據せしめたり。富永少佐が此際報告せる所は、左の如し。

二台子に進み来る

『午前十時四十分敵の先頭部隊約五百は、既に二台子海城を距る北方一里に入りたるを實見す。尙其後續部隊は數旗の旌旗を建て、二台子に進み来るを見る。』三好大佐は、直ちに進みて双龍山に登る。是より先に第七聯隊の第三大隊は海城北門内に集合して師團長の命令を待ち居たるに、幾はくも無く前進の命令を受け、既に憩水溝に來着せり。時に午後一時五分。

我第十九聯隊の前哨大隊隊長小原少佐は前夜より既に歡喜山下に警急舎營し居たるが、此日午前八時敵は延長線面を以て前進し此方面に迫らむとするもの、如



し。同聯隊長粟飯原大佐は砲兵及び各隊を配列し、以て敵兵か或最良射程内に入るを待てり。

弓状包擁の形  
緩射たるのみ

然るに、敵軍は、双龍山、歡喜山との前面遠くより弓状に包擁の形を爲せるのみにして、敢て容易に我射距離内に進入せず。敵の右翼波羅堡子の方面に進みたる者も亦敢て我防禦線に觸接せず。獨り歡喜山西方及び西南の敵は稍や前進し來り、遠距離より我陣地に向て射撃したりと雖、我兵は寂然沈靜し、敢て之に應射せず。彼亦緩射したるのみ。

茲に、三好大佐は、午後零時、第七中隊(前哨本隊)をして双龍山の南麓に開進せしむるに際し、第六中隊海城に留め置かれたる豫備隊の一部亦此處に増發せられ、急歩來着したるか故に、三好大佐は之をして第七中隊の左方に集合せしめ、一時廿分に至り、第八中隊をして双龍山砲兵陣地の左翼に、第六中隊をして右翼に展開せしめたり。此時、敵は二台子より漸次に進み、西艾塔堡子の南端を占領す。其兵、約歩兵千餘騎、兵百五六十なり。然れども、敵は其脚を此に停め、敢て前進して、我防禦線に近づくを爲さず。

右翼攻撃

敵砲沈黙

第十九聯隊は、敵兵の近接を待つと久しと雖、敵は常に二千米突以上の遠距離を保ちて近かず。正午頃、我が左翼に迫ると、大約八百米突に及ばむとせしに、忽ち變して退却し、千二三百米突の位地に停止し、敢て復進せず。我兵は頻りに扼腕し、敵の遅緩を焦燥しつゝ、居るに當りて、午後二時四十五分始めて師團長の命令あり、曰く、『貴官第十九聯隊長粟飯原大佐を云ふは、眼前の敵兵を驅逐する爲、其聯隊の第二大隊及び北門に集合せる第十八聯隊の第三大隊並に砲兵一箇中隊を率ひ徐家園子方向より敵の右翼を攻撃すべし。』

粟飯原大佐は此命令に従ひ、直ちに前進を始め、而かも第十八聯隊の第三大隊は牛島少佐之を率ゐて、三時三十分、徐家園子に來會せり。是より先に砲兵中隊は、徐家園子東北方の陣地に在りて波羅堡子なる敵砲と相對して射撃を始め、午後三時卅四分、第十九聯隊の第四中隊は、前進して敵の砲兵陣地側背より一齊射撃を行ひしかば、敵砲は終に沈黙せり。此時波羅堡子と安村堡子との間に在る敵の歩兵は約千四五百米突の距離に停佇して時々僅かに抬銃を發射するのみ。粟飯原大佐は之を見て牛島少佐に命令し、其大隊(第十八聯隊の第三大隊)を以て即時前進し、安村堡子より



右側攻撃

敵の右側を攻撃せしむ(四時)

牛島大隊は此命令に従ひ前進するを見るや、安村堡子の敵は退却を始む(四時十分)四時廿分、粟飯原大佐は更に令を下たし部下第十九聯隊の第二大隊(隊長藤本少佐)第五第六二ヶ中隊は、波羅堡子に前進せしめ、其第八中隊は右翼を爲りて前進せしむ。而かも、歡喜山下に控へ居たる小野寺大隊(第六聯隊の第二大隊にして、粟飯原大佐の部下には非ず)は、粟飯原大佐の部下に非ずと雖、臨機の必要より、大佐は上官の權能を以て之に命令し、第十八聯隊第十九聯隊の中央後に續きて波羅堡子に前進せしめ、砲兵中隊も亦共に前進せしめたり。是に於て十八聯隊の牛島大隊は最西に在り、十九聯隊の第二大隊は最東に在り、小野寺大隊と砲兵とは中間に在り一齊に前進し、十九聯隊の他の二ヶ小隊(工廠に在りたるものも亦之と同時に波羅堡子の方向に突出せり。牛島大隊の三箇中隊は最も先つ前進せしを以て敵の砲銃彈丸交も之に雨注せるか故に、傷つく者數名あり。牛島少佐は、徐々前進せしは却て死傷を多からしめむ。寧ろ一氣呵成急進に如かざるを思料し、一ヶ中隊の掩護の下に進むたる二箇中隊に命じて、直ちに突貫せしめ、之に次て其一箇中隊にも亦突貫を命じ

臨機の必要

波羅堡子の占領

三箇中隊猛然突貫終に波羅堡子を占領したるを以て他の諸隊も亦皆前進して同堡子に達せり。

退くと迅速

敵の右翼は、此一突撃に辟易し、全く波羅堡子を棄てて退却し、大富屯小富屯の方向に退きたり。此時彼我の距離千二三百米突に達せしを以て、我兵は追撃せずして、急歩之を追ひ、同時に矩形追撃を敵軍に施さむと欲し、歡喜山の守備隊をも前進せしめ、大島旅團長(久直親)から之を指揮し、且同少將は追撃兵全部の司令官として奮進したれども、敵兵の退くと迅速なるか故に、終に追及する能はず。

動作鈍し

是に於て、我左翼諸隊は波羅堡子の北方約千米突なる列樹の間に停止し、砲兵中隊も亦此に達し、大富屯と同山との中間に達したる頃には、夕陽西に傾き午後五時を過ぎたるか故に、桂師團長は命令を下し追撃を停止せしむ、各隊各々其固有の位置に歸復したるが故に、敵軍は普賴屯及び遼陽方面に向て退却せり。

將帥の無識

此日の取清軍は、我右翼に對して、動作するに極めて鈍きのみならず、其波羅堡子に向へる者亦常に我が射程に近づくことを敢てせず、終始常に躊躇して、千七八百米突の遠距離を保ち、無効なる急射撃を行ふと屢はなりき。其將帥の無識なるを推して



杜撰なる  
海城回復  
の豫算

知るべし。

此の如き無識無策なる支那軍なれば、海城來襲の目的を一つも達する能はずして、失敗退却せるは固より怪むに足らずと雖、彼の清將は、杜撰にも、海城回復の豫算を抱き居るものと見え、其來襲追攻の豫算書を調製して之を携帯せるものあり。大富屯附近に向ひたる我將校斥候が此戰の翌日途上敵將の死骸を檢して獲たる所の書面は左の如し。

十二月十九日 攻城

(清國の大陰曆なり以下之に倣ふ)

回廿日 奪地

同廿一日 滅賊

同廿二日 慶功

同廿三日 犒賞

同廿四日 假武

同廿五日 修文

同廿六日	招兵
同廿七日	撰將
同廿八日	全勝
同廿九日	凱旋
同三十日	過年

海軍の死傷

我軍は下士卒戦死三名のみ、負傷者將校三名下士卒三十五名。敵軍の死屍二百に降らず、其負傷者の數は詳かならず。

戦利品

戦利品は、大砲四門、抬鎗五挺、小銃五挺、小銃彈藥若干なり。

### 第四

## 海城に於る清軍第二回の來襲

廿八年一月の初めに當り敵將宋慶は、海城回復の方略を畫し、將に北方よりは、吉林、黑龍江、諸營並に韓邊外の部兵一萬餘を發せしめ、南西よりは、徐邦道の部下十一營、章鼎臣の部下八營、馬玉崑の所部十營、姜桂題の部下十二營、劉世俊の部下八營、合計

宋慶海城  
回復の方  
略、徐邦道、  
章鼎臣、  
姜桂題、  
劉世俊



皆記名提督總兵を

宋慶の心算

四十九營を以て北東に進み、南北合撃して海城を陥れむと謀り、其進攻期日は舊曆十二月廿日、即ち新曆一月十五日を以てせむとを各軍に約したりしなり、然れども、我第二軍第一師團混成旅團の進軍は、彼れ宋慶の意外に迅速に出て、蓋平城は、一月十日(舊曆十二月十五日)を以て陥落したるが爲に、前件宋慶の方畧豫算は、忽ち一齟齬を來したり。

是に於て、宋慶は營口の危殆を防ぐが爲に、海城進攻の期日を更め、宋慶親ら大兵を率ゐ、一月十二日は、二道溝營口港を距る十里十五丁に駐まり、同十三日、宋慶は、營口を巡視し、兵站事務の官司を召し、糧運の事を指揮し、而かも、其本營を後家油防に移したり、後家油防は營口を距る二里餘)

三將各自抗立の緩慢

吉林將軍長順及び黑龍江將軍依克唐阿等は、最初の約束に従ひ、一萬餘の大兵を率ゐて、遼陽を出發し、一月十五日、既に海城附近に來りたりしと雖、前陳の如く、宋慶豫定の合撃方略は齟齬したるが故に、長順、依克唐阿の軍隊のみを以て、此月十七日、海城の咫尺に迫りたりと雖、三將各自相抗立し、之を統括するもの無く、作戰の緩慢を極めたる、其射撃の終始、遠距離に於てし、無効無益の射撃を事としたるか如き、徒ら

充分なる追撃を施すに能はず

に、彈藥を耗後したるに過ぎざりき、然れども、此日我軍は、專はら持重の策を以て、敵兵の近接を待ち、爲に午、前より午後四時に至る迄時間を經過し、其敵の右翼を破りて之を追撃せむとするや、既に日没に際せしか故に、充分なる追撃を施すと能はずして止めり、敵將の不明なるや、此日我軍の終日沈靜したると、其追撃を充分に遂げざるを見て、以て我軍の寡少に由るものと推察したるか如し、故に敵軍は數日を出でずして重ねて海城に來襲せり。

(註) 以上本文清軍總帥宋慶の方畧及其各軍の運動は、支那最近出版の日清戰爭始末記事、北京官報並に在天津西洋人の諸報等を參考して之を記せるものなり。

### 第五

### 清軍の方畧及我軍の防禦方略

一月廿二日  
第二回の來襲は一月廿二日に在り、此日の清軍は前回(十七日)來れる敵軍に加ふるに、進軍楚軍(徐邦道之を率ゆ)を以てし、合計兵員約二萬餘、大砲約十四五門なり。一月十七日退却せる、敵將長順及び依克唐阿等の諸隊は、敢て遠く去りたるに非ずして、普賴屯、鞍山站、乾線堡等に駐りたるものなり、故に一月廿一日を以て彼等の諸



防禦陣地  
前面に現  
はる

縱隊は乾線堡其他附近の舍營を發して海城方面に向て行進し、同廿二日は、未明より我防禦陣地の前面に現はれたり、而かも敵の大部隊は牛莊街道に接近せる小富屯及び大富屯海城を距る一里強を目的として來集し、又一隊は長虎台及び後三里橋より前進して、歡喜山双龍山の中間を窺ひ、海城に突入せむとする勢を示したり、雖我歡喜山の備極めて嚴整にして犯すべからざることを覺り、我歡喜山の砲兵陣地を避けて迂回し、沙河園の北裏を潜行して波羅儀子に前進せり。

又敵の別隊は(一縱列)非常延長を以て湯河堡子海城の北方五里附近より南に進み、双龍山前の二台子に向て前進せり。

我防禦方  
署の目的

我軍は夙に豫定せる防禦方署を以て、敵の主力を逆撃して全線一時に之を撃退するの目的を確持したるか故に、桂中將は、此日敵情を料察し、敵の主力は其右翼に在るべきことを判断せり。故に第十八聯隊長佐藤大佐に命じて曰く。

『貴官は歩兵第十八聯隊の第三隊及び第七中隊並に歩兵第六聯隊の第一大隊、長岡本少佐負傷中なるか故代理大隊長徳田大尉及び砲兵第二大隊を率ひ機に應じて敵の右翼を攻撃すべし』

日本軍の  
寡少

### 第六

### 海城に於け第三回清軍の來襲

彼我斥候  
の衝突絶  
へず

我軍は海城の戦に於て、既に二回の捷を奏せりと雖、敵軍は依然として海城近附に駐營し、敢て遠く去らざるものは何そや、他無し、我日本軍兵員の寡少にして、敵取るも之を充分に追撃するの力に缺乏なるを以て也。

海城回復  
の計圖

故に、清軍は、前來兩度の敗を以て敢て意とせず。一面は遼陽街道乾線堡頭河堡の間に出沒し、普賴屯附近に駐屯し、他の一面は、牛莊附近に駐屯し、我前哨斥候との衝突は日々絶へざりき、而かも、山海關方面より、應援増加として營口附近に來集せる清兵も亦三十營に降らず、是に於て、清將は重ねて其部下諸將に命じて海城回復の計を企て、二月十六日を以て、又來襲せり。

清軍の方  
署

此日の來襲は、清兵大約二萬餘、敵懐營、清邊營、鎮東營、鎮邊營、老湘營等砲十四門にして、吉林將軍、黑龍江將軍、依克唐阿、記名提督徐邦道、及び總兵李光久、梁永福等之を分率せる者也。

清軍此日の方略は、大約左の如し。



一左翼

吉林親軍營其他步騎兵約四千  
砲 四門  
吉林將軍長順之を指揮し、遼陽街道頭河堡より進み、双龍山に對し二台子の南端に大砲二門及び齊頭堡子の南端に大砲二門を備へ、其後方なる西土城子に豫備騎兵約四百を置く。

一右翼

楚軍及び老湘營等步兵約三千餘  
砲 四門

記名提督徐邦道之を率ゐ、柳公屯より營口街道に出て其先頭千餘人の一隊は進みて唐王山の西方約七八百米突なる一高地を占領して、砲列を布き、以て我唐王山の兵に對し、其後續部隊は大縱列を以て柳公屯及び皮廠八里河子に入り漸次前進せり。

一中央

黑龍江諸營の步騎 約一萬内外  
大砲(無烟火藥の速射砲) 四門

將軍依克唐阿之を率ゐ、長虎台より進み、駱軍堡に於て速射新式砲二門を備へ、一面は波羅堡子に展開し、波羅堡子にも亦速射砲二門を備へ、以て我

戦面三里に展す

大砲四十門

歡喜山の砲壘を射撃す。

其步兵は不規則なる撤兵を以て直ちに敵軍場なる我防禦線に迫らむとす。此の如く敵は、前面兩度の運動に比すれば、此日の前進は頗る活潑にして、其左翼は遼陽街道よりし右翼は營口街道に至り、其戦面の長さ殆んど三里に展す。と雖、其戦線は處々斷絶して彼此の連絡は頗る不完全なりしと云ふ。

第七

我軍の配置及び其戦況

我軍の兵數は大約前回一月廿二日の役に同じ。然れども、其大に異なる所は、大砲の増加に在り。是れより先に我第一軍の豫備砲廠及び分捕野砲が、昨年後方義州に在りしもの、皆大舉して海城に進行せしめ、此日の戦守に加はりたり。故に、步兵各隊及び騎兵砲兵諸隊は、前回に同じと雖、大砲は増加して、總計四十三門と爲りたるを以て、我兵力は一層強固銳利を加へたりき。

我諸隊は、各擔任せる防禦線上に陣し、整々肅々として、靜かに敵軍の接近し來るを



三里橋子

待ちしが、當日午前八時過ぎ双龍山前哨中隊の小哨より敵兵來襲の信號を傳へたるが故に第七聯隊第一大隊長内藤少佐は其部下各中隊に命じて集合せしめ、其第二中隊は豫備隊として甜水溝に留まり軍旗第七聯隊隊旗を護衛せしめ、其他の中隊は各戦線に配備せられたり。

午前九時過ぎ千餘の敵兵は五道溝二台子の間より我に向て前進し、且つ三里橋子(双龍山の西方にして歡喜山の東方に在り)の北方丘陵に速射砲四門を備へ、我双龍山及び歡喜山の側面に向て之を射撃す。内藤大隊長は乃之を防撃する爲に一個中隊を双龍山の東方丘陵に、而かも他の一個中隊を同山南麓に展開せしむ。十一時頃三好聯隊長は其部下第二大隊長富永少佐より二個中隊を分ちて之を内藤大隊に付加し、其一個中隊をつを前面左右端に展開して、敵の接近するを待たしむ。

初め敵の左翼即ち吉林兵は、我双龍山方面の兵寂然沈靜して敢て動かざるを見て、我兵の寡少なるに由りて然るものと推料したるにや、午前十時頃、齋藤堡子の南端に約四五百の歩兵を展開し、稍々猛烈なる射撃を爲しつゝ、前進し、終に全く齋藤堡子に入り、此時迄敵の左翼兵數此堡子に入るもの増加して、約二千餘人に達せしか

肅然寂然

我全線一齊に現はれ出つ

死傷累々に横はる

ば、彼は其衆を恃みて、我兵の寡小を侮り、喇叭を吹き、喊聲を揚げて、急步攻撃を行へり。我第七聯隊は尙ほ掩堡内に伏して、之に應せず、肅然寂然として、人無きか如くなるが故に、敵兵は勢に乗じて益す前進し、其先頭は、我陣地を距る四百米突の處に達し、又他の敵兵一部隊は約千餘騎、前面大薪屯方面より來り、我前哨中隊(第七聯隊)に向て射撃を開始せり。時に午後零時、我全線(右翼)は十分に時機を量り、一齊に現はれ出て、猛烈なる一齊射撃を行ひし、此敵兵は信地に伏臥して能く我か射撃を避け、尙ほ能く前進して殆んど二三百米突の處まで接近せり。我砲兵中隊は、歩兵の撤兵に砲列を布きて歩兵を援け、歩兵は之に力を得て彌よ射撃を猛烈にし、敵兵の斃るゝもの眼前に累々として積雪の上に横はれり。敵は終に支ゆる能はずして、右往左往に紛亂し、争て二臺子方面に潰走せり。

又大薪屯に進みたる約千餘騎の敵兵も亦此勢に辟易し、共に二台子方面に敗走せり。時に一時五十分。

是に於て第七聯隊は二箇中隊を出だし、前方齋藤堡子を占領せしに、敵は西土城子北方の高地に集合したるを以て、我は敢て之を遠追せず、其陣地に歸復せり。



第八

我中央歡喜山及び左翼方面の戦況。附板木城の小戦。

黒龍江諸營の兵

敵の中央たる黒龍江諸營の兵は、依將軍の八卦の大旗を曉風に翻へしつゝ、長虎台より前進し、前面なる唵軍堡に侵入し、是より西南に向て撤兵線を張り、波羅堡子の村端に速射砲二門を備へ、唵軍堡には無烟火薬の速射砲二門を列し、千二三百米突乃至三千米突の距離を以て射撃を開始し、以て我軍か三面より發射する火力に抗し應戦せり。又其歩兵は展開し遠距離より頻りに小銃を發射しつゝ、前進せしかば、大島第六旅團長は山上より、各隊を指揮し、富永大隊(第七聯隊第二大隊の二個中隊を山の西麓教軍場村名)に伏せて敵の接近を待ち設けたれども、敵は其歩兵を雪中に臥せしめ敢て深く進入せざりき。蓋し敵は我歡喜山の防禦堅固なるを見て之を我中堅と思料し、乃ち此方面を牽制し、而かも其左右兩翼をして強く我を攻撃せしむるの策に出でたるもの如し。故に此方面は單に砲戰に過ぎず、而して我歡喜山砲列の射撃は距離の測定頗る精確にして痛く敵兵を悩ましたるを以て、終に支ふ

敵兵深く進入せざり

砲戰

敵兵退却

被我死傷及戦利品

板木城の來襲

ること能はず。午後三時頃より退却を始め、我第十九聯隊隊長粟飯原大佐は三個中隊を以て之を追撃し、波羅堡子に至りて旋回せり。我左翼第五旅團は、此日瞭甲山に據りて、徐かに敵の接近を待ちたりしも、此方面の敵は容易に前進せず。故に我新來の野砲四門を以て我より攻撃を始めたるが、敵砲は一も、我陣地に達する能はず。而かも第六聯隊の二箇大隊は銃を蓄へて山麓郭家屯、及び蘇家堡に伏し以て敵の接近を待ちたりと雖、終其効無く、午後に及びて、我唐王山の砲兵も亦砲列を開きて射撃を始をひるや、幾ばくも無くして敵兵は退却したるが故に、石田大隊第十八聯隊の第一大隊も亦充分の戦を爲すを得ざりき。

死傷及び戦利品 此日我戦死者は下士卒三名のみ、負傷者は將校二名下士卒九名なり。敵の屍体戰場に遺棄せる者百五十餘、其傷者の數は未だ詳かならず。捕虜下士卒二名なり。

戦利品は小銃廿六挺、拾鎗三挺、小銃彈藥二千六百五十發。清軍の一部として、其總兵楊、胡、馬、彭、等か率ゆる所の混合兵數約五千、騎兵約二三百、砲二門を以て、二月十七日朝七時十分板木城に來襲せりと雖、我守備兵林大隊(第十



九聯隊の第三大隊の爲に逆撃せられ、三十餘の屍を遺して忽ちに潰走せり。捕虜一名あり。敵の負傷は百名に下らざるべし。我兵一人も死傷無し。其捕虜の言によれば、此敵は遼陽街道より來れるものなるも、其柘木城に接近し、戦に與かりたるものは、其前進部隊約歩兵千、騎兵三十なりしと云ふ。

### 第九

#### 海城に於ける第四回清軍の來襲

敵軍の緩漫不活潑は、前來に記する如しと雖、顧みて日本軍の實況を察すれば、是れ亦其機關の具備完整を缺く所あるが爲に、海城を出でて遠く敵の敗兵を追撃殲滅すること能はず。故を以て、敵軍は幾回敗るるとも、亦敢て遠く走らず、單に海城附近に退却し、各地に出沒するを以て、二月十六日以後に在りても、海城々外前哨斥候の彼我衝突は日として之れ無きは無かりき。

二月廿一日、午前九時、敵軍二萬餘兵は前回の諸隊に同じ將軍長順、依克唐阿、提督徐邦道及び副將劉雲桂、黃得勝、李光久、梁永福等之を分率して又海城に來襲し、唐王山

機關の具備完整を欠く

海城來襲

彼我の死傷

遼東膠署の難

方面に、砲四門遼陽街道に、砲四門、安府堡子方面に砲六門を現はして遠距離より射撃したれども、其効力極めて薄し。我各方面兵力は二月十六日と大約同じは例に依り沈靜して、彼の接近を待てりと雖、彼は敢て深入せず。獨り我唐王山方面の敵は稍前進して、我防禦線に近づきしを以て、我第十八聯隊の撃退する所と爲り、百餘の屍体を山前に遺して退走し、其餘の敵も亦午後二時頃に退却せり。我戦死者は僅かに下士卒二名のみ、負傷將校一名、下士卒五名のみ、敵の捕虜二名ありき。戦利品無し。

### 第十

#### 鳳凰城方面の戦闘

我第一軍が、鴨綠江を渡り、九連城を占領したるは、廿七年十月廿六日に在りしも、是より進みて遼東を經略すること頗る難事にてありき。蓋し清軍の劣弱にして、到る處我日本軍の敗る所と爲るは、殆んど必然疑ひ無しと



萬の困難  
預食難  
運送

雖も盛京省の曠漠たる其鴨綠江より北西に向て我軍を進むる道路の極めて粗悪なるが故に我糧食彈藥萬般運送の極めて困難なるは勿論にして我陸軍從來歐洲大陸文明國の制を採りたるものを以て直ちに此盛京省地方の如き未開の方域殊に道路の粗悪人家の稀疎なる處延長路程に行るに十萬の大兵を以てすることの極難なるも亦怪むに足らざる也。

是より先に我日本軍は鴨綠江の天險清軍防禦の周密且つ堅固なるべきことを豫想し十分死力を奮ふに非されは此江流を渡ること能はさらむと豫め覺悟したりしに意料外に敵軍は粗漏にして同江天險を充分に利用すること能はず我軍は僅かに一日の攻撃を以て九連城安東縣一帶の要地を占順するを得たり是に於て我軍は其第五旅團旅團長大迫少將をして九連城より左に分れ大東溝大孤山の要地を占領せしめ第十旅團旅團長立見少將をして九連城より右に進み鳳凰城を占領せしむ時に十月卅日なりき。

鳳凰方面の戦闘を記するに先ちて請ふ先つ其道程の要を左に記せむ。

○九連城より奉天府に至る里程

鳳凰城の  
占領

九連城より  
奉天府  
に至る  
里程

主要なる地名

各地間の里數

里數の計

鳳凰城より  
遼陽に  
至る  
里程

草河口

摩天嶺

九連城

野猪園

湯山城

高麗門

鳳凰城

○鳳凰城より遼陽に至る里程

雪裏站

通遠堡

草河口

連山關

摩天嶺(支那人は高嶺と)  
配するもの多し

甜水店

浪子山

四里十五丁

三里廿五丁半

四里十五丁

四里十丁

七里五丁 (鳳凰城より起算)

七里廿五丁半

七里廿五丁半

七里廿五丁半

七里廿五丁半

五里卅丁半

五里卅丁半

五里五丁

八里四丁半

十二里廿丁半

十六里卅丁半

十四里卅丁半

廿二里廿丁

廿八里十五丁

卅三里廿丁



蛾眉莊	七里廿五丁半	四十一里十丁半
遼陽城	一里廿五丁半	四十三里

小計九連城より遼陽城まで

遼陽より奉天府まで	五十九里卅丁半
	十五里五丁

初め立見旅團の鳳凰城を占領する十月卅日同城守衛の支那兵約三千は、半は連山關方面に走り、半は海の方面に指して逃走せり。我第一軍司令官は、立見旅團に命し、鳳凰城を以て假根據策應地と爲し、一部隊を發して連山關方面を扼せしめむとす。時に、立見旅團の兵力大約左の如し。

假根據策應地

- 第十旅團司令部
- 歩兵第十二聯隊 (第二大隊欠)
- 歩兵第廿二聯隊
- 騎兵第五聯隊の第二中隊(一小隊欠)
- 砲兵第五聯隊の第二中隊
- 工兵第五大隊第一中隊

計歩兵

五大隊

騎兵

一中隊と二小隊

砲

六門

工兵

一中隊

偵察騎兵

立見少將は偵察騎兵及び斥候歩兵一個中隊第十二聯隊の第十二中隊を出し、遼陽奉天街道の敵情を搜索せしめ、尋て今田大隊隊長歩兵少佐今田唯一をして之に繼かしめたり。十一月十日此偵察騎兵は雪裡站鳳凰城を距る七里五丁、金家河、雪裡站の北方約三里、燹家台、鳳凰城を距十二里餘、通遠堡の南に在り、二道房、身通、遠堡、鳳凰城を距る十四里卅丁半及び草河口、通遠堡を距る二里等を偵察して、連山關に向ふ。十一日敵の一部隊は連山關に據守し、我を防ぐ。我騎兵徒歩戰鬪を以て之を擊破し、其左右の高地を陥れたりしかば、敵の小部隊は、山上に退走せり。時に今田大隊は續きて後方より來着したれども、敵の退却迅速なるを以て戰鬪に與かるとを得ざりき。我兵は、敵の敗兵を追撃せむと欲したりと雖、暮雲四もに起り、日没に近づきたるが故に、此夜(十一日)連山關に警戒露營せり。



連山關

連山關は、民舎四十餘ありと雖、寂寥たる一寒村。其南及び北は峻嶺重疊として、人跡殆ど絶へ、其西には摩天嶺の險あり、故に東方僅かに一綫の隘道を通するあるのみ。眞に絶谷也。我が偵察隊は、十二日更に進みて、摩天嶺を攀り、之を占領したりと雖も、尙ほ其北西に摩天小嶺の險ありて、防禦に便ならざるが故に之を放棄せしに、其後敵兵は再び進みて、摩天嶺に占據し、其既路の左右に砲二門を備へ、監視民兵を諸處の山嶺に配布し、以て連山關を抱圍俯瞰して、警戒を嚴にしたり。

### 第十一

### 賽馬集附近の戦闘

賽馬集街に於る交戦の始

十一月十三日、我第十二聯隊の第十二中隊(隊長足立大尉武政)は賽馬集附近に於て、清次大約千五百人と衝突し、對戦すると二時四十分間、日没に際し、戦を收む。是を賽馬集街道に於る交戦の最始と爲す。是より先に、今田大隊の將に連山關に向はむとするに先ち、立見少將は、濠河上流吉林街道の敵情を偵察せしむる必要を感じ、足立中隊長武政に命じ、一中隊を率ゐて

濠河邊門

濠河上流に向はしめたり。同大尉は十一月九日を以て鳳凰城を發し、十三日濠河の上流濠陽邊門(鳳凰城を距る約十五里)に達し、其土人に就て、敵情を尋問したるに、土民皆答へて、中國兵三千餘屯して賽馬集に在りと云ふ。足立大尉此日(十三日)午後、孤軍を率ゐて、賽馬集方向に進行したるに、清兵は果して賽馬集の南約一千米突の要地に據り、我兵を逆へむとせり。大尉即ち其部下に令して、直ちに戦闘隊形を取らしめ、敵と相距る數百米突なる高地を占領し、激烈なる射撃を交ゆると二時間餘の長きに亘れり。

我後方鳳凰城より此前日を以て足立大尉の退却を掩護する爲に派遣せられたる平井大尉(信義)の一中隊は、晝夜兼行して、急に大西溝(鳳凰城を距る十二里餘)に達し、足立大尉の偵察隊を掩護して之を收容するを得たり。

然るに、敵は、我兵の寡少なるを知られば、騎兵七八百を放ちて、我兵を襲撃すると甚た急なり。平井大尉、少しも屈せず、任務に對し、部下を指揮し、且つ戦ひ且つ退く。此の如きと數回、我兵退きて一高地に據る。平井大尉其左方に在りて之を指揮し、小隊長柳原中尉楠次其廿餘人を率ゐて右方に在り、敵騎猛進して終に其中間に入る。

聯隊はな



柳原中尉  
終に歸り  
來らざる

我軍の進  
行を牽制  
す

敵軍の動  
向及其方  
番

衆寡の勢復た敵すべからず故に平井大尉は其部隊を完うし其部隊を率ゐて後方に歸復せむと欲し、柳原中尉の一小隊は平井大尉の一中隊を掩護し、後方に留まり戦かひたるか故に、柳原中尉は終に歸り來らず。

(按)此後立見旅團が十一月廿七日、賽馬集に向て進行するるとき、此地を經過し、平井大尉は、百方山野を搜索したりと雖、柳原中尉の劍鞘が地上に滑棄せられたるを見るのみにして、同中尉の踪跡は之を探究する能はざりしと云ふ。

賽馬集方面の敵兵は吉林及黒龍江兵なるが故に、山野に出沒することに長せり、其大有効運動を爲す能はざることは、無論なりと雖、我軍第一軍の進行を牽制すること、に於ては極めて有効なりしことを知るべき也。

## 第十二

### 崔家房の戦

清軍は、九連城の守りを失ひ、鳳凰城は清軍の爲には固より大不便の地にして之を守るべからざることを知れり。故に、虎山の敗後、清將宋慶等は、九連城を棄て、又鳳凰城を棄て、遠く遼陽街道に退去したりと雖、敵の方略は左の如くなりき。

一 黒龍江將軍依克唐阿の部下一萬餘人を分ちて、其一隊は、鴨綠江上流、綏河の上流、寬甸附近及び賽馬集街道に出で、以て鳳凰城の右側面を衝かしめ、及び九連城の背面を襲て之を破ること。

一 一面は連山關に據り、山下より南に進み、草河口附近に出沒し、以て鳳凰城の日本軍を悩まし、以て之をして奔命に疲れしむること。

一 提督聶士成は、従前曾て滿洲各省の地理に通じ、頗る能く北方兵隊の心を得たる者。故に、之に命じて、奉天省、摩天嶺方面の守備を擔任せしめ、黒龍江將軍依克唐阿の部隊と協力して、鳳凰城方面攻撃及び防禦に盡力せしむること。

敵軍は、果して、綏河上流、吉林街道に出で、寬甸方面より、我第一軍の背側を窺ふこと、頗る切なり。我坐して、彼の迫るを待たむより、寧ろ進みて、之を掃ふに如かず。是に於て、山縣大將は十一月廿四日、西島大佐(助義)に命じ、第十旅團長立見少將部隊と相策應して、寬甸、賽馬集方面の敵を襲撃せしむ。

此命令を受けたる我兵は、左の如し。

(一) 第十旅團司令部

我兵力

進めて掃  
ふに若か  
ず



- (二) 歩兵第十二聯隊(第二大隊欠)
- (三) 歩兵第廿二聯隊第二大隊本部及び第五中隊第六中隊
- (四) 騎兵第五大隊第一中隊
- (五) 砲兵第五聯隊第一中隊

計

歩兵二大隊と二中隊

騎兵一中隊

砲六門

是より先に、敵軍草河口方面に進み來るの偵報は、確乎として疑無し。同方面に在る富岡中佐(三造)の部隊を援けて敵兵を一殲せむか爲に、立見少將は鳳凰城を發し、賽馬集に向て進行せり。(十一月廿五日)其部署は、左の如し

我部署

- 前衛 第十二聯隊 (隊長友安中佐治延)
- 第十二聯隊第一大隊 (隊長富田少佐春壁)
- 砲兵第五聯隊の第一中隊 (長山名大尉有友)

騎兵第五大隊の第一中隊 (長豊邊騎兵大尉新作)

- 第十旅團本部 第一大隊 (隊長岡見少佐正美)
- 第二大隊 (隊長半田少佐隆時)

衛生隊

糧食縦列

氷凍鐵の如し。時に寒氣嚴酷。全隊兵卒の艸鞋悉く氷凍して鐵の如し。廿六日三家子(鳳凰城より六里)に宿し、廿七日馬鹿甸子に宿す。天寒益す烈しく、加ふるに、途上降雪。全軍人馬の艱苦實に甚し。廿八日羊柳子に宿す。氷雪益す堅く人馬轉倒するもの多し。

廿九日、我前衛賽馬集に入る。然るに敵兵の大部隊は賽馬集に在らずして、我軍の左側後艸河口に向へりとの報知あり。

立見枝隊は、賽馬集の地勢人家二百餘(據るに)足らざるとを偵知し、西島大佐の部隊に命し、賽馬集附近の守備を爲さしめ、第十旅團本部を回旋して急行し、艸河口に向ふ。此日行程十里、日没前草河城に入りて警戒露營を爲したるも、糧食縦列は、本隊に續くと能はず、全隊飢餓を忍び、夜半に到れり。

草河口に向ふ

氷凍鐵の如し



此夕、立見少將が特に發遣したる將校斥候小川少尉の一隊撰抜兵五十名は、氷雪を跋渉し、敵中を貫通して遠く草河口に達し、以て富岡部隊に連絡を通ずるとを得たり。而かも敵の主力は、岫河城の北一里餘なる白水城に在るとを偵知し、廿九日曉立見少將は友安中佐及び岡見少佐の二隊を發し、白水城に進撃せしむ。時に富岡聯隊の先頭たる安満少佐の一大隊は恰かも白水城の右方に出て、敵軍二千人（黒龍江將軍依克唐阿の部隊）は崔家房に在り。我立見部隊の前衛友安中佐の隊は吶喊して崔家房の一高地を占領せり。敵兵は退きて其北方なる最高山に據り、水を隔て銃戰すると午後二時五十分より五時に至りしが、日没に及び、敵軍自から混亂し、同士撃を始め、敵の山上に陣する者と山間に在る者と互に相射撃す。我軍笑て之を傍觀す。夜寒益す加はり、小銃の槓杆皆凍氷凝結して用うべからず。即ち篝火を燒きて煖を取る。敵軍狼狽し山上の陣を棄て、逃走す。時に夜六時半。此日我兵負傷下士卒六人のみ。戰死者無し。敵の死傷約二百餘。而かも敵軍は遠く北方本溪湖方面に奔りたるを以て、我兵は徐かに鳳凰城に回旋せり（十二月五日）

敵の主力  
白水城に  
在り

敵軍の混  
亂同士撃  
を始む

敵軍逃走

我軍鳳凰  
城に回旋

### 第十三

#### 樊家臺の戰

立見少將の部隊は、我松山旅團及び廣島の兵にして、日本兵中暖地の人なるが故に、滿洲冬季の嚴寒に慣れざると固より怪むに足らず。故に十一月廿六日より廿九日に至る、我馬集草河城崔家房の戰に於て、其各隊兵卒猛勇と雖、天候氣象の酷寒に凍傷せらるゝもの、頗る夥しかりき。凍傷の爲に病むもの、百中五十に達せるものあり、敵軍は謀して之を知りたるが故に、又大舉して鳳凰城に向て逆襲を企て來攻せり。是に於て、樊家臺の戰あり。時に十二月十日なり。

敵軍の逆  
襲

凍傷多し

是より先に、我第一軍第三師團は、海城占領の目的計畫を以て、既に岫岩城を發して北方に進軍せり（十二月十日）  
故に立見旅團は摩天嶺連山關方面の敵軍（提督聶士成及び黒龍江將軍依克唐阿並に記名提督呂本元の率ゆる所の二萬餘人、連山關方面に據守するもの）を牽制する



我兵力  
の任務を帯ひ、十二月九日を以て鳳凰城を發し、同十日樊家台に至る。時に我兵力は左の如し。

- (一) 第十旅團司令部
- (二) 第廿二聯隊
- (三) 騎兵第五大隊の第一中隊
- (四) 砲兵第五聯隊の第一中隊
- (五) 工兵第五大隊の第一中隊本部及二小隊

計

歩兵 三大隊  
騎兵 三小隊  
砲 六門  
工兵 二小隊

敵の兵力

敵の兵力は左の如し

- (一) 黑龍江兵將軍依克唐阿の部下

敵軍

- (一) 五營 (三千人)
- (二) 荜苔防兵仁字軍 三營 (二千二百人)
- (三) 馬隊 五百
- (四) 砲 二門

提督聶士成の率ゐる所

十二月十日午前九時、我第廿二聯隊長富岡中佐(三造)の部隊先つ進みて、樊家台附近に至る。其他左右皆峻山連綿として、一澗之に通ずる處、極めて狹隘なり。故に小枝隊の戦に適すべきも、大部隊を用うべからず。所謂死地也。敵兵は之を利用し、其左右峯巒高地に占據し、一小部隊を其正面澗谷の處に備へ、而かも、其大部隊は澗右左なる高地に在り。

立見少將は、安滿少將の大隊に命し、澗谷の左方高地に展開せしめ、敵軍の右翼を射撃す。我砲隊六門亦之に次ぎ、敵も亦砲二門を列し、我を要撃せりと雖、敵砲は着發彈のみにして曳火彈無し。故に、我砲火に抗する能はず。安滿大隊は進て敵の第一線を奪ひ、我砲兵も亦進て澗左の高地に砲列を移す。敵の第二線は頗る頑梗にして殊死

敵砲曳火一彈無し

死地



敵軍動くの色あり

敵兵の潰

兩軍の死傷及戦利品

能く戦ひ一步も退かず砲彈雷の如く戦聲山谷に震ふ突貫の機正さに熟すと見るや安満大隊は賊聲猛然として鷲地に進入せしか敵軍動くの色あり立見少將は此機を外さず豫備隊たる今田大隊に命し密集隊を以て中央道路より猛虎の如く突進せしめたり今田少佐は聯隊旗と共に兵先きに進み敵中に斬入したるが故に敵兵此勢に辟易し終に之を支ゆる能はずして右往左往に潰亂し敵の一部將は追次に左右山峯高地を傳へつゝ防禦しなから漸次に山中に退却したり我富岡中佐は前衛大隊を率ゐて之を追撃し一直線に通遠堡鳳凰城を距る十四里卅丁に進みたりしが敵軍は全く潰走したるか故に富岡中佐も亦其隊を收む時に午後五時五十分なり

此日我軍戦死は

下士卒

十一人

傷者將校

四人

下士卒

四十五人

而かも敵の死傷及就虜并に戦利品は左の如し

死屍	百十五人
捕虜	十五人
戦利品	小銃 百〇七挺
同	彈藥 一萬發
旌旗	五旌
劍	一柄
羊毛外套(防寒用衣服)	無數

### 第十四

#### 一面山の戦

樊家台の戦は支那軍の將校頗る能く戦ひたりと雖我立見少將の爲に破られて終に退走せん然れども清將頗る此際に於て我日本軍の虚實を謀知したるが故に連山關方面即ち樊家台方面に於て立見旅團を牽制しつゝ他の一面より迂回して鳳凰城の東北側背の虚を衝くの計に出でたるもの是れ清軍將帥としては頗る觀る

清將我軍の虚實を謀知す



清將とし  
ては頗る  
觀るべき  
の價値あ  
り

べきの一運動なり。此運動は十二月十日に始まり、其十二日に開戦し、同十四日午

後三時三十分を以て結局せるものにして、所謂一面山の戦闘は、即ち是れ也。

初め立見旅團が、十二月九日を以て連山關方面に向ふや、友安大佐を留めて、鳳凰城

を守らしめたるが、清軍の一大部隊吉林街道より、鳳凰城の側面に來襲すると、友安

大佐に聞知せられたるが故に、大佐は直ちに防禦線を張り、騎兵一小隊及び偵察歩

兵二中队を出し、賽馬集街道より、諸子溝に至り、左側は生家堡に達し、約四千米突に

備へ、右翼は岡見少佐の一隊と富田少佐春壁の大隊之を守り、中央賽馬集街道は半

田大隊を以て之を扼せしめ、而かも左翼は山口少佐(圭藏)の大隊を以て總豫備隊と

して之に備へ、更に岡見大隊の一部を以て左側奉天街道に備へたり。我兵力は左の

如し。

(一) 第十二聯隊本部 (友安大佐)

(二) 第十二聯隊 (第三中队欠)

(三) 第廿一聯隊第二大隊 (山口少佐)

(四) 騎兵第五大隊の第一小隊 (畑野少尉之を率ゆ)

防禦線

我兵力

(吉林街道に向ふ)

(五) 騎兵第五大隊の第一小隊一部 (野崎少尉之を率ゆ)

(六) 砲兵第五聯隊第二中队

計

歩兵 三大隊と三中隊

騎兵 一小隊

砲 八門

敵の兵力

敵の兵力は左の如し。

(一) 黒龍江敵豫軍左軍右營

(二) 同 前軍右營

(三) 同 前軍左營

(四) 同 前軍前營

(五) 同 後東右營

(六) 同 淮軍正營



- (七) 同 中營
- (八) 同 副營
- 鎮邊軍 一營
- 黑龍江鎮邊馬隊 一營
- 山砲 二門
- 野砲 二門

前哨衝突

敵の將校は、吉林の副都統壽山、及び副將永山、並に德凱、及び姜なる者也。我偵察騎兵野崎少尉の騎兵が、進みて長嶺に達するや、十二月十二日敵の搜索兵と互に相衝突し、我兵は、徒歩戦闘を以て敵を撃退したりと雖、敵の後方續部の歩兵が右方に展開したるが故に、野崎少尉は其部下騎兵を指揮して退却し、足立大尉の歩兵隊に合し、足立大尉は之を受けて敵の歩兵と戦を開きたるは、十二月午前十時四十五分也。

敵兵陸續増加

既にして、敵兵は陸續増加し、歩兵凡そ一千餘、馬隊大約五十餘にして、一齊射撃を以て猛烈に進み來れるが故に、前哨隊長足立大尉は我防禦線まで且つ戦ひ且つ退き

敵軍優勢

たり。以上賽馬集街道は是より先に、吉林街道に向ひたる我偵察騎兵畑野少尉の一部隊が、胡馬堡子に達せし頃、左方鋭聲甚た盛んなるを聞き、方向を一轉し、敵の後方に近づきたるが、其北に敵兵通過したる跡ありと雖、別に後續部隊の之に繼ぐもの無きことを認めたるが故に、退きて渡邊大尉の歩兵隊に合し、渡邊大尉は進みて敵の左側に出て優勢なる敵兵に應戦しつつ、隨機退却せり。

此日の戦は、固より小鬪のみなりと雖、其時間は三時間に亘り敵軍は優勢を以て進み、一面山の高地に來れり、一面山は鳳凰城の東北大約一里餘に在る要地なり。

第十五

我軍の進撃

翌十二月十二日は、兩軍互に相對峙したるのみにして、相戦はず。我友安大佐は、充分に氣兵を引き寄せて一撃の下に之を殲さむと謀り、靜かに全隊を整ひ、寂然として防禦線内に伏したりしが、嚴寒凜冽氷雪滿地の際に當りて、徒らに山野に兵を暴露



作戦方畧

すること久しうすべきに非ず。故に明十四日拂曉を以て、我軍進みて敵軍を攻撃するに決せり。其作戦方畧は左の如し。

(一) 富田少佐の大隊は右翼吉林街道より進み、鰲河を渉り、十四日曉第五時敵の左側を掩撃すべし。

(二) 山口大隊は十四日曉第三時に鰲河を渉り、敵軍の中央右側に出て、全線進撃の信號を待ち、敵を掩撃すべし。

富田大隊は、夜半結束し、寒月の光りを借り、肅然として、鰲河を徒渉し、敵軍の左翼村落に潜入したるに、敵は怠りて、之を覺らず。故に我兵は十分に敵前數歩の處に進入するとを得て、村落を圍み一齊に之を射撃したるに、敵は寐耳に水なれば、其狼狽を極めつゝ、驚愕して飛び出たし、思ひ思ひに防戦せり。而かも、敵兵は頗る頑固に能く防戦せりと雖、我軍は十分彼の虛に乗して之を踏し、剩さへ火を上風に放ちて火攻を施したるが故に、敵兵は繼々たる猛火の包む所と爲り、焚死するもの十數名、其大部分は村後の山背に攀ち入り、先を争て潰走せり。

寒月の光を借りて鰲河を徒渉す

敵兵猛火の包む所と爲る

飛衣沖結

一發砲聲鰲河岸に轟く

是より先に、我左翼なる山口大隊は、夜半に於て、潜かに鰲河を渡り、前岸の堤下に潜匿して以て全線進撃の信號を待つと二時間餘の久しきに至り、全隊の飛衣、嚴寒の爲に凍結して、耳目殆んど感覺を失する程なりしが、之に頃くにして、殘月影淡く、東天漸く白からむとす。時に彈の一發信號砲聲、鰲河の岸に轟きたり。山口少佐は斥候を出たして敵陣を偵察せしめたるに、敵は此斥候に向て發砲を始めたなり、我兵亦應戦し、彈撃の機漸く熟せり。山口大隊は左右に展開し、敵の砲兵陣地に突進したるに、恰かも好し、富田大隊は敵の左翼を破り、山背を傳へて、敵の側背に出つ、而かも、敵の後方部隊は騎兵約十數、驅歩退却を始めたなり。機方さに熟す、敵兵殊死して戦ふの時、我兵突貫して進撃すべきの時機、正さに此一刹那間に迫れり。此時敵將にして人あらしめは、其二門の野砲二門の山砲を以て我山口大隊の側面を撃たむ。我山口隊は最初頗る之を慮りたるも、彼敵兵は其野砲をも、其山砲をも打棄て、一發の反抗をも敢てする能はず。我山口大隊の一突貫の陥るゝ所と爲り、野砲二門山砲二門共に我山口大隊の捕獲する所と爲りぬ。是に於て、敵の中央陣地は陥りたり。



敵の中央  
陣地陥る

敵の一隊  
頑然とす  
て驚かず

敵なから  
天晴れの  
動

兩軍の死  
傷捕虜及  
戦利品

敵の左翼隊は、最初先づ富田大隊に破られ、敵の中央部隊は山口大隊の突入に破られ、右往左往に潰亂せり。

然れども、敵の軍中、一二の將校其人ありと見へ、斯く亂れたる敗軍にも拘らず、右方高地に據守せる敵の一隊は、頑然として驚かず、高地約四百米、突の處に展開し、我山口大隊の前面を俯瞰し、地利を占めつゝ、頑硬に抵抗したりければ、半田大隊は力戦して之を攻むれども、容易に之を抜くを得ず。我が豫備隊及び山口大隊富田大隊は、各其隊形を尖更して敵の左側を猛烈に攻撃せり。

然れども、敵兵は頗る耐忍以て能く我を防ぎ、奮戦又奮戦し、他の諸隊をして、其退却を援護せしめたり。敵ながら天晴の働きと我軍將校も頗る感奮を起したるか、敵は終に山脈を傳へ、岩角を攀げ、北方を指して走りたり。我砲兵は猛烈に敵の退路を射撃し、命中すると數回。故に敵は、彌よ周章し、長嶺子の北東に逃走せり。

此戦の終りたるは、十四日午後三時三十分頃也。

我軍の戦死者は

下士卒

十二名

負傷者は

將校

三名

下士卒

五十九名

敵ノ死屍

百四十名

捕虜下士卒

十六名

全馬匹

十四頭

分捕砲

四門

同小銃

九十一挺

### 第十六

#### 我軍の合圖——三原大隊伏兵の追撃奏功

初め此一面山敵軍來襲の事あるや、友安大佐は急報を發して之を立見少將に告ぐ、少將時に焚家台附近に在りしが、此報告を聞くも敢て驚かず。三原少佐の一大隊を發して、敵軍の退路たるべき葱嶺附近に備へしめ以て敵軍を要撃せしめたり。

敵軍の退  
路を要撃  
せり



或は双嶺とも記するものあり

鳳凰城方面に於ける敵軍の全く其鋒を收む

鳳凰城方面に於ける清軍の

少將は、親から第十旅團第廿二聯隊を率ゐて草河口に駐り他の一部隊をして鳳凰城に向はしめたるが、敵軍は、此時既に十四日曉來の戦に敗れ氷雪を冒かし、飢寒を忍び、長嶺子を越へ、同十五日、葱嶺附近に退き來るや、豈料らんや、日本軍の伏兵一大隊(三原少佐の部隊)左右の高地より、一齊射撃を施さむとは、

敵の敗兵は之に抗する元氣も無く、益す潰亂して、養馬集の北東山間を指して奔竄せり。是に於て鳳凰城方面に對する敵軍の運動は、全く其鋒を歛めたり。時に廿七年十二月十五日也。

此十二月十五日に於る三原大隊の追撃は、我兵力僅かに左の如し。

步兵第廿二聯隊の第三大隊隊長少佐三原重雄

騎兵第五大隊の一小隊

敵兵約五百五十名、死傷は未だ詳かならず。

清軍其兵の怯に非ずして、其將帥の無人なるか爲に、弱劣なるの事實は之を一面山の戦及び樊家台の戦鬪に徴して彌よ明白なり。而かも、一面山大敗後彼清軍は、其鋒大に挫けたるか故に、復た鳳凰城に來襲せず。

# 日清陸戰史卷九

## 太平山、沙河沿及牛莊の戦

### 第一

#### 第一軍第二軍の連合進畧

宋慶 清將宋慶は、我第一軍の第三師團に向て、前後數回の攻撃を施したりと雖、毎回敗績して退却せり。然れども、其退却するや僅かに數里に止まり、而かも山海關方面より來り援くる兵數は、二月に至りて、彌よ増加し、牛莊營口及び田莊台の各市邑に屯營する所の支那軍は、徐邦道、長順、及び依克唐阿等各將の部隊通計四萬人に降らず。加ふるに、總統宋慶及び提督馬玉崑及び總兵劉盛休、章高元、張光前、李光久等各將の部兵を以てし、幫辦軍務大臣吳大澂も亦湖南兵五十餘營を率ゐて山海關を出て田莊台に到らんとす。

我軍兵員の寡少にして、敵軍を勵くすに足るもの、彌よ其兵員の寡少にして、敵軍を勵くすに足



第一師團の北進

らざるが故に此際我第二軍をして進みて第一軍第三師團に合せしむるの必要を生ず。是より先に我第五師團は九連城鳳凰城及び湯山城に分屯し而かも我第二軍の大部隊は冬來久しく駐屯して金州に在りしが、今や第二軍も亦進みて牛莊方面に向ふべきの命令ありければ、第二軍第一師團司令部を始め各部隊は二月十日を以て金州を發して北進せり。其兵力は左の如し

一 第一師團司令部

一 第一師團の殘部（乃木混成旅團を除く外、第一師團の全部各隊を云ふ）

第一師團の混成旅團乃木少將の率ゆる所の一隊は一月十日を以て蓋平城を攻陥し以て第三師團を援助するの任務を完遂したり。而かも其後同旅團は屯して蓋平城に在り。其兵力は左の如し。

(一) 歩兵第一旅團全部

(二) 騎兵第一大隊（半小隊欠）

(三) 野戰砲兵第一聯隊第二大隊

(四) 工兵第一大隊第一中隊

(五) 衛生隊半部

(六) 野戰病院一個

(七) 歩兵彈藥縱列 二

(八) 砲兵彈藥縱列 一

(九) 輜重兵大隊（馬廠欠）

(十) 野戰電信隊

計

歩兵 十二大隊

騎兵 三中隊

工兵 二中隊

輜重兵 一大隊

砲兵 六中隊

第二師團の砲兵第二大隊及び砲兵彈藥の第二縱列は臨時必要の爲に、第一師團附屬を命せられたり。是れ北進第一師團の砲力不足あらんとを慮かりて、之に備へら



れたる也。

以上第一師團の殘部及び第二師團の砲兵第二大隊及び砲兵彈藥第二縱列は、二月十日より同十五日までに各隊金州を出發し、同十七日より追次に蓋平に到達し、其廿三日を以て全軍集合を完整せり。

是より先に、第五師團も亦九連城鳳凰城の守備隊小數を留めたる外其大部隊を擧げて、之を北進せしめたり。

第一師團長山地中將は、二月廿一日を以て蓋平城の東北方柞木城街道なる湯池に赴きて、第一軍司令官野津中將と會合し以て前途進軍方略を協議し、第一師團は一部を以て大平山を占領し、其主力を以て坡台子附近に止まり、而かも第一軍が鞍山站海城を距る七里三十丁及び牛莊を占領したる後に於て、第一師團と共に營口港を攻撃すべきことに決せられたり。

然るに、敵軍は我軍に先立ち、營口方面より北東に出て廿一日を以て太平山要地を占領したるが故に、此山の與奪は前途我師團の作戰に於て極めて大利害の關係あることを看破し、山地中將は第一師團の全力を擧げて之を攻撃するの計畫を定め

第五師團の北進

山地中將と野津中將との會合

太平山の與奪は大利害の關係を有す

廿四日を以て該山攻撃を執行せんとせり。

## 第二

### 大平山攻撃前の準備

大平山は營口附近の大平原中に孤立し、以て此平原を一目の下に瞰制し得る無双唯一の鎖鑰地たり。故に我第一師團が能く之を占領し得れば、則ち營口の南に於る敵の運動を一望の下に瞰視すべく、而かも師團が施すべき攻撃の準備運動を隠して敵に知られさらしむるを得るが故に、其作戰上の便利極めて大なり。

大平山の價值は此の如く必要且つ貴重なるにも拘らず、我混成旅團が蓋平占領の後、に於て急に之を占領せざりし所以の者何ぞ、他無し。其兵力寡少にして、優勢の敵に對しては長く之を占守し得るの餘力無きを以て也。然るに、今や師團の全力は殆ど既に集合したるが故に優勢の敵に對して、一日も速かに此山を占領するの必要なるに固より言ふを俟ず、

又一方に於ては、海城に於る第一軍の運動の爲に、先づ營口方面の敵を此地より牽

太平山の唯一の鎖鑰地

兵力寡少長く之を占領するを得ず



營口方面  
に於ける  
敵の兵力

制するとの方略も亦緊要なりとす。

此の如き形勢事由あるを以て、我第一師團長は急に大平山の敵を攻撃して此山を奪取するの策を決定せり。

是より先き二月廿一日營口方面の敵兵は其前線を以て老爺廟及び白廟子方向より、東西七里溝に進み、同日午前八時廿分頃より大平山に於る我混成旅團の前哨線に向て襲來せり。其兵力大約歩兵五六千砲四門、騎兵若干なり。此時我乃木枝隊の配布は槩略左の如し。

歩兵第十五聯隊

尙家台及び三家子並に坡台子附近

歩兵第一聯隊(一大隊欠)

大石橋

同聯隊第三大隊

馬黃岨

同第二聯隊(一大隊欠)

博洛埔及飛雲寨

騎兵第一大隊

朱家甸子

野戰砲兵第一聯隊第二大隊

坡台子(大平莊の東鄰)

工兵第一大隊第一中隊

母家屯

右枝隊の前哨第一線は、太平山に在り。

此状況に基づき、乃木支隊長は、三家子の線に在りて之を防守し、而かも飛雲寨一名は背陰寨とも云ふに在る第二聯隊を以て敵を逆撃するに決し、其前哨第一線に在りたるものは漸次且つ暇ひ且つ退き、以て敵兵を誘寄しつゝ、三家子に向て退却せり。

午後三時敵は全く大平山を占領し、其前線は太子窟及び南大平山一帯の諸部落を占領して停止せり。

此日第二旅團長西少將は、坡台子に來りて右の敵狀を實見し、明日は敵必ず大舉して我を攻撃するならむとの推料を下たし、蓋平附近に到着せる所の第二聯隊の一大隊及び第三聯隊をして、急に飛雲寨に進ましめ、以て乃木少將と協力して敵を逆撃するの決心を取り、又砲兵聯隊の本部及び第一大隊は飛雲寨に轉營せしめられたり。同廿二日午前、敵兵五百餘名は大平山に現はれたるのみにして其主力は、専ら山北に集合しつゝ、在るものゝ如し。

我第一師團本隊の位地は前日に同し、但し歩兵第三聯隊及び砲兵第一聯隊の第一



大平山攻  
撃の部署

大隊は飛雲寨附近に其宿營を移したり。

廿二日の夕、山地師團長は、湯池前日野津第一軍司令官に會合の爲に赴むかれたる處より蓋平に歸り、右敵情に基づき、大平山攻撃の決心を爲し、明廿三日の爲に、各隊の部署を命令すると、左の如し。

- (一) 乃木少將の支隊は廿二日の地位に止まる。
  - (二) 西少將は、歩兵第二聯隊騎兵一小隊、野戰砲兵第二聯隊、第二大隊を以て、賴家埔、滕家坨子、及び破橋子を占領すべし。
  - (三) 師團本隊歩兵第三聯隊、野戰砲兵第一聯隊本部及び一大隊、工兵第一大隊本部及び第一中隊衛生隊半部は坡台子附近に集合す。但し工兵隊は本日當地に到着したるものなり。
  - (四) 輜重第一梯隊は青嶺甫に、同第二梯隊は葡萄溝及び其以南に宿營す。右部署諸運動は、廿三日午前に於て全く結了せり。
- 然るに此日午後一時迄敵情は尙ほ依然たり。故に師團は左の如く宿營せり。
- (一) 乃木枝隊は、其本隊を以て三家子に陣し、小房身、二道河、金家窩甫、太子窩甫の

區域内に宿營し、老爺廟方向を警戒す。

- (二) 西支隊は其本隊を以て滕家坨子に陣し、其區域内に宿營し大平山に對し警戒す。

- (三) 師團本隊は坡台子及び其附近に宿營す。

- (四) 輜重第一梯隊は朱家甸子、青石關、飛雲寨、馬虹子に、同第二梯隊は前日の位地に止まる。

- (五) 縦列給養を行ふ。

而かも廿三日午後九時までを得たる偵報によれば老爺廟にも亦敵の他の連合部隊あるものゝ如し。

第一師團は彌上明廿四日を以て大平山を攻撃するとに決せり。故に其攻撃の部署は左の如し。

- (一) 乃木少將の支隊は右翼隊と爲り、午前第六時攻撃を開附し得る如く其宿營地を發し、孫家崗子を歴て敵の側背を攻撃し、大石橋に在る我部隊も敵の左側背より此攻撃に參與すべし。



- (二) 西少將の支隊は左翼隊と爲り、午前六時迄に破橋子近邊に戦闘準備を整ひ、右翼隊の運動に随ひ大平山に向て攻撃すべし。
  - (三) 師團本隊は豫備隊と爲り、午前三時坡台子西端を發し師團長之を率ゐ右翼隊の後方に跟隨す。
  - (四) 諸隊の大打撃は坡台子の南方に集合す。
  - (五) 輜重第一梯隊の内野戰病院及び患者輸送部歩兵砲兵彈藥各一縱列は午前七時迄に三家子に招致す。
- 又別に歩砲彈藥各半縱列は滕家砦子に到り左翼隊の直接使用に供す。  
第二梯隊の野戰病院は、可成速かに滕家砦子に到るべし。爾餘の諸縱列は行進準備を完ふし各其宿營地に止まる。

### 第三

## 大平山の激戰

廿四日午前五時三十分、我右翼乃木支隊は、孫家崗子の南方に集合し、午前六時を以

運動開始 東部敵兵 微弱	左翼西支 隊	敵砲兵を 有せず	師團本隊	山地中將
--------------------	-----------	-------------	------	------

て運動を開始す。大平山東部の敵兵は微弱にして我右翼の前進するを見るや暫時抵抗したるのみにして退却せり。

午前七時三十分、歩兵十五聯隊は、進みて大平山東部を占領す。此時敵は東七里溝に在り、我右翼の砲兵は大平山東側の畑地と該山の東部とに放列を布き東七里溝莊に向て砲撃を開始せり。

我左翼西支隊は、午前六時三十分戦闘を開始し、午前七時南大平山村及び土城子の敵を攻撃し、三十分の後、終に其敵を撃攘し、大平山の西部を全く占領せり。此敵は約六百人にして、七里溝莊に向ひ退却せり。但し大平山附近に於ては敵は砲兵を有せざりし。

我師團本隊は、午前六時孫家崗子の南端に開進し、午前七時大平山の東麓に向て前進し、午前八時其處に開進す。此時恰かも、右翼隊は東七里溝莊に向て攻撃最中なりき。

師團長山地中將は、大平山の最高所(東部)に位地を占め、四方の戦況を望視せり。時に敵軍は、其右翼を黃家窩甫(桑墩子)に張り、其左翼は老爺廟の南方に亘り、漸次に



敵の左翼  
最も優勢

射法亦巧  
みなり

進みて我を包圍するの状況あり。而かも彼か左翼は其兵力最も優勢なり。營口街道上なる西七里溝莊の北方には、猶敵軍の縱隊連綿たり、東西七里溝莊及び其附近の諸部落は敵兵之に占據し頗る頑強に防守を勉むる状勢なりき。又此方面各村落に於る敵兵は、各其砲を要地に列し、約合計十門、我歩兵に向て射撃を連續しつゝあり。而かも其彈道頗る能く低伸し、射法も亦巧みなり。故に其効力も亦尠からず。

大石橋より來りし我歩兵第一聯隊一大隊欠は、午前八時孫家堡子に達し、敵の左翼に對し、戰鬪隊形を以て小平山の西北に止まり、以て我右翼を警戒せり。

午前七時四十分野戰病院を孫家崗子に招致し、此地に開設の準備を爲す。患者輸送部も亦之と同行せり。

歩砲彈藥各縱列も亦同村に進ましめたり。

右翼隊の綑帶所は太子窩の東部に開設せり。

是より先に我騎兵大隊は老爺廟方向を搜索の爲に前進し、午前九時より十時の間に於て老爺廟に在りたる敵騎約百許を撃退して同地を占領し、猶進みて深く敵情

優勢なる  
敵は姜家  
房に在り

現在の位  
置を固守す

を搜索せむと欲せしに、優勢なる敵は姜家房に在り、我騎兵に對して猛烈なる砲撃を試むるが故に、我騎兵は漸次退却して小平山に止まり、以て我か右翼を警戒せり。午前八時十分、我右翼隊は東七里溝莊の敵に向て攻撃を決行し、同二十分突貫を以て之を攻奪せり。此村を守りたる敵は歩兵大約六百にして、西七里溝莊に退却せり。右翼隊は、全く東七里溝莊を占領し、其砲兵も亦前進し、其北方に陣地を換布し、以て、西七里溝莊の敵砲に對戦せり。

午前九時四十分、我師團長は命令を乃木少將及び西少將に下だし、右翼隊現在の位地を固守するに止め、是より深く前進すべからざることを命ず。時に我左翼の銃聲前方に向て熾んに響く。師團長は令を傳へ、左翼隊長にも亦現在の位地を固守するに止め、是より深入前進すべからざることを命ず。

此時機に於て、山地師團長が、其左右兩翼諸隊の深入前進を止めたる理由は、他無し。師團は既に太平山要地占領の目的を遂げたるが故に、之より深入前進する必要なく、且つ之より深入せは戰鬪に際限無きとを推料したるを以て也。又我より深入せざるとも、敵軍自から退却するならむと推料したるを以て也。



支那兵の頑強

敵攻勢に轉せんとの勢あり

敵砲狙撃の色無し

敵軍前進

然るに、此日の支那兵は頗る頑強にして、午前十一時に至るも退却の色無く、之に加ふるに、敵兵は後方より益々其左右翼を展開し、我右翼を包圍せむとするの勢を現はし來り、而かも、彼自から攻勢に轉するか如きの疑あるに至れり、故に山地師團長は砲兵聯隊長今津大佐に命し砲兵第二大隊を以て東七里溝莊附近に陣地を撰定し、以て西七里溝莊に據る敵の砲兵を掃蕩せしめむとを令せり。

今津砲兵大佐は、此命令に従ひ、我砲兵を指揮して猛烈なる攻撃を行はしめ、榴霰四百餘發を射撃したりと雖、西七里溝莊の敵砲は猖獗にして、敢て屈する色無し、且つ敵は益々其兵力を増加し、其左翼の前方にも亦砲二門を増列し、我に應戰して長時間に亘るも、容易に沈黙せず、殊に敵砲の射程は我砲よりも二千米突以上の遠距離に達して、而かも有効なる新式の利砲なりき。

正午頃より、敵の左翼後方に在りし諸隊は、漸次に其右方に移るの状況を現はせり。同時に敵の長縱隊は、騎兵若干を先頭に列せしめ、黃家窩甫(桑墩子)より出現し、我左翼隊に向て前進を始む。其兵力約六千に降らず。

午後零時三十分、我左翼隊長西少將より師團長に向て、敵軍前進の状況あるとを報

敵兵の回退

い來れり、然れども、此敵軍の行進なるものは一進一止、非常なる不規則緩漫を極め、其運動紊亂して列を成さざるの狀あり、我左翼の砲隊は之に向て射撃を開始し、午後零時三十五分、歩砲彈藥各縱列を大平山の東南側に招致したり。

敵は午後二時頃に至り、其前進の希望を斷ちたるものの如く、我左翼砲彈の射程外に運動しつつ回退を始めた。敵の先頭隊は一時我左翼隊の前方六百米突の邊に來りたるものありたるのみ。

然れども、前面西七里溝莊其他の敵は、益々兵力を増加し、其守備せる村落は、頗る頑強に防戦に力め、決して退く色無し、故に我第一師團は、之に對し、敵に先だちて一步も退くべからず、他無し、是れ大に我軍の士氣に關するを以て也。

### 第四

### 第一師團の一大突撃

元來我第一師團は、此日に於て十分なる激戦を爲すとを好まざりしなり、其故は同師團の任務上に於て決戦を急ぐべきの時機に非るを以て也。



豫想外の  
大敵

敵軍撤退  
の必要

然れども、此日の戦たる豫想外の大敵に遭逢したるものにして、騎虎の勢を爲りたるか故に、今や之を中止すべからず。我日本軍にして若し此儘に大平山附近に於て、敵の優勢大兵と相對峙せんには、氷雪の中に立ちて、我師團全隊は戰鬪準備隊形を執り以て此夜を徹せざるべからず。是の如きは一大不利なるを必せり。故に、此際、前面の敵軍を撃退して後に宿營休養を謀るの必要に迫られたり。又、明廿五日は、第一師團の一支隊を海城に派遣せざるべからざるの豫約あり。益す以て、今夕を限り、前面の敵を掃はさるべからざるの必要を覺悟せり。

一大突撃

是に由りて、山地師團長は、前面の敵に向て斷然一大突撃を行ひ以て之を掃蕩するに決必し、廿四日午後二時を以て諸隊長に命令を授くると左の如し。

命令

乃木少將、步兵第三聯隊長、砲兵聯隊長に

- (一) 乃木少將は、東七里溝莊附近に在る諸隊を以て西七里溝の敵を撃攘すべし。
- (二) 砲兵聯隊は此攻撃を援助すべし。
- (三) 步兵第三聯隊より、一大隊を東七里溝莊に派遣し、西七里溝莊攻撃の後援を

爲さしむへし。

- (四) 西少將には右攻撃を通報し、併せて別命ある迄は現在の位地を守備しあるべきを命す。

- (五) 隱岐大佐には、此攻撃間若し老爺廟附近の敵出撃せば之を邀撃すべきを命す。

午後三時右翼隊は、其運動に着手し、漸次其兵力を開展して西七里溝莊に向ひ其攻撃を實施し、各砲兵中隊は悉く其火力を併せて西七里溝莊に集め以て此攻撃を準備したり。

右翼隊の衛生部隊は、其繙帶所を東七里溝莊の南部に建設せり。

是より先に、午後二時一回我左翼前方より退却せる敵軍は、此に至りて又其歩を回し、我攻撃隊の左に向ひ側面に展開して我に對し連發射撃を開始したるか故に、我攻撃隊の左翼は兵力微弱にして、或は敵の爲に攻撃を沮抑せられむとするの恐れあり。故を以て、山地師團長は更らに第三聯隊の歩兵一大隊を派遣し攻撃隊の左翼を援助せしめたり。

左翼兵力  
の微弱



我西枝隊は其砲兵一中隊を土城子北方約千米突の處に進め、尙ほ且つ歩兵一大隊を前進せしめて此攻撃を援助したり。時に午後三時半頃なり。我攻撃隊は非常の猛勇を以て氷雪中を前進するも其運動の困難なると言ふを俟たず。

一大角面堡に均し

趙雲奇

敵軍は西七里溝莊及び黃家窩甫桑墩子二村落の民家堅牢なる土壁に據り、完全なる防禦編成を設け、南大平山村にも亦防禦事を施し、村落の圍壁に砲眼及び銃を穿ち設け、且又我曳火砲彈の射撃を遮る爲に盲障狀に掩覆を設けたり、而かも不完全なからも鹿柴を圍壁の外邊に密植し、以て攻撃隊の進入を沮止するの備を設けたるか如き、之を要するに其防禦は村落を利用したる一大角面堡に均し。此くの如き堅固なる防禦を備へ且つ其士官中にも從來の支那士官に比すれば、能く死を決して防戦したる者馬玉崐の部下趙雲奇なる者の如き最も忠勇力戦して終に之に死せるあり、是れ此日敵の砲列其他諸兵が比較的頑強なりし所以の一原因なりとす。

午後四時卅分、我第十五聯隊の突撃は、大に其功を奏し、西七里溝莊及び黃家窩甫桑

敵兵の敗走せり

墩子<sup>を</sup>奪取せり、敵の右翼は始めて散亂し、一部は營口に、一部は西方海岸に向て敗走せり、

此日敵の使用したる大砲は約十餘門、其藥筒及び彈丸の破片を以て之を推究するに其口径は我軍の砲と大差無しと雖、其射程効力は我第一師團の砲煩より超過すると少なくとも二千米突に降らず、又五珊知口径速射砲二三門以上を有したると推知すべし。

小銃は其大部分は『モウセル』式連發銃なるか如きも、其小部隊は新式無烟火藥の新連發銃を用いたるもの如し。

故に一時彼の射撃は猛烈にして頗る我兵を悩ましたりと雖、我兵の勇敢なる積雪中運動の最も困難なるを顧みずして、彈丸雨注の間を一直線に行進して、攻撃を進め、終に突貫を行へり。

敵の大部は、我兵の突入に先ちて退却を始めたなり

是に於て師團は、直ちに大平山の東南諸村落に宿營することに決し、午後五時を以て師團長は左の命令を下せしむたり。



(一) 歩兵第一旅團に騎兵第一大隊(一小隊)砲兵第二聯隊の一大隊工兵第一中隊を附し前衛に任し、其本隊を孫家崗子附近に置き、南大平山村破橋子、前崗子の間に宿營し大平山を守備せしむ

(二) 歩兵第三聯隊に騎兵一小隊砲兵一中隊を附し、柳樹屯夏家屯香爐庄の間に宿營し、老爺廟に對し警戒せしむ。

(三) 爾餘の諸隊は、師團本隊を爲し、左の通り宿營す。

一歩兵第二聯隊の一大隊。

尙家台

一歩兵第二旅團司令部、同第二聯隊本部、及び第一大隊、

三家子

一砲兵聯隊本部及第一大隊

三家子

一歩兵第二聯隊の一中隊砲兵一中隊

坡台子

一師團司令部

坡台子

(四) 輜重兩梯隊は、昨廿三日夜の位地に宿營せしむ。

此日敵の兵力は、概略左の如し、

(一) 老爺廟及び姜家房の南方に展開したるもの、

五〇

歩兵 約五千以上

騎兵 約二百

砲 二門

(二) 西七里溝附近に展開したるもの、

歩兵 約六千以上

砲 六門以上

(三) 黃家窩甫(桑墩子)附近に進みたるもの、

歩兵 約一萬以上

騎兵 約百以上

砲 二門

馬玉崑

捕虜の言及び押收せる清國公文等に徴するに、此日敵軍の敵將は馬玉崑甘營を督して、西七里溝莊附近に在り、宋慶は總帥として黃家窩甫方面の後方に在りたるもの、如し。

此日我戰死尉官二名、負傷尉官七名、下士卒戰死廿七名、下士卒負傷二百七十七名、而

傷我の死



我軍の發射せる歩兵各砲數

かも死傷の最も多き者は歩兵第十五聯隊にして戦死十八名負傷二百〇二名なり。敵の戦死二百餘捕虜二名

此日激戦の爲に消費したる小銃彈丸及び砲彈の數、大約左の如し、

歩兵第一聯隊第三大隊	小銃彈	七、〇五九發
第一大隊		五二、七一發
第二大隊		四七、七一六發
第三大隊		四、三七九發
歩兵第二聯隊第一大隊		五、〇四六發
第二大隊		八、四八六發
野戰砲兵第一聯隊第一大隊	大砲彈	八五九發
同 第二大隊		四五八發
同 第二聯隊第二大隊		五八六發

一、九〇三發

通計砲彈發射の數

一、九〇三發

此砲彈を區別すれば、榴彈百九十二發にして榴霰彈千七百〇十一發なり。

### 第五

## ○我第一旅團の苦戦及凍傷患者

乃木枝隊

此日午後二時過、乃木枝隊が西七里溝庄の敵陣に向て攻撃を命せらるるや、乃木少將は、其部下第十五聯隊をして西七里溝莊敵壘の正面及び右方に向て進撃せしめ、而かも少將自から豫備隊の第三大隊を率ゐて、敵壘の左方に向ひ、南北合撃を謀りたれども、西七里溝莊の敵兵頑然として屈せず、抗戦すると頗る猛烈なるが故に、勇悍なる第十五聯隊の第一大隊長齋藤少佐、徳明は六に怒り、大刀を揮て眞先きに進前し、敵壘に近づき、憤戦せり。之に次ぎて、第二大隊長栗屋少佐、第三大隊長殿井少佐も亦各其部下を勵まして、敵壘に迫りしも、此時第十五聯隊の或部隊は其彈藥既に盡きたるも補充するに追まなく、空しく切齒しつつ地物に身を寄せ敵陣を避け突貫の時を待つものあるに至れり。乃木少將は此景状を見て大に憤ほり、第三聯隊長第



雨注彈丸の間に突入し敵を撃つ

此日の苦戦想すべし

凍傷患者

凍傷患者の總數千

一聯隊今村少佐に命じて急速伍間増加を行ひ以て敵壘に迫らしむ。今村少佐は川上大尉第十中隊長廣中大尉第十二中隊長をして各其中隊を指揮し敵壘に急迫せしむ。川上廣中兩大尉は劍を揮て隊兵を麾き直ちに猛進し雨注彈丸の間に突入し敵の堅壘に進入せしかば第十五聯隊の各中隊も之を見て我後れじと奮ひ進み先を争ふて敵壘に突入し終に西七里溝庄を陥略したるは午後第五時三十分頃なりき。

此日の戦は曉四時前より我兵既に氷雪を踏みて山野に跋渉し而かも其戦闘時間の延長なる日没に至り我諸隊の各其戰場を引揚げて各隊宿營地に向ひたるは夜七時八時の頃に移りたり而かも其宿營の距離遠きものありたるが故に野原一面積雪の上を迷ひながらに歩行する終日苦戦の疲勞に加ふるに糧食の設不便なるを以てす諸隊多くは空腹飢寒の爲に困しめられ夜に入り嚴寒彌上加はりたるが故に凍傷患者を生ずると夥多にして就中第一聯隊の如きは三百九十餘人の多きに達し入院治療を要するものは五十餘人第十五聯隊は凍傷患者の數更に之よりも多かりし全師團に於る同患者の總數は蓋し千人以上に達したる

第六

第一軍第五師團の北進

ならむと云ふ當時軍人艱難の太甚たしかりしと寔に想ふべき也。

我軍の偵

廿七年十月廿五日を以て我第一軍は夙に鴨綠江の險を渡り九連城安東縣及び鳳凰城を連陥占領せりと雖當時我海軍陸軍との策應に關し日本軍は尙ほ慎重する所あり加ふるに盛京省地方冬季防塞の事に關して日本軍隊從來未だ其經驗を有せず故に第一軍は當時深く是等の諸點に於て考究を凝らす所ありたるを以て敢て其進軍を苟もせずして専ら持重の計に従ひたるもの如し。

是を以て第一軍は其司令部を駐めて安東縣九連城の間に徘徊すると數十日の久しきに亘り第五師團司令部も亦然り久しく九連城を以て司令部と爲せしものは他無し日本軍が大舉して北に進むの時機未だ到らずと思料せられたるに由ると知るべき也。

然るに廿七年十一月旅順口の堅要は一舉の下に陥りて我手に歸し爾來支那北洋



支那軍の  
技倆は益々  
破るる所と  
爲る

清國の安  
危亦知る  
べきのみ  
第一軍第  
二軍の連  
合大軍の  
必要時機

艦隊は益々蟄伏して威海衛の港内に閉居せる數旬の久しきに及び其陸上軍は着々我日本軍の爲に敗られて走るもの數回に至りしが故に支那軍の技倆は益々我軍の窺破する所と爲りぬ。  
是に於て、鳳凰城方面に向て、數度逆撃を謀れる支那兵黑龍及び吉林の猛兵なるものも亦我立見枝隊と連戦連敗し海城方面に於る支那兵數萬なる者亦我桂中將の爲に連戦連敗の事實を表明せり而かも況んや廿八年一月十日蓋平の要地も亦我乃木枝隊一舉の下に大敗して蓋平城は我第一旅團の根據地と爲れるに於てをや之に次くに、廿八年一月二月の交に於て、日本軍の一部は山東省に上陸し有名なる威海衛も亦日本軍の陥領する所と爲り而かも劉公島も亦終に陥り支那艦隊は擧げて日本海軍の勦滅する所と爲りたるに至りては、清國の安危も亦知るべきのみ此に至りては、日本第一軍第二軍共に連合大軍して北に進まざるべからず。遼河の水が猶ほ徒步して之を渡るべきの時機に乗して日本の第一軍第二軍は速かに遼河を越え以て山海關に進ませざるべからべると固より言ふを俟たざるなり。

第五師團  
の北進

清國も亦夙とに此に察する所あり。宋慶、徐邦道、劉盛休、馬玉崑等の諸將に命じて遼河の守備を固めしめ、海城附近を扼するに四萬以上の大兵を以てし、日本軍をして遼河を越ゆるを得ざらしむるの目的を以て、百方防禦に従事しつゝありき。  
我大本營は、清軍の方略を看破し之を挫折せしむべき手段として、第二軍をして海城方面に赴援せしむるの命令を、第二軍に下すと同時に、廿七年十二月の廿日及び廿八年一月廿日、又第五師團をして急速北に進み、第三師團を援け以て第一師團と協力して、營口及び牛莊、田莊臺等を占領せしむるの方畧を執られたり。是れ實に廿八年二月の始めに在りき。

是に於て第一軍の一半たる第五師團は、其一小部隊を鳳凰城九連城に留めて以て其守備たらしめ、而かも其大部分を擧げて、北方に進軍せしむるの準備を整へり。

### 第七

### 第五師團の進軍運動

我第五師團は、鳳凰城九連城方面に少數の守備隊を留め、而かも其司令部を始めと



黄花甸

し、前進任務の各部隊は、二月十日を以て各其運動を始め、同廿二日に於ては、同師團の主力及び其大部隊は、海城街道なる黄花甸(鳳凰城を距る十八里五丁の西方に在り)に集合せり。其兵力は大約左の如し

- 一 第五師團司令部
- 二 歩兵第九旅團司令部(司令官少將大島義昌)
- 三 歩兵第十一聯隊第一大隊本部(司令官仙波大隊長)
- 四 同第一大隊
- 五 歩兵第廿一聯隊本部(司令官武田大佐)
- 六 同第廿一聯隊全部一中隊欠
- 七 歩兵第廿二聯隊本部(司令官中佐富岡三造)
- 八 同第廿二聯隊(第三大隊を欠)
- 九 騎兵第五大隊本部(隊長木村少佐)
- 十 同第五大隊(二小隊欠)
- 十一 砲兵第五聯隊本部(聯隊長柴田中佐)

- 十二 砲兵第五聯隊(第十三大隊欠)
- 十三 工兵第五大隊本部(大隊長少佐馬場正雄)
- 十四 工兵第五大隊
- 十五 各縦列
- 十六 衛生隊及び病院

此諸部隊は戦闘序列を以て行進を始め其行程は左の如し

鳳凰城より 十八里五丁

黄花甸

黄花甸より

三家子

大洋峪

牛心山

搭子峪

○潘家峪 (黄花甸より十二里十六丁)



五間房子  
 八般嶺  
 上石橋子  
 長嶺子  
 湯崗子

潘家峪

湯崗子村

鞍山站攻  
撃の目的

潘家峪は、柵木城を距ると四里、海城を距る九里二十六丁。此處は岐路にして、左すれば柵木城海城に出つべく、右して北方に向へば、五間房子、八般嶺、上石橋子を経て遼陽街道鞍山站に出つべし。湯崗子村は即ち海城より遼陽に通する本道にして、海城を距る五里廿五丁、鞍山站を距る二里五丁の處に在り。

第三師團は、海城よりし、第五師團は八般嶺よりして共に鞍山站の敵を攻撃せむとするの目的を有す。故に第五師團の前衛第廿一聯隊は、歩兵五中隊と騎兵三小隊とを以て、二月廿四日午前黃花甸より西北方七里餘三家子に於て敵の一部隊千餘人に衝突し、直ちに開戦して山谷の間に戦ふと四時間餘敵は峻に據り防戦せしも、午後一時五十分終に退却せり。

同廿五日午後、敵歩兵五百騎兵四五十又我第十一聯隊及び第廿一聯隊の前哨に對して、射撃を始め、大洋谷に於て我兵之と應戦すると、僅かに廿分にして敵兵は山中に向て退走せり。

同廿六日敵兵約五百、又我前方に現はれ、搭子谷附近の險要を扼して我前衛を要撃す。時に午前九時四十分、我第九旅團本部及び第廿一聯隊、騎兵第一中隊、歩兵七個中隊を以て之を射撃し、應戦すると六時間餘の久しきに亘り、午後四時に至りて敵は終に退走せり。

三月一日、我廿二聯隊の第一大隊、第二大隊、騎兵第五大隊の一小隊、及砲兵第五聯隊の第一大隊、第二中隊、砲六門進て八般嶺に至る敵兵約五百、又前面の險隘に據りて我を要す。我前哨之に應じて射撃を交へ、午前十一時に至り、敵は退却せり。

三月一日は、第三師團既に海城を發したる日にして、第五師團と共に路を分ちて鞍山站方向に進み、明二日を期して、鞍山站を攻略するの約束なれば、第五師團は大に奮ひて北に進み、同二日其前衛が長嶺、鞍山站の東方四里を越る頃、我偵察騎兵は來り報して曰く、



「鞍山站に在りたる敵軍の二萬餘人は昨夕既に他に退却して今は隻影たも無し。我第一軍の騎兵は己に同地を占領せり」  
我第五師團の將士は此報を聞きて皆大に失望せざるは莫し。此夜我第一軍司令部は湯崗子に宿營し、第三師團は鞍山站附近に宿營し、第五師團は湯崗子附近に宿營せり

### 第八

### 沙河沿附近の戰

沙河沿は海城の北一里餘に在り。二月廿八日此沙河沿附近に於て又一塙の戰を開き午前五時より始まり午前十時に終り敵は又大敗して營口方面及び牛莊方面に退却せり。此日彼敵軍の兵力は、大約左の如し、

敵將は吉林將軍 長順

黑龍江將軍 依克唐阿

提督 徐邦道

敵軍の兵力

沙河沿

總兵 李光久

等にして海城の三面に向へたり、

敵兵は 敵懷營

靖邊營

鎮東營

鎮邊營

老湘營

二十五營

三十營

計 歩兵 二萬以上

騎兵 若干

砲

是より先に敵軍が益す増加し、遼陽街道には吉林兵の大部隊あり。長順之を率ゐ、牛莊街道には徐邦道の大部隊あり。而かも新たに山海關より來援せる所の湖南兵、老湘營、三十營なるものも亦徐邦道及び總兵李光久等の部下に加はりて海城附近に迫らむとするの狀あり。



進撃の令  
下る

我第三師團長桂中將は敵の状況を偵察し、其兵數は多しと雖號令の一途に出てさ  
るとを知りたるか故に、二月廿七日を以て、明朝進撃の令を下すと左の如し

(一) 第五旅團長大迫少將は其部下第六聯隊及第十八聯隊を以て、明廿八日拂  
曉前に歡喜山に開進すべし

(二) 第六旅團長大島少將久直は其部下第七聯隊及第十九聯隊(一大隊欠砲兵  
一個大隊を率ひて共に進み、沙河沿の敵を攻撃すべし

初め二月廿七日、午前六時卅分、我十九聯隊の第一大隊は、藤甲山及び蕎麥山の諸線  
を守りて防禦線に在るや、敵兵歩隊約二千騎兵約四百砲四門を以て、前面遠距離に  
現はれ、六時三十分より射撃を開きたるも、敵軍は敢て近く迫らず。午前九時三十分  
に至りて終に後方に退却せしも、我十九聯隊は敢て之を追はざりき。

敵の別隊歩兵約五百此日午前七時に西烟台に現はれ、我前哨兵第七聯隊第八中隊  
に向ひたりしも亦敢て進撃を急にせず。午前九時其後方に退却せり。

二月廿八日、午前三時我右側隊長大島少將は海城を發して、遼陽街道に向ひ、拂曉石  
頭山麓に達し、我四個中隊をして、一發をも射撃せず、直ちに銃、鎗、突進を以て山上に

銃、鎗、突進

沙河沿の  
占領

登る。敵の哨兵五六十人山上に在りしも、皆不意に驚きて一發も之に抵抗せず、狼狽  
して山を降り沙河沿方向に逃走せり(午前五時)  
少將は直ちに令して、石頭山上高地に砲列を布き、沙河沿に向て、之を瞰射せしめ、之  
と同時に塚本大佐をして第七聯隊二個大隊を以て正面より進みて、沙河沿を攻撃  
せしめたるに、敵兵は沙河沿を棄てて退却を始めたなり、塚本枝隊乃ち沙河沿を占領  
す。

石頭山上の我砲兵は敵の退路を烈しく射撃し、此機に乗して我一個大隊(藤本少佐  
の率ゆる所は西土城子の高地を占領し、塚本支隊の右側を掩護し、砲兵と力を協せ  
て敵の敗兵を追撃したるか故に敵は長虎台に走り、此處に於て、其敗兵を收容しつ  
ゝ重ねて我に抗せむとするの狀あり、大島少將久直は之を見て急に長虎台に向て  
攻撃を始め、一方よりは石頭山砲兵をして陣地を進め以て烈しく長虎山を射撃せ  
しめ、又藤本大隊をして西土城子の高地より迂回して敵の背後に出て、以て之を夾  
み攻撃せしむ。敵は支ゆる能はず、終に長虎台を棄てて潰走せり。時に午前八時也。  
沙河沿の敵軍は、既に敗走し、敵の中央部隊は、牛莊街道に向て退かむとし、先づ大王



争ひ先  
退却

屯に入る。桂師團長は大迫支隊我左側隊に命じて之を追撃せしむ。大迫隊の一部は大王屯と大富屯との中間なる平野に進み、第七聯隊の一部は同時に大王屯に進みて之を占領せり。此時敵の一部隊は大富屯の村落土壁に據りて我を防ぐ、我第十八聯隊は進みて大富屯に迫る敵兵、頗る頑強抗戦して屈せず。我中央に備へたる歡喜山高地の砲二十餘門野砲山砲及び前方に進めたる臼砲を以て、大富屯の敵壘を撃つる廿分餘にして、敵兵は終に屈し、其壘を棄て、潰走せり。時に午前十時頃也。

沙河沿の敵の一部は遼陽街道に走りたるか故に大島少將は之を追撃し、東烟台に於て、敵に追及したりと雖、敵は前敗に懲りたるにや敢て留りて抗戦するもの無く、先を争て退却せり。

此日、朝來嚴寒なりしが、午後に及び、朔風凜冽として雪河捲き、天日光りを隠くし、咫尺濛々として辨すべからず、我兵爲に往々途に迷ひ、積雪殆んど一尺に及び、運動の艱難なると名狀すべからず。日暮に際する頃、第三師團は、第一軍司令部と共に頭河堡海城を距る一里に宿營し、大島枝隊は前衛として、頭河堡子の北方廿餘丁なる西烟台に宿營せり。

沙河沿附  
近乾線堡  
の攻撃

此日我戦死者は

下士卒

十五名

負傷者は將校一名、下士卒百〇八名。

敵の死屍大約二百人、捕虜一。

取利品小銃廿六挺、抬銃三挺

### 第八

### 乾線堡の戦

三月一日午前六時、桂師團長は宿營を發して北方に進み、八時東烟台乾線堡を距る二里弱に至り、前衛第六師團長大島少將に令して、敵情を確知し、進みて乾線堡を攻

歩兵 三大隊第三中隊

騎兵 一中隊

砲 六門

乾線堡の  
攻撃



砲兵第三聯隊の第四中隊

大島少將(久直)は、進みて乾線堡に向ひ、午前九時敵の哨兵と衝突したるが、敵は民家の土壁を利用し銃眼を穿ち、以て我に抗戦す。我前衛の一部たる内藤大隊は、敵の左側より其側面を攻撃せむと欲したるに、我林大隊も亦其側面に迫る。其時風雪漸く止みて我兵力は敵の知る所と爲るを以て、敵は其力到底守り難きとを覺りたるにや。其抵抗力頓に衰へ狼狽して乾線堡の村落假壘を棄て、鞍山站に向て走れり。我兵進みて其村落を占領す。時午前十一時前なりし。

食膳を列したるまじり、逃走せ

敵は、此日午飯を炊し終りて未だ之を喫せざるに、我兵の急撃する所と爲り、雪中不意に愕きて殊とに狼狽したるもの、如く、其營中食膳を列したる儘逃走せり。

桂師團長

此日午前乾線堡の小戦は、敵兵四千人以上なりしも、彼か抗戦弱かりしか故に、我兵負傷下士卒僅かに七名ありしのみにして戦死無し。

桂師團長は、更に乾線堡の北端に馬を進めて、敵情を視察するに、敵は前面なる老虎山及び鐵石山の要地に砲列を布き、以て我軍を誘きて中所屯湯崗子(乾線堡の北方約一里半等)に入らしめ、而かも、之を掩撃せむと企つるもの、如し、我前衛は新台子

終夜烽火を列す

前方敵を見す

(乾線堡の北三十丁村落)まで進撃したるに、午後二時半頃(前面敵の兵力は約歩兵三千を降らず、騎兵約二百、砲四門あり。敵の砲火は頗る猛烈にして、強て深く進むとき)は徒らに我兵を損するの恐れあるが故に、大島少將は其部下を戒めて新臺子より以北に深入せざらしめ、午後三時三十分及び、敵砲も亦沈黙せり。

大島少將は藤本大隊をして、大隊前哨を新臺子に張らしめ、第六旅團司令部及び第十九聯隊及び第七聯隊をして退て湯河(貧村あり海城の北五里に在り)に宿營せり。此夜敵軍は敢て來り襲はざりしと雖、終、夜、山、上、に、燄、火、を、列、し、而、か、も、時、々、我、前、哨、大、隊、の、陣、地、た、る、新、臺、子、及、口、後、方、な、る、湯、河、に、向、て、大、砲、を、射、撃、し、た、り。

其翌二月二日の早朝に及び、前衛より旅團長に報告あり、曰く、老虎山、鐵石山の敵は昨夜中に於て逃走し、今曉は前方に敵を見ずと。蓋し前夜の砲撃は、彼九連城に於る(十月廿五日の夜砲撃と均しくして、我退撃を防く爲なると)知られたり。

是に於て、我第三師團前衛大島枝隊及び師團本隊は此日(二月二日)を以て直ちに鞍山站に向て前進せり。



第九

鞍山站の形勢

鞍山店  
老虎山  
鐵石山

鞍山站は海城を距ると七里卅丁遼陽を距ると九里餘に在り。東に鞍山あり、西方に西陽寺山の要害あり。此兩山相距る僅かに三四百米突。其中間に高さ七米突の城壁を築きたる一大驛堡あるもの、即ち鞍山站にして、實に遼陽街道の一大要地たり。西陽寺山の前面に横列して、西南此街道に臨み、一夫之に當れば萬卒も過ぐる能はざるの險要たるものは、即ち老虎山及ひ鐵石山の兩山なりとす。  
初め二月一日、我第三師團前衛の進みて新台子に至るや、敵軍其砲列を此老虎山及ひ鐵石山上に布き、以て我軍を誘きて其天險の底に陥入せしめむとを計れり。桂中將は之を望み見て、人に語りて曰く、『雄なる哉、此鞍山の地勢や。若し敵にして、能く此天險を利用し、主力を集めて我軍を要せば、我軍連勝の勢を以てするとも、豈容易に之を抜くを得んや。我れ若し、かゝるを以て、此鞍山を抜かむと欲せば、左側隊を張り、此兩山の背後に迂回するに非ざれば、必勝を期し難し。』と此地の天險此の如し、桂中

雄なる哉  
此鞍山の  
地勢や

一大險要  
地を築つ  
支那將校  
兵營に疎

將の嗟嘆したるも亦宜べならずや。  
然れども、此時我第一軍の一半たる第五師團は、既に二月一日を以て、鞍山站の間道たる北東の山脉を中間より迂回して以て鞍山の背面に向て進めると、敵軍の偵知したる所なるが故に、敵軍は、此鞍山を固守すると能はず、故を以て敵將は、我軍の爲に前後來襲せられむとを恐れ、倉皇狼狽して此好天險要地を棄て、空しく我日本軍の占領する所と爲るに至る。支那將校の兵略に疎なると常に此の如し、豈憫笑せざるべけんや。

我第三師團は、進みて新台子より湯崗子に至る途上に於て、第五師團の將校は、長嶺庶岑の險を越え來りて第三師團に連絡を通ず。第三師團は、此日正午鞍山站に入り、午飯を傳へ、終りて後、牛莊城に向て進むべき方針を取り、乃ち第七聯隊の第二大隊（富永少佐の部隊）を鞍山站に留めて、之を守らしめ、而かも第三師團は此より西南を指して前進し、此夜は將軍屯に宿營せり。第一軍司令部は、湯崗子の附近なる劉家台に留まりて第五師團の來着するを待てり。時に二月二日午後二時過ぎ也。



### 第十

#### 第一軍北進攻撃の目的及び其作戰方畧の豫定

我第一軍北進の目的其方略の大要は既に廿七年十二月に於て之を定めたるものなりと雖其方略并に作戰計畫か彌よ確乎豫定せられたるは廿八年一月に在り。此作戰計畫は第一軍司令官野津中將の建つる所にして大本營の嘉納せられたる者なりと云ふ其作戰の一般方畧豫定は左の如し。

三月二日 第一軍は鞍山站の敵を攻撃す。

其兵力は左の如し

一 第三師團

步兵第六旅團

騎兵

砲兵野砲及び山砲

工兵

六大隊

一中隊

五中隊

一中隊

作戰計畫の確定

一 第五師團

步兵第九旅團

騎兵

山砲兵

一 第一軍豫備砲廠

三月三日 休

同 四日 第三師團は脱龍寨を攻撃し

同 五日 第五師團は下口子を攻撃す

同 六日 第五師團は高刊を攻撃す

同 七日 第三師團は田莊台を攻撃し

第五師團は後家油房を攻撃し

第一師團は營口を攻廠す。

但し營口は第一軍及び第二軍第一師團の全力を以て總攻撃を爲す

六大隊

一中隊

二中隊

臼砲七門



べき目的なるが故に、第一師團の主力は、三月四日を以て大石橋附近に進み、同五日は、同地に滞在し海城より歸る所の第二旅團の第三聯隊と合し、此枝隊の爲には、五日の夜を以て彈藥を補充すべし。六日には、第一師團の先頭を以て老爺廟を占領し、而て、同七日を以て營口に進むへし。

進軍順序  
一日を早く  
後方各地  
の備隊守

最初に於る進軍の順序は、此の如くなりしと雖、敵軍が意外に弱くして、鞍山站の天險も、敵は自ら之を棄てて逃走したるか故に、我第一軍の進軍順序は、随て一日を早くし、豫定の期日に先だち、三月四日を以て、第一軍は牛莊城を陥領し、又第二軍第一師團も老爺廟姜家房等の敵軍が皆俄かに狼狽して退走したるを以て、是れ亦豫定期日に先だち、即ち三月六日を以て、其運動を起し、即日營口を占領するとを得たり。是に於て、豫定の順序を更め、三月九日を以て、三師團一齊大舉して田莊臺に向て、總攻撃を行ふと爲りたる也。

第三師團の各守備隊

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 一 柞木城     | 步兵一中隊(一小隊欠) |
| 一 小孤山     | 步兵一小隊       |
| 一 海城      | 步兵一聯隊(一大隊欠) |
|           | 騎兵一小隊       |
|           | 山砲一中隊       |
|           | 臼砲 七門       |
|           | 分捕砲二門       |
| 第五師團の各守備隊 |             |
| 一 岫岩      | 步兵一中隊       |
| 第三野戰病院半部  |             |
| 一 九連城     | 步兵一大隊       |
| 一 香爐庄     | 同 一大隊       |
| 一 湯山城     |             |
| 一 高麗城     |             |



一 鳳凰城

步兵四大隊

騎兵一小隊

山砲一小隊

工兵一中隊

第三野戰病院半部

一 鳳凰城は旅團長をして其守備隊司令官たらしむ。

一 湯山城及び高麗城の守備兵は鳳凰城守備兵中より之を分遣せらるべし。

小孤山の守備兵は柵木城の守備隊中より之を分遣するものとす。

### 第十一

#### 牛莊城の位置及清軍の防禦

牛莊城は海城より遼河に達する本街道の一大要市にして日清兩軍が遼東を争ふに當り實に必争の中樞重地也。

海城より牛莊迄の地勢は平坦廣濶にして千軍萬馬を行るに適するは勿論其距離

必争の中樞重地

海城より牛莊迄の地勢

僅かに五里廿五丁に過ぎず而して鞍山站と牛莊城との間は八里餘に過ぎず。牛莊城は古來城名ありと雖今日に在りては別に外郭も無き平原の一市街たるに過ぎざる也然れども敵は市街の出入口に於て厚さ約一尺位の壁を築き以て防禦の第一線に供し而かも又市街内の壯大なる家屋の牆壁を利用し之か煉瓦壁に銃眼を穿ち以て其防禦の複郭に充用せり。

敵の兵力は非常に多き風聞ありしも實際は然らず三月四日攻撃の當日に於ける

敵兵は總計一萬以内にして之を大別すれば左の如し。

一 武威軍 六營

一 提督魏光燾の部下各副將之を分督せり

一 老湘營 十營

一 總兵 李光久等之を率ゆ。

一 劉軍 親營 三營

總兵 劉樹元之を率ゆ。

二月廿八日迄は提督徐邦道の兵二千人砲八門ありたりしが我海城の第三師

敵の兵力



團が、大舉して二月廿八日海城を出て、終日風雪の中に戦ひ而かも、此日は東烟臺附近に宿營し、翌三月一日は更に北方に進みたるを偵知し、我軍が鞍山站方面に其全力を注ぐを以て海城の空虚ならむとを察し、徐邦道は其部兵二千と砲八門とを以て海城に向ひ、三月二日午前六時海城南西に進みて攻撃を始めたなりしも我留守の歩兵四大隊と砲十二門とを以て之を防ぎ抗戦したるか故に清軍は前來數度の失敗に既に懲りたるとなれば、敢て深く進入すると能はず。遠距離に於て砲撃したるのみ、其歩兵前哨小數が我防禦線に近づきたるものあるも、午前九時廿分頃には、皆退却せり。

## 第十二

### 我軍攻撃の部署及び兵力

此日牛莊の敵は、此の如く少數なりしにも拘らず、我日本軍は、第一軍の大部隊を以て之を攻撃したるものにして、其兵力は歩兵十二大隊騎兵二中隊と四小隊、砲五十九門工兵三中隊を以てす。

第一軍の  
師團攻撃  
の部署

我第一軍の部署は左の如し。

- (一) 右翼縦隊たる第三師團は、湯崗子より右に出て本街道(牛莊と遼陽との間)耿庄子(牛莊より四里十丁)を経て牛莊城の北方を攻撃すべし。
- (二) 左翼縦隊たる第五師團は、湯崗子より左路を取りて紫方屯に出て、牛莊城の東南方より之を攻撃す。
- (三) 第五師團の一部なる山口大隊は、騎兵一小隊砲兵一中隊を合して左側支隊と爲り、城の南方に迂回し敵の退却路たる營口街道に向ひ、退路を扼すべし。
- (四) 第五師團の第廿二聯隊長富岡中佐は、今田大隊を率ひ紫方屯より右に別れ、牛莊城の東面なる木頭橋に向ひ之を攻撃す。
- (五) 第五師團の前衛司令官第九旅團長大島少將義昌は、歩兵大隊(奥山少佐の隊)及び山砲中隊を率ひ紫方屯の前方面より攻撃すべし。
- (六) 歩兵第十一聯隊の第一大隊(仙波少佐之を率ゆ)は、第五師團の總豫備隊として、紫方屯の西端に在り。
- (七) 野砲兵一中隊は紫方屯の南西端に砲列を布き以て正面攻撃を援くべし。



少佐小原  
芳太郎

第三師團  
の部署

少佐吉田  
正珍

(八) 第五師團は三日の夜に於て牛莊を距る二里餘なる崖家庄の附近に舍營す。又第三師團は大迫少將の部隊を以て前衛とし、三月三日午前六時金家台を發し普賴屯を過ぎて古城子に至らしめ、牛莊を距る一里餘の處に達せしめ、大島旅團少將久直君の率ゆる所は之を本隊とし、三日午前七時將軍屯を發して耿庄子に進ましむ。

別に鞍山站及び賓山子方面の警戒として、第七聯隊の富永大隊及び第十九聯隊の小原大隊を後方に留め以て鞍山站及び賓山子に駐屯し以て遼陽方面を警戒せしめたり。

牛莊城に對する第三師團の部署は左の如し。

- (一) 大迫部隊は城の北方なる邢家窩坊より城の北面に進撃すべし。
- (二) 佐藤大佐の聯隊第二第三大隊は大迫枝隊の前鋒と爲りて北面より進撃し、砲兵第三聯隊の第一第二中隊は邢家窩坊の放列を布き、敵の砲撃點を射撃し以て我歩兵を掩護すべし。
- (三) 第十八聯隊の第一大隊(石田少佐の隊)は、前衛の豫備たるべし。

歩兵少佐  
内藤新一  
少佐鈴木  
常武

(四) 大島旅團(久直)は内藤大隊を其右側とし、鈴木大隊を其左側とし、小姐廟附近より右方に迂回し、敵の退路を要し、牛莊城の西南方より包圍攻撃を行ふべし。

是より先に海城牛莊普賴屯等の地方各方面の地理たる、第三師團に在りては充分之を審悉せる所なりと雖、奥中將の師團は則ち然らずして、今回始めて此方面に向て進みたるものなるか故に、三月三日、第五師團が湯崗子附近を出發して牛莊に向ふや、奥中將は騎兵第五大隊を以て獨立隊と爲し、遠く牛莊方面に深入して敵情を搜索せしめ、之に次に、前衛を以てせり。前衛は歩兵第廿一聯隊の第一大隊及第三大隊騎兵一小隊と山砲兵一中隊とを以てし、大島少將義昌之か司令官たり。

師團本隊は、第廿二聯隊の第一大隊第二大隊及び第廿一聯隊の第二大隊(山口少佐の隊)歩兵第十一聯隊の第一大隊(仙波少佐の隊)山砲兵一大隊及び野砲兵一中隊を以て之を編成し、師團長奥中將自から之を率ゐ、此夜は、牛莊城を距る二里餘の處、崖家庄附近に舍營せり。



### 第十三

### 第五師團の攻撃

三月四日第五師團長奥中將は進みて紫方屯牛莊城の東方廿五丁位の處村落の西端に至り遙かに牛莊城を望み前衛司令官大島少將に命じて正面攻撃を施さしむ。前衛に附屬せる山砲中隊は紫方屯の西北端に於て放列を布き以て前面敵陣地の凸角を砲撃す。前衛歩兵第廿一聯隊の第三大隊は砲の掩護に依りて前方に開進し我第一線たり紫方屯の前方數百米突の地は平坦砥の如く二三墳墓の凸起せるあるのみにして他に一つも地物の以て身を蔽ふべきもの無し故に敵は其開豁地を利とし塙壁を牛莊市街の東面各處に設け或は堅牢なる屋壁に銃眼を穿ち以て我兵を射撃すると太た急なり加ふるに敵は無烟火薬の新式連發銃を有し速射砲がットリング兵門を其凸角部に列し急射撃を以て我に抗す此時に當りて彼我双方の士氣對等の軍隊ならしめむには此の如き開豁地を前進し得べきものに非るは勿論なりと雖彼は百敗沮喪の兵たり我は義勇に富み且つ連勝の兵なるか故に屍

第廿一聯隊の第三大隊長奥山少佐

銃眼を屋壁に穿ち射撃を急にする

我兵一直線に猛進す歩兵少佐森威敏

木頭橋

今田少佐

を踏越え一直線に敵陣に向て猛進せり時に午前十一時五十分頃也。援隊たる森大隊第廿二聯隊第二大隊は之に續きて前進し大島少將及び武田大佐(第廿一聯隊長)は終始戦線に奔走して士卒を勵ませり。奥師團長は他の山砲中隊及び野砲中隊に命し前進して各其放列を紫方屯の西南端に布き以て前方歩兵を援けて敵の砲陣を猛烈攻撃せしめ而かも師團の豫備隊たる渡邊大隊第廿二聯隊の第二大隊及び竹田工兵中隊并に軍の總豫備隊たる仙波大隊(第十一聯隊の第一大隊)をして各前進して紫方屯の西端に開進し以て正面攻撃の大島枝隊を援けしめたり。是より先に第五師團の右翼支隊と爲りたる第廿二聯隊の第一大隊(隊長今田少佐)は聯隊長富岡中佐(三造)自ら之を率ゐて紫方屯より右に別れ牛莊市街の東北端出入の要口たる木頭橋に向ふ此方面も亦四方開豁にして一つも蔽遮なきか故に敵の彈丸は紛飛すると雨の如く硝煙暗澹として空を掩ふ今田少佐は其隊の眞先きに猛進せしが敵彈の爲に其咽喉を貫かれて終に此處に斃れたる富岡中佐は之を見て義憤勃然として益す奮ひ諸隊を督勵して木頭橋に迫り正面攻撃の諸部隊と



相應して敵の壘壁に近接したるは午前十二時半頃なりき。

斯くて、今田大隊及び奥山大隊は激戦すると凡そ二時間に亘り、午後二時過ぎに至り、始めて牛莊市街東面なる敵の第一防禦線を奪取したりと雖、敵兵は極めて頑強にして、民家の土壁を死守して我に抵抗し、我兵之を抜くと容易に非ず。我兵は皆全身を暴露して前進力戦するも、敵は之に反し、壁陰に潜伏し銃眼より我を狙て之を射撃するものなるか故に、我兵の死傷するもの頗る多かりしかども、勇悼死を輕んずる我將校の鼓舞作興に勵まされ、兵卒は呐喊又呐喊以て敵の土壁を攻奪すると、數箇處に及べり、而かも其最も頑強にして能く久しく抗戦せる敵兵の土壁は大平橋東なる燒耐店及び衙門の牆壁門に伏在せるものにして、我大砲を以てするも尙ほ之を破るとを得ず。元んや小銃或は銃劍をや。

死傷頗る多し  
呐喊又呐喊  
燒耐店一發を以て之を破るとを得ず

與中將は力を以て之を攻むるの不利なるを察し、諸部隊に令して小銃射撃を中止せしめ、更らに工兵隊長馬場正雄工兵少佐に命じて此牆壁を破壊せしむ。馬場少佐は其部下工兵第一中隊を指揮し、先づ大平橋東なる燒耐製造店の牆壁を破壊せしめたるに、爆裂藥の一發を以て忽ちに其功績を奏したり。

「デナミット」

運搬

爆裂粉飛

「デナミット」の爆裂装置

是より先に、廿七年十月廿六日、九連城陥落の際に於て、敵の同城に布設せる所の地雷を振り出したるとき、其火藥たる「デナミット」二百吉羅瓦「キログラム」を得たり。馬場少佐は前途必ず之を用うるの要あるべきとを豫め慮かりたるか故に、九連城より遠く之を運搬して牛莊城に到りたりしが、今や果して其効用を著はし。同少佐は該爆裂藥十五「キログラム」と棉火藥若干とを装置して、以て其燒耐製造店第一牆壁を爆裂せしめたり。轟然たる一聲、地震ひ動くかど怪まれ、鐵石の如き堅牢なる牆壁は、忽ち四散して、八方に迸飛し、牆後に在りたる敵兵數名は或は其頭首を抓裂せられたるものあり、或は片肢を寸斷せられたる者あり、其慘憺名狀すべからず。牆壁の崩壊せる處は基脚に於て一米突半、壁嶺は頭部に於て三米突とす。工兵乃ち更に第二の牆壁に向て、「デナミット」の爆裂装置を施し終らむとするや、壁中の敵兵は之を覺り、此處を破壊せられては、萬死を脱かれざる一大事なりと思惟したりけん。頗りに壁上部の煉瓦を毀ち碎き、壁下に在りて動作する所の我工兵の頭上に其煉瓦をして墜落せしめたるが故に、瓦石紛々落ちて地を穿つ。此時若し我工兵の動作にして少しく遅緩ならしめたらむには、此墜落煉瓦の爲に、多少の傷を被ひり危急



轟然轟轟  
に耳を掩ふ  
に過らざる

に陥るとを免かれざるべきも、我工兵働作の極めて敏捷なりしが爲に、彼れ敵兵の妨害は一つも其効無かりき。而かも、此一刹那に、火は已に導かれたるを以て、轟然たる轟轟は耳を掩ふに遑あらず。第二増壁は前回よりも猛烈破壊せられたり。今一瞬間前まで其壁上に在りて、壁瓦を衝き砕きつつありたる所の敵兵は胸体を殘せども、四肢頭首は、共に飛散し去り、眞逆様まに踏塚の上より墜ちて、地土に逆立したる儘に死し居たり。見る者誰か其慘狀に愕かさらんや。

我工兵は、尙ほ進みて壁内に入り、家屋の壁下に四十「キログラム」の爆薬を装置し、更に之に點火せむとするや、頑強強悍なる敵兵も、既に二回の爆裂を聞きて其心膽を寒やしたりけむ。忽ち白旗を其壁頭に懸へせり。是に於て焼酎製造店內の敵兵は悉く降伏し、辨髪を繋かれ、頭を低れ、蠢々然として、哀を求むるもの二百八十名。而かも、大平橋頭なる酒店の複郭終に橋陥落し、之を圍みたるものは、歩兵第廿一聯隊第廿二聯隊及第十八聯隊の各一部隊にして、其工兵第一中隊の爆裂せしめたる口より壁内に進入して敵兵二百八十名の降虜を捕獲したるものは、第廿二聯隊第一大隊（故今田少佐の隊）の第三、第四二個中隊也と云ふ。

轟々哀を  
乞ふもの  
三百八十  
名

第廿二聯隊の半大隊（第一中隊第二中隊）は之と同時に木頭橋を夾みて、衙門の敵兵と互に射撃を交へたりしも、日暮に及び、終に其攻撃を中止したり。夜に入りて、第五師團の前哨線は之を砂河（牛莊市の東部より市の一部を貫きて此西に向て流るる砂河にして湯城河の末流なり）の左岸に設け、歩兵第廿一聯隊は大平橋より、木頭橋に至る迄を警戒し、歩兵第廿二聯隊は木頭橋より柳屯橋に至る迄の間を警備したりき。

### 第十四

### 第三師團の攻撃

第三師團長桂中將は、牛莊城西北面攻撃の任務を奉し、大迫旅團をして其北方より進撃せしめ、而かも大島（久直）旅團をして其西方に迂回せしめたり。三月四日午前十時、大迫旅團の先鋒たる歩兵十八聯隊長佐藤大佐は、其部下第二及び第三大隊を率ゐて牛莊城を距る八百米突の處に達するも、敵は未だ其射撃を開始せず。蓋し敵は其防禦線たる堅牢なる土壁の陰に潜伏して、我を射程内には誘寄



敵兵沈黙

し以て一撃の下に之を掩撃せむとを企てたるもの如し。我前衛附屬の砲兵は、城の西方、那家、窪坊の前面二百米突の位地に其放列を布き、敵の砲撃點を射撃して以て先鋒歩兵佐藤大佐の前進を掩護し、佐藤大佐の部下二大隊は、既に八百米突の距離より射撃を始めたれども、敵は依然沈黙して之に應戦せず。佐藤大佐は敵軍の計あるとを顧みず、急速其兵を驅りて猛進し、約二百米突の距離に達するを見るや、敵兵は市街西端の塙壁に銃眼を穿ちたる處に據守して、小銃を亂射し、以て我兵を要撃す。我兵の位地は平坦開豁にして、一つも地物の蔽遮なきと、城東に均し、敵兵は此地勢を利用して射撃すると益す猛烈なるか、故に我兵死傷甚からず。佐藤大佐は此時先頭に立ちて衆を督せしが、敵彈雨の如く大佐の右腕を傷つけ、軍旗を貫洞せり。大佐は之を事もせず、手巾(ハンケチーフ)を以て自ら其傷創を縛し、尙ほ彌上前進せり。大迫少將は前面の戰鬪此の如く激烈なるを望見し、前衛豫備隊たる石田少佐(正珍)の大隊第十八聯隊の第一大隊に命令し、直ちに赴き援けしむ。石田少佐は欣然として、全隊を展開し、軍歌を高唱し、つつ前進せしめたるに、此石田大隊軍歌の響は、前面佐藤大佐部下二大隊吶喊の聲と互に相應して、四面に響き、其壯烈を極め

佐藤大佐  
衆に先ち  
て進む

石田少佐  
軍歌高唱  
して進む

第十八聯隊  
の第二  
大隊長  
少佐  
大迫  
和太郎

大島少將

第一大隊

大隊長  
林太郎

たり、今や牛莊市街西端に迫れる第十八聯隊第二及第三大隊の各中隊、突貫を始めたる各兵は、其後方の掩護と石田大隊軍歌の音とに勵まされ、勇氣百倍し、各先を争て敵前に突進せしが、此時敵彈砲彈の碎片、佐藤大佐の右足關節、膝骨に傷つけたるか爲に、猛勇無双の大佐も地上に倒れて行歩すると能はず、劍を杖つき敵を睨みて部下を督勵せしかば、部下第二大隊長門司少佐は、大佐に代りて聯隊を指揮し、敵前に密接し、土壁を隔てて銃劍互に相觸突するに至りしかば、敵は終に支ゆる能はずして退却を始め、我第十八聯隊は牛莊市内に突入せり。

茲に又大島久直少將は、小姐廟附近より迂回して西方に進みたるに、敵は農家に據りて防戦を始め、幾はくも無く敵の一部は西南に向て退却を始めたり。三好大佐第七聯隊長は、此機に乗し、至線突貫を以て牛莊西北端一帶の民家を占領せり。時に午後一時五十分頃也。内藤大隊第七聯隊の第一大隊は之に續きて敵兵を驅逐し、牛莊市の南方に進入し、鈴木大隊は其西北部を包撃せり。

大島久直少將は、林六隊第十九聯隊と共に牛莊の北西を迂回して、遠く城の南西部に出で敵の退路を射撃し、多數の逃兵を斃せり。



大隊長内藤新一郎

内藤大隊は、此日午後三時過、牛莊市の西南部に進入したる後、方向を轉じ、専ら南部に向て行進する途中、赤旗五六旅を纏へせる敵の一小部に逢ふ。第一中隊之を邀へ猛烈に射撃したるに、敵は忽ち逃散し、之を追へども、其踪跡を見ず。我第一中隊は之を怪み、其遠く逃れ去るべき理無しと認めれば、其附近を搜索したるが、果して傍近市街の質店中に隠れたる一大部隊の敵兵あるとを發見せり。此質商店は北清地方の常として、宏壯堅固なると城郭の如き一構を備へたるものにして、敵兵は豫て此家屋を以て其陣營の一つとしたるものゝ如く思はる。北西部の一門を除くの外、他の各門は皆煉瓦を積みて之を塞きたり。其構造の宏壯にして防禦の堅固なると實に驚くべし。

敵兵質店中に隠る

時に佐藤大佐の部隊たる第十八聯隊の一部は、既に該店の西北を圍み、其東北には第廿二聯隊富岡中佐の部隊あり。故に三好大佐は、内藤大隊をして今や其東南を包圍せしめ、其門を破らむと欲すれども、極めて堅牢にして破るを得ず。且壁内に在る敵兵は窮鼠の勢なるか故に、隙を窺て狙撃するを以て、我兵は容易に其門を破るの目的を達すると能はず。此外圍西面に放火したるものあり。内藤大隊も亦其東南附

家屋に放火す

近の家屋に放火したれば、俄々たる猛火は二方面に漲りたりと雖、敵は少しも之に屈せず。我兵は、該邸宅外圍牆壁の破損せる處を穿ち擴めて、之より進入せむと企つれば、敵兵は忽ち之を覺りて、其點を叢射すると雨の如し。我兵は百方突進の途を工夫し、乃ち該邸宅の隣接せる他家屋の外壁に一大孔を穿ち、玆に始めて我兵の進路を開きて突入せしに、敵は之を覺知し、早くも退きて、更に内部の牆壁に據り、防禦を爲せり。此牆壁も亦堅牢なると、燒酎店の牆壁太平橋頭に於る敵兵の據守したるものにして、馬場工兵少佐が爆裂薬を用ひて之を破壊したる處に同じ。内藤大隊は、種々考按を運らし之を破らむとすれども、其効無かりければ、一方に、彼の逃路を開き其逃出を待ちて之を掩撃せむとを計りたれども、敵は此計に陥らず。鈴木少佐は土人二名を雇ひ來りて邸中に入らしめ、以て敵兵を諭とし、其投降せむとを切に勧めむと計れりと雖、彼土人等は敵を怖れ一言の問答をも遂ぐる能はずして空しく歸り來れり。鈴木少佐乃ち三好大佐に請て勸降書を作りて之を敵中に贈ると二回に及びたるも、敵兵敢て應せず。三好大佐は激怒し、斷然之を焚殺し盡さむと決し、大島旅團長に先刻請求せる所の山砲二門の恰かも此處に來れるを幸とし、該邸周圍の

敵兵應ぜず



紅燄天に  
漲る

投降書

鄰家に放火せしめ、而かも一方よりは其山砲を以て邸内に射撃すると數發、會ま西鄰の火は延て該邸の火藥庫に移り爆發すると數回、時に日は己に没して火勢は益す猛く、紅燄天に漲る。此に至りて流石の頑強強悍なる敵兵も、今や力屈し、膽落ちて、奈何ともする能はず。夜八時三十分頃一顆の提灯を長竿頭に懸けたるもの東面圍壁の上に現はれ、壁外に投せらる。我兵就て之を見れば投降書二通あり之に附着せらる。其文左の如し

○其一

先接來信、連回數音未接回信、我軍降、恐必又開大砲、此致企候回信、切莫以陰陽相待。

貴國 大員台照

○其二

早前付來一音、未知收到否、恐必開來大砲、即候回信、我等軍士以免替忙、此降。

貴國 大員台照

三好大佐は即ち返書を記して之を壁中に投し、速かに門戸を開き兵器を引渡すべ

きとを示す。敵兵は狐疑し、以爲らく「門を開かは則忽ち闖入屠殺せられむ乎」と。故に脚蹴して未だ決せず。我通譯官をして壁を隔てて之か決答を促かすも、彼は徒らに其疑を反覆するのみ。我は乃ち之に向て「若し速かにせずんは一舉して之を攻破らむ」との勢を示したりければ、彼終に之に恐怖し、西北部の大門を開き五六名の兵卒を遣はし降を我軍に乞ひたるは夜十時なりき。我軍は乃ち敵兵捕虜の武器を收め、捕虜將校十餘名下士卒四百餘名を處分し、是に於て、第三師團は北郊陣地より市内に行進して一の米商店に宿營し、而かも大迫旅團は、牛莊の北郊村落に、大島旅團久直は市街の南端に宿營し、南方營口及び田莊臺に通する方面は大島久直旅團之を警戒し、牛莊北方は大迫技隊之を警戒せり。

此日の戦は四日午前十時五十分開始、日没前に於て、市街の要部は、東北最も先つ我第廿二聯隊及第十八聯隊の占領する所と爲り、次に次ぎ市街の西南も亦第七聯隊及び第十九聯隊の攻陷する所と爲れりと雖、頑強なる敵兵の市街各大牆壁ある家屋に據りたるものは、南方逃走の路を塞かれたるか爲に、兎鼠の勢と成り、益す死力を以て市街戦を始めたるか故に、夜に入りても、尙ほ各處銃聲止まず。其翌五日



午前八時に至りて、全市街始めて銃聲を収め、戦局を終結したり。

### 第十五

## 彼我兩軍の死傷捕虜及び我軍の戦利品

我軍の戦死は將校三名、下士卒六十九名、馬匹八。其負傷は將校十三名、下士卒三百〇五名、馬匹四にして、之を區別すれば左の如し

我軍の死傷		戦死者	傷者
奥山少佐の大隊(第廿一聯隊)	九	七	二
今田大隊(第廿二聯隊)	二	三	九
其他の諸隊	五	一	九
歩兵第十八聯隊(佐藤大佐部下)	三	一	六
歩兵第七聯隊(三好大佐の部下)	八	一	八
其他の諸隊	一	六	三
計	七	三	一

敵軍の死者は、約千八百餘人、其負傷は未だ詳かならず。敵の降虜と爲りたるものは、將校廿三人、下士卒六百十一人、并に分捕馬匹三百廿九頭。

我戦利品は左の如し。

一 山砲『グルッロ』式支那新造	十二門
一 野砲	二門
一 『セントウ』六珊新式獨逸製砲	二門
一 『ガットリング』速射砲	六門
一 小銃	千八百挺
一 小銃彈藥	廿二萬六千發
一 大砲彈藥	七千發
一 火藥	千六百四十八箱
一 旌旗	二百十六
一 精米	千百廿石



- 一 大麥 百五十石
- 一 高粱 百十石
- 一 馬匹 三百廿九頭
- 一 天幕 八十九張
- 一 馬蹄銀 二百十三
- 一 防寒毛皮裘及軍服 無數

### 第十六

#### 營口の占領

營口港は牛莊城を里ると僅かに十二里廿五丁に過ぎず故に牛莊にして既に陥るときは營口の形勢は遼陽との連絡を中斷せられ孤立の危地に陥ると知るべき也。

又營口は遼河の左岸に在りて遼河の氷凍全開の期日は毎春三月に在り故に清軍は其氷開以前に於て日本軍を攻撃するの便を有し山海關より遼東に至る連絡を

牛莊と營口との關係

遼河の氷は毎春三月に在り

遼河解氷關係

營口の地永く據守すべからざるを看破す

清軍の退却

營口に屯留する者の二千餘人

保ちて其大軍を遼河東岸に發遣するを得と雖遼河の氷開に至りては東西連絡の便を失ふや必せり。

清軍の將帥宋慶は營口の地たるを以て永く據守すべからざるを看破し營口に在る所の清軍及び營口附近老爺廟後家油房等に在る各軍隊を撤回して遼河の西岸に退守すべき方略に決し三月三日四日を以て其運動を始めた。

三月四日歩騎大約二千餘の清兵は西七里溝大平山を距る三千五百米突に現はれ漸次南進の狀を示せり我第一師團第一旅團の歩兵第一聯隊第三大隊長今村少佐(信敬)は大平山に陣地を占めて之を邀へ宮原大尉は砲兵を其山東に列し歩兵第一聯隊隱岐大佐は第一大隊第二大隊を率ひて小平山(東七里溝の東北三千五百米突)に向へり。

既にして大平山の我砲隊は敵の縱隊我射程に近づくを待て數發を發射するや敵は狼狽して北に向ひ老爺廟方面に退却せしむ我兵敢て之を追はず。

之に次ぎて敵の大部隊遼河の東岸より退却して田庄臺營口を距る六里三十丁に據り營口に留まり屯する者は僅かに二千餘人に過ぎざりき。



營口に向  
て運動を  
始す

我第一旅團は、隱岐大佐の部隊第一聯隊をして、營口に向て運動を起さしめ、三月五日正午、隱岐大佐は第一第二の二個大隊を率ゐて、聶家堡子を發し、北小平山に進み、聯隊本部及第一大隊を此に駐め、第二大隊をして老爺廟を占領せしむ。此日山地師團長は西少將の第二旅團を率ゐて大石橋に進入せしが、營口の敵狀は、此數日間に俄然大に變じて、敵軍は遼河西岸に退かむとするの兆候を看破したるを以て、急に營口を進撃するに決し、一軍悉く篝火を焼き征裝を整ひしめ、明六日を以て營口に向て進發せしめむとを令す。

營口進撃  
に決す

三月六日、午前五時、山地中將は、西旅團第二及び獨立騎兵大隊(隊長秋山好古)を従ひて大石橋を發し、後家油房に向ふ。乃木少將は其旅團第一を率ゐて左翼を爲り、孫家崗子を發して大平山の麓を過ぎ、韓家凹子營口を距る二里餘大平山七里溝桑墩子に通ずる處大平店を経て營口に向ふ。

初め師團の方略は、此日後家油房牛莊城に通ずる街道の富村にして、營口を距る二里三十丁に宿し、前衛乃木旅團を韓家學房後家浦房を距る一里餘老爺廟を距る二里餘營口を距る一里餘附近に宿せしめ、明七日の拂曉を以て、第一軍と相應して總

第一師團  
最初の計

攻撃を施し、以て營口を一舉の下に占領せむとするの計畫にてありしなり。此日我乃木隊の前衛隱岐大佐の部隊(歩兵第一第二大隊及び工兵第一大隊の一中隊野戰砲兵第一聯隊の第一中隊)が韓家學房に迫るや、敵は營口の西砲台より海岸砲を轉旋して我軍に向て射撃すると數十發其巨彈轟々たる響は地に震ふも、照準粗漏なるが故に、彈は皆空中を飛び過ぐるもの多し。

然れども、市街の内外に於て、何等の守備防禦を設け、何等の計畫を施し、以て我を俟ちつつありむも亦測り難きか故に、隱岐大佐は韓家學房に於て戰鬪準備を整ひ、志岐中尉に一小隊を附し、斥候として、營口の東方面に向はしむ。中尉の進むと約千五百米突にして敵の偵騎三名に遭ふ。敵は直ちに其馬を回らして走る。志岐中尉は直ちに之を尾撃して營口市街の東門内に進入せり。

隱岐大佐は、此狀況を望み見て、敵の空虚なるべきを察し、前兵大隊長竹中少佐(安太郎)及び前衛本隊長香川少佐を率ゐ、前衛千六百餘人を以て營口東面の市内に猛進したり。竹中大隊(第一)は其尖兵中隊長本郷大尉に命じて營口市街の諸門及び電信局を占領せめし、殘餘の部隊は悉く東門前に開進して敵兵の應戦を期せしに、何

營口市街  
の東門内  
に進む  
敵の空虚



敵は逃走の計に出ず

我兵水上の歩行に慣れず

一弾を費さず之を占領す

予料らん敵は早くも逃走の計に出で、營口北側の中央より遼河の氷上を涉りて一直線に河の北岸に退却せり。竹中少佐は之を見て『彼逃かす勿れ』と一令の下に、第三中隊第四中隊をして其上流を渡り遼河水上敵の走路を扼して一齊射撃を行はしむ。其距離千米突乃至五百米突、敵兵死傷頗る多し。既にして、營口市街の西北面より河水を涉り河岸に沿って逃走する敵兵彌よ多し。竹中少佐は更に之を追撃したりと雖、氷上の歩行には我兵未だ之に慣れざるも、敵兵は極めて之に慣れたるが故に、其逸走すると迅速を極む。我兵終に之に追及する能はずして返る。

前衛本隊香川大隊は、營口の東門を距ると約五千米突の處に至りしとき、隠岐司令官より營口西岸の砲臺を占領すべきの命を受く。乃ち此日特に編成せる所の撰抜小隊隊長長堀中尉を以て先衛とし、第七第八二個中隊及び工兵小隊を率ゐて營口の西方面に向ひ、川口大尉の中隊(第八)をして營口市街南方の兵營に當らしむ。然るに、此兵營屯戍の清兵は此日夙に戦はずして退走せるが故に、我第八中隊(川口大尉の部下)は一弾を費さずして之を占領せり。市街北方の兵營も亦之に同しく、夙に空虛にして、營内處々に脱き棄てたる兵服の

狼籍たるを見るあるのみ。

選抜小隊は進みて砲臺を距ると約八九百米突の處に達し、一小橋を渡りて大約五十米突を進むや、忽ち轟然として爆發する二發の地雷火に罹りて、我二名の兵卒は粉碎空中に飛散せり。之に續きて又一發其近傍に爆裂したりと雖、幸にして死者無く、僅かに輕傷者一名ありしのみ。

### 第十七

#### 遼河岸砲臺の占領

營口の西端遼河に臨める砲臺に在る要塞砲五門は、其堅牢なる砲臺上より、盛んに我兵に向て連發し、其彈着は頗る確實にして、侮り難きものなりしが故に、香川大隊は、其隊形を變換して單線を爲し、低地を利用して、茲に停止せしめ、工兵をして、其前面を踏査せしめたるに、兵營前面及び砲臺前面に於て、處々に地雷を埋設し、以て我兵を塵殺せむとするの企畫あるとを發見せり。故に工兵第一中隊長齋藤大尉は、直ちに部兵を指揮して其火藥庫附近に設在せる所の地雷線を切斷せしめ、以て我兵

彈着確實

地雷の埋設



敵は一人の影だも無し

の進路に安全を與へたり。然れども、香川少佐は之を急撃するの不利なるべきとを察し、午後五時半を以て、後方の一村落到に集合せり。隠岐聯隊長は、第二大隊の第五第六二個中隊を率ゐて、軍旅と共に東門前に進み、竹中大隊が追撃する敵の敗兵逃走の状況を望み見つつ在りしが、西方河岸砲臺の攻撃は甚だ困難なるべきとを察し、自ら其二個中隊と砲兵一中隊を率ゐて、香川大隊の戦闘地なる砲臺前面に前進し、適宜の陣地に砲列を布かしめ、以て一舉に之を抜くべき準備を爲したりと雖、日既に西山に傾きたるが故に、夜を冒かして砲臺を攻むるの無益なるを慮かり、乃ち香川大隊に命し、此夜は營口西面河岸一帯の地を守備せしめたり。翌七日拂曉、香川大隊及び砲兵中隊は、進みて砲臺の下に迫り、一齋に吶喊の聲を發したるも、寂々として之に應ずる者無し。乃ち我中隊は吶喊して砲臺に攀登し、之に突入して見れば、臺上に残れるものは、唯螺旋を抜き去りたる『カネー』式の大砲數門と山の如き彈藥と、あるのみにして、敵は一人の影だにも無かりき。

### 第十八

#### 營口市街良民の保護警備の處置及戰利品

營口居住歐米人の保護

營口は從來北清著名の開港場にして、之に居住する所の歐米人(宣教師并に商人)若干あり。而かも、我軍の此地を占領するや、野津第一軍司令官は豫め此地歐米人保護の事に深く注意を加へ、福島中佐村木中佐を特に營口に發遣し、英米領事に向て、我軍同港占領の事を報知し、且つ戦闘中に於る憂慮を慰め、安否を問ひ、我軍の占領中は此市中の秩序を維持し、彼歐米人の生命財産共に特別保護を厚く加ふべきとを懇諭したるに、英米領事は之に對して深く日本軍の好意を謝し、之を在留の各外國人に傳ふべきとを兩中佐に約したり。

爾來我軍は三中隊を以て特に、營口居留地の防護警備に充て、市中支那人の順民并に外國人共に厚く之を保護し、以て土匪の侵害を防ぎ、嚴重なる取締を施したり。戰利品は大砲四十五門、小銃百八十挺、火藥桶入五十八箇、函入八十五箇、米五俵、軍艦瀾雲號、小汽船二隻、兵卒服五百餘組、兵帽二百餘等なりとす。



### 第十九

### 田莊臺の戦闘

錦州  
北京より遼東に達する大道山海關より東北四十二里に在る樞要の一城市を錦州と爲す。即ち左の如し。

山海關より廿六里十丁

寧遠州より十五里廿丁半

錦州より 十一里

寧遠州城

錦州城

十三山站

十三山站  
十三山站は遼東街道屈指の大驛にして、戸數三千餘市況甚だ盛んなり。其地は山海關營口奉天府牛莊等に聯絡する要點を占むるを以てなり。

糧食の後援根拠地  
田莊臺の形勢  
遼河の壁  
清軍の遼東に出る者は、此十三山站を以て其糧食の後援根拠地と爲し、十三山站より廿八里にして田莊臺あり。田莊臺は營口を距る七里弱遼河の右岸に在る大邑にして、水陸運輸の便利に富み、且つ防守に便なる要地也。

遼河の流は田莊臺の南東を擁し、其河幅大約千米突、水深は平時三米突、乃至五米突

千軍萬馬一齊に之を踏みて渡るべし  
踏みて渡るべし  
此地附近は渺茫たる曠原なるか故に、一望豁然として別に地物を掩遮するもの無し、所謂守るに極めて易くして、而かも攻むるに極めて難き處、而も能く訓練する四聯隊の歩兵と若干の砲隊とを以て之をすらしめ、むには我軍三萬を以て之を攻むるとも豈に一二日を以て容易に之を陥るを得んや。

なりと雖、冬季は堅凍して、鐵板に均しく、千軍萬馬一齊に之を踏みて渡るべし。此地附近は渺茫たる曠原なるか故に、一望豁然として別に地物を掩遮するもの無し、所謂守るに極めて易くして、而かも攻むるに極めて難き處、而も能く訓練する四聯隊の歩兵と若干の砲隊とを以て之をすらしめ、むには我軍三萬を以て之を攻むるとも豈に一二日を以て容易に之を陥るを得んや。敵軍は既に牛莊を失ひ、三月四日又營口の守るべからざるとを覺りて、田莊臺に退きたるが故に、我軍の之を攻撃するは頗る難事たり。何となれば遼河水開の時期は毎歲必ず三月に在るを以てなり。

五十餘營

將校斥候の偵察

敵の兵力は、當時田莊臺に集合せるもの、毅字軍八營、及び前敵軍、并に銘字軍、老湘勇等を合し五十餘營、大約二萬餘人、宋慶之が總統たり、馬玉崑、徐邦道、劉盛休、劉樹元、魏光燾、曾廣鈞、余虎恩、熊鐵生、譚文煥、吳元愷、劉光材等諸將校分て各營を率ゆと云ふ。我軍は遼河の氷開に先ちて、敵將宋慶之の全軍を殲滅せむと欲すれば、急に之を撃たさるべからず。故に牛莊城攻撃の前日に於て、我第三師團長桂中將は、夙に將校斥候に命じ、遼河の氷上尙以て我軍を涉らしむるに堪ゆべきや、否やを偵察せしむ。此斥



候は砲兵少佐兵頭雅譽に命せられ、同少佐は三月四日牛莊城陥落の日を以て牛莊を發し、藍旗堡、小房身及び大房身を経て遼河を渡り、其右岸なる下口子迄野砲を通過する目的を以て通路偵察を遂ぐべきの任務を受く。而かも兒島參謀、步兵大尉兒島某も亦同方面同事の偵察を命せられたるか故に、四日午後三時を以て兵頭少佐兒島參謀は騎兵一箇中隊隊長三浦大尉を率ゐて牛莊を出發せり。

但し此偵察實行をして容易ならしめむか爲に、特に援護として歩兵一大隊隊長鈴木少佐及び騎兵一中隊隊長三浦大尉を附せられたるか故に、騎兵は兵頭少佐に隨て出發せりと雖、歩兵鈴木大隊は牛莊市街潜伏敵兵の搜索に従事中なりしか故に、同時に出發する能はず。該大隊長鈴木少佐は、假令深夜に及ぶとも、可及的前進し、小房身附近に至り宿營すべき決心なるとを兵頭少佐に約したりき。兵頭少佐隨行の騎兵中隊は、敗敵を搜索しつつ前進せしが、此時に當り、牛莊城の敵兵敗退せるもの、其大部分は營口に退きたるか故に、田莊臺街道に直ちに退きたる者無し。然れども、大房身には若干の敵兵ありと云ふ。土人の言故に三浦騎兵大尉は警戒を加へつゝ、行進し、四日午後十二時前小房身に達し、大房身を搜索せしむるに、

敗兵偵察  
隊に尾し  
來る

兵頭少佐  
兒島參謀  
偵察の目  
的の第一  
段

遙に燦火  
を見る

敵兵無しと云ふ。乃ち行進して大房身村端に至れば、忽ち銃聲あり、敗兵が我に向て射撃したるもの也。三浦大尉は若干騎に命じて之を撃退せしめ、敵の敗兵一人を捕へ敵情を探問するか爲に、此時若干時を費やしたり。

我偵察隊は更に行進を起し、大弓灣遼河々岸の地名に向ふ途中敵の敗兵我一行に尾して來る者あり、或は側面より小銃を發する者あり、危険頗る太甚だし、我騎兵は之を捕獲しつつ進行せるか爲に、大に時間を費やし、五日午前三時卅分漸く我目的地たる遼河に達するを得たり。

土民の言によれば、「遼河の右岸なる下口子には敵の歩兵宿營せり」と。故に兵頭少佐、兒島參謀は、徐かに遼河の水上を騎行し、兩岸の景況を審らかに、視察し、氷の厚積を審確に檢視して、以て、此偵察の目的第一段を達したるか故に、午前四時遼河を發して、我歩兵大隊の宿營地昨日豫約の地に赴ひ、以て報告書を記して之を遞騎に託せむとを期し、歩度を急ぎたり。

是より先に、往路大弓灣に達する以前、東方四五千米突を隔てて、遙かに燦火を見る。我偵察隊は以爲らく、是れ鈴木大隊が到達したるものならむと、歸路に於る偵察隊



一隊賊聲を發す

敵が來た。拔け。刀。呼號。敵偵察騎兵を圍む

重圍を衝て出ず

は、其後衛を置き、以て本隊の距離を存し、三浦騎兵大尉兒島參謀とは本隊の先頭に立ち、兵頭少佐は本隊の後尾に立ちて行進せり。午後五時と覺ゆる頃に先きに遙かに望みたる燎火の地位に近づきたるか故に、此一行は、是れ我鈴木大隊の宿營に着せるものならむと思料ししたり。時に、彼燎火の周邊に集まれる一隊、忽ち喊聲を發す。我偵察隊の一行も亦之に應ず、後方に在りたる者は、鈴木大隊が歡聲を以て之を迎へたるものならむと想ひたりしならむ。豈料らんや、敵が來た。拔け。刀。呼號を聞く。と一聲、兵頭少佐は疾驅して前方に進み、村内に至れば、敵の歩騎兵數百人は、我偵察騎兵三浦中隊の一行を圍みて、鬭争の眞最中なりき。

既にして、我騎兵の後方より至れるものは、彼敵を外邊より攻撃せむんと欲せしも、兵數寡少にして、意の如くならず、敵の圍む所と爲り、刀を揮て彼と鬭ふのみ。而かも、敵の兵數は益す増加し、歩兵は村の東北端より我を射撃し、敵の騎兵も亦來りて我襲撃せり。

若干分の後、三浦中隊長は重圍を突出せむか爲に、時機を失はずして、『襲撃』の令を下し、一齊に敵の圍を衝き破りて、東方に突出せり。

偵察隊最困難を感ず

中山特務曹長の注意

士官以下十九名の飲員

此際偵察隊一行が、最も困難を感じたるは、道路滿地積雪の深きと、前方なる我騎兵の爲に、殺傷せられたる清兵屍体か累々として途上に横はり、以て我馬行を妨害したるに在り。我騎兵の若干及び武藤通譯官が此際落馬したるものは、皆清兵屍体の爲に其馬が蹉跌顛倒したるか故なりき。

既にして、我兵一行圍を脱して疾驅すると、大約百米突なる頃、『集まれ』の號令を聞く。騎兵曹長(特務)中山は三浦隊長の所在を尋ね、其安否を懸念しつつ、各兵を收容し、各兵沈着して能く事に従ふべき旨を戒告せり。此くの如き咄嗟危迫の際に處して、中山特務曹長の注意此に及べるは、豈感服せざるべけんや。

顧みて敵方を望めば、敵騎百餘は、再び我偵察隊一行に向て尾撃し來らむとする者の如く、呐喊行進を起したり。兵頭少佐は、其偵察の任務迅速復命を必要するか故に三浦中隊長の所在を尋ぬるとを停め、騎兵中隊長に代り我騎兵を集めて、速歩を以て背面行進を取らしめ、敵影を見ざる處に至りて人馬を撿せしに、士官以下十九名の飲員たるを發見せり。鈴木大隊の宿營地に赴むかとせしも、其附近地處々に燎火の燄々たるありて、敵兵なるや否やを測り難きが故に、之を避け北斗星に依り進



偵察隊の  
功勞

路を東方に取り、平野積雪の間を馳すると大約二時間餘の後始めて一小村に達し、途を村民に問ひ、午前七時三十分藍旗溝に歸着するとを得たり。是に於て、兵頭少佐は、遼河偵察報告書を記して之を遞騎に托し、疲勞せる馬匹に湯を與へ、午前九時頃牛莊城に歸りて直ちに師團司令部に復命せり。此偵察隊一行の報告に依りて、遼河の氷凍堅固安全なる事實は、我第一軍司令部の確認する所と爲れり。此偵察隊の功勞は實に大なりと謂ふべし。此の如くにして、我軍は、遼河の氷上は安全に野砲を通過すべきは勿論、何程の大軍人馬をも通行するに堪ゆるとを確認するを得たり。故を以て、田庄臺攻撃の方略は、速かに決定せられたり。當時我兵力は左の如し。

第一軍司令部

第三師團司令部

第五旅團司令部

第十八聯隊

第六旅團司令部

第七聯隊 (第二大隊欠)

第十九聯隊本部及第一大隊 (第三中隊欠)

騎兵第三大隊 (二小隊欠)

砲兵第三大隊 (第四、第五、二個中隊欠)

工兵第三大隊

衛生隊

第五師團司令部

第廿二聯隊 (第三大隊欠)

第九旅團司令部

第十一聯隊第一大隊

第廿一聯隊 (第六中隊欠)

騎兵第五大隊 (一小隊欠)

砲兵第五聯隊 (第三大隊欠)



- 工兵第五大隊本部及第二中隊
- 衛生隊
- 豫備砲廠
- 第一師團司令部
- 第一旅團司令部
- 第十五聯隊
- 第二旅團司令部
- 第二聯隊
- 第三聯隊
- 騎兵第一大隊
- 砲兵第一聯隊 (第三大隊欠)
- 砲兵第二聯隊第二大隊
- 工兵第一大隊 (二小隊欠)
- 衛生隊

一般方畧

我軍は三月九日午前を期し、田庄臺攻撃を始むるに決定し、其一般方畧は左の如し。

- (一) 第三師團は砲五十餘門を以て正面より攻撃すべし
- (二) 第五師團は賞軍臺より敵の退路に出て之を包圍すべし
- (三) 第一師團は西南より敵の右側面に出て之を包圍すべし
- (四) 右三面同時一齊に運動を開始すべし

即ち我軍の左翼は第一師團にして、其右翼は第五師團たり。而かも、其中央は則第三師團たり。

是より先に、日清開戦以來、我軍は、毎戦、少數の兵に過ぎざりき。平壤の役は、僅かに第五師團の大部分と、第十八聯隊とを併せたる者に過ぎず。九連城附近の戦にも、亦僅

毎戦少數の兵

計 歩兵廿大隊と二中隊

騎兵四中隊と五小隊

砲 九十一門

工兵四中隊と二小隊



軍の全力を用ひたるに非ず

かに第三師團と第五師團と一半第十旅團とを併せ用ひたるに過ぎず。故に第一軍と稱せるも其實は軍の全力を用ひたるに非ず。

又旅順口及び威海衛の攻撃に於るも亦第二軍と稱せりと雖、是れ亦一師團に加ふるに他の一旅團を以てしたる者にして軍の力を有したる者に非ざりし也。而かも、軍以上の大兵を以て一齊攻撃を爲したる者は此田庄臺の一戦あるのみ。

遼河右岸

攻襲偵察

遼河の左岸は、其地域限り有り、且つ我兵の海城に在ると昨冬より今春に亘りしか故に、其敵情の偵察も亦悉くせりと雖、遼河の右岸に至りては、其地域深曠にして、我偵察の未だ及ばざる所ありき。左れば敵の田庄臺に據守せる者其兵力果して幾何はくなる乎を偵察すると頗る易からず。故を以て、我軍は先づ攻襲偵察を行ひたり。

大島久直

此攻襲偵察の任務を授命せられたるものは大島久直少將にして、同少將は、三月八日拂第曉三師團の前衛歩兵若干及び野砲十餘門を以て遼河の沿岸に排列し、田庄臺に向て砲撃を始めたるに、敵は我軍の深意あるとを覺らずして、我軍か直ちに攻撃を開始するものとや思ひけん、陸續として河の右岸に現出し、我に向て應射せり。

大砲三十門

大島少將は其兵數約六千餘、大砲三十門なることを確認したるか故に、直ちに兵を收めて、其由を桂師團長に報告せしかば、桂中將は、之に依りて推判を下たし、乃ち野津軍司令官に報して曰く、

敵は砲三十餘門を有し、其兵數約一万にして、遼河を以て其防禦線と爲し、以て我軍を邀へむとするもの如し。

蓋し攻襲偵察の要旨は敵軍を攻撃するか如き威力を示し以て敵軍を挑みて、其兵力如何を試測するか爲に施す所の一術容なりと雖、動もすれば、之か爲に敵兵と交戦を深めて終に本戦に移り易きものあり、是に彼紅瓦寨廿七年十二月十九日の戦の如きは、幾分か、攻襲偵察より直ちに移りて本戦と爲れり、然れども、今や大島久直少將は、此日巧みに攻襲の目的を達し、巧みに其兵を收めたることを、蓋し兵家の推賞する所なるべし。

巧に攻襲の目的を達す



## 第二十

### 第三師團の攻撃

第三師團  
の南進

初め第三師團は、牛莊城占領の翌日(三月五日)第十九聯隊の第一大隊を留めて牛莊を守らしめ、其餘の諸隊は大島久直少將之か前衛司令官と爲り、三好聯隊(第七)の二大隊と砲兵とを率ゐて遼河方面に進發し、師團長桂中將は第十八聯隊と柴野砲兵聯隊(第三)とを以て、師團本隊とし、鈴木大隊第七聯隊の第一大隊を以て右翼枝隊とし、師團の右側を掩護し、遼河の左岸に沿て南進せしむ。獨立騎兵大隊は先發して營口田庄臺方面を搜索せしめたり。

五日正午過、桂師團長は牛莊を發し、藍旗溝に宿し、翌六日本隊は給南府に、前衛は白草凹に宿營し、同七日は牛園子及び其前村に宿營せり。八日前衛は遼河の左岸に沿て行進し、本隊は牛園子の西方に整列して行進せず。

九日早曉、本隊も亦早發して遼河の南岸に進み、前衛三好聯隊(第七)は鈴木大隊と共に、本街道營口より田庄臺し往來する大道を云々の右側より散兵を以て前進し、粟

砲彈集飛  
し來る

飯原聯隊(第十九)の藤本大隊は本街道の左側より縱隊の儘にて拉操村の前方村落に進み、砲兵も亦進みて此村落に據れり。

三好聯隊の撤開點よりも尙ほ東方即ち右方に當り獨立騎兵大隊(第三)が斜めに前進しつつあるものは是れ此日總軍の右翼たる第五師團と互に連絡を維持するか爲なり。

藤本大隊の遙かに左側即ち東方に當りて前進する二個聯隊は、第一師團の第二第三聯隊なり。

午前八時前我中央隊(第三師團)の拉操村の前方村落に集まりたる歩兵砲兵は、敵の觀望に觸れたるより前岸敵陣より射撃する砲彈は紛々として此地に集飛し來れり。村の北端に放列を敷きたる我砲兵第三聯隊の山砲中隊、其右側に布列せる臼砲七門、及び其又右方に布列せる野砲中隊は、共に之に應砲し、又此日曉三時、大房身を發して此街道に前進し來りたる第一師團第二旅團の山砲中隊砲兵第二聯隊、佐久間師團の部下山砲中隊なりも亦此の左側に布列して發射せり。加ふるに師團本隊に屬せる第二中隊の野砲及び山砲第一師團の野砲も亦皆集合して、此際此處に列



黒田少將

したる大砲は九十一門に達せり。而かも其日砲山砲は砲兵第三聯隊長柴野大佐義廣之を監し、山砲野砲の總監督は黒田少將之に任せり。

敵砲兵

敵は此日其砲廿門許を現はしたれども、我砲数の優勢なるに對して争かでか能く之に抗するを得んや、幾ばくも無くして敵砲は棄へたるも、我砲門は彌よ射撃を急にしたり。

元來清軍には、砲術に熟練なる將校下士卒共に乏しきか故に、彼我均一同数の砲を以て相戦ふとも、日本砲兵は彼に比すれば、倍数の射撃を行ひ得るの能力を有せり。然るを況んや、此日の砲數たる彼は我四分の一に足らざる砲門を使用したるに於てをや。

退走を始

敵砲の終に沈黙するに隨ひ、敵兵は前岸に櫛比せる家屋の牆壁に沿て、下流より上流の方向に向て退走を始めたり。我將校は之を認め一聲急號令の下に山砲の射撃は益す急を加へ、續きて野砲も亦前岸民家を目標として之に急射を施したり。我榴彈の命中も榴彈の着發とは共に壯絶雄絶を極めたるが故に、敵の狼狽逃散する状況は實に慘絶快絶を極めたり。

壯絶と慘絶

一齊射撃するると十數回の低

第七聯隊第十九聯隊の各中隊は、散兵線を開き銃を提げて急進し、遼河南岸の堤塘に據り、沈着靜肅に射撃を開始せり。敵兵は例の如く連發銃を以て、濫りに亂射を事とするのみなるも、我兵は之に反し、將校の沈毅なる號令に従ひ機を見て、一齊射撃を行ふと十數回、是に於て北方に退き始めたる敵兵は散亂潰走して唯其跡に數百の僞屍を遺せるのみ。

氷上に出て吶喊す

然れども、前面西岸の防禦工事を施したる壘壁假備に據守せる敵は、此時尙ほ留まりて我に抗戰射撃せり。故に我砲は更に榴彈を以て此敵の防禦工事を破壊せむし爲に、射撃を急にすると數十發にして、早くも其効を奏したるを以て、敵兵は大に怯色を現はし、其射撃の勢稍鈍らむとす。我右側なる鈴木大隊は此機を外さず、東岸の小堤を飛ひ越へ遼河の氷上に出て、吶喊して前岸に突進し、左翼の藤本大隊も亦之に後れじと氷上に跳り出て前岸に向ひ突進す。河幅六七百米突加之雲の如き集まりたる者、處々氷上に塊結して、岩石に均しき者多し。我兵は之を避け且つ之を越へ、鷲地猛進して遼河の右岸に跳り上り、終に田莊台を占領したるは午前十時三十分頃なり。之に次きて、大島久直少將は若干の兵を率ゐて、遼河を涉り田莊台市内

田莊台の占領



に入り、桂師團長も亦河を涉りて市の北端に入る。時に敵の殘兵は尙ほ市中の家屋内に潜伏する者多し。我軍は牛莊城の經驗あるが故に、火を放ちて之を焚燬し、戦闘全く終るを見るや、又遼河水上を涉りて南岸に上り前夜の宿營地なる牛園子村に歸りたり。』

### 第二十一

#### 第五師團の攻撃

第五師團

五十門

砲戰開始

第五師團は三月五日牛莊を發し、同六日鳳凰甸に宿す。第二十二聯隊は其前衛と爲り、八日青堆子附近に宿し、戰鬪露營を爲し、其翌九日拂曉警戒行軍を以て遼河左岸に至れば、此時第三師團の方面に於て、既に已に砲戰を始めて我五十門の大砲敵の二十門の砲互に相射撃を交へ、轟然たる萬雷の響きは地に震へり、輿中將は之を視て、馬を下り河岸に立ち、前岸の敵狀を望むと須臾らくにして、忽ち令を下たし、我野砲及び山砲を以て田庄台の東端を射撃せしめ、而かも歩兵第二十二聯隊をして遼河上流氷上を越へて敵の左側を衝かしむ。是に於て、此方面にも亦砲戰を開始せら

走ると急  
速なるこ  
し鹿の如

れ、敵の砲彈は、其初めは遠く我後方一千米突に落ちたりしも、數發の後に及びては、我砲車の近傍に落ちて破裂するものあり。之か爲に傷を負ふ者砲卒數名ありき。我第廿二聯隊隊長中佐富岡三造は、此間に河岸に前進展開し、遼河水上を涉りて猛進せしか、時に敵は其正面攻撃を受けたる第三師團の五十餘門の砲擊急射に怯れ、て北方に退走を始めたるか故に、歩兵第廿二聯隊は、之を追撃したりと雖、彼兵は極めて氷雪の上を急歩逃走するに慣れ、我兵は之に反するを以て我兵進追すると十歩ならざるに、敵の逃走すると既に五十歩乃至百歩の外に在り、其走ると急速なる、と殆んど鹿の如し、故に我第廿二聯隊が、田庄臺の東北を包みて、其退走路を奪ふや、敵は途も無き雪中を一直線に踏破して海岸方向に逃走せり。此日の戰、第五師團の大部分たる第九旅團(大島義昌少將の部下)は、一半は豫備隊及び砲の援護たり、其一半は援隊として遼河の左岸に駐止せり。故に戰に與かりたるものは第十旅團第廿二聯隊歩兵と砲兵とのみ、而かも此師團の方面は其戰も亦激烈ならず、隨て死傷も亦多からざりき。午前十時半戰終るや、第廿二聯隊も亦遼河を越えて左岸に退き前夜の舍營地に宿營せり。



### 第二十二

#### 第一師團の攻撃

第一師團

山地第一師團長は、田莊台攻撃の兵を部署し、西少將第二旅團長をして其歩兵第二第三聯隊及び山砲一中隊第二師團の砲兵第二聯隊第二大隊を率ゐ、九日午前三時を以て大房身を發し、黑英臺を経て遼河を渡り河に沿て西北に進み以て敵の退路を扼せしむ。砲兵第一聯隊は午前三時半大房身を發し、黑英臺を経て遼河渡口の西方に至り、河を隔てて田莊臺に對し、布列せしむ。中將は工兵大隊を率ゐ砲隊の後方左翼に至る。騎兵大隊は八日夜半に、双井子を發し、西少將部隊の進むべき線路に前道し、其左翼を警戒せしむ。

八〇〇〇  
八日夜半

是に於て、西少將の部隊は、遼河を斜めに渡り、氷上を踏むと殆んど卅分にして、午前七時頃田莊臺の西南下流一里許の處に達したるに、天漸く明けむとす。時に敵營は寂然として聲無し。我兵以爲らく、敵軍は、田莊臺の守り難きを知りて夙とに退却したるならむと。

濃霧茫茫

敵西部に退却す

敵南方に進出す

既にして、遙かに東北方に當り砲聲を聞くも雖、遼河の兩岸濃霧茫茫として、四もに閉塞し、其砲の彼我孰れなる手を辨別すべからず。西部隊は漸く進み田莊臺を距る約三千米突の地に達するや、激烈なる砲聲の遼河兩岸に轟々たるを聞き、始めて先刻の砲聲は、敵軍の開戦發射したる者にして而かも、今や我本道中央隊も亦之と開戦したるとを知る。我歩兵第三聯隊は、進みて田莊臺の西方千米突の地に在る一村落に達する頃、敵の砲聲は稍く屈して沈黙し、敵兵稍く田莊臺を出て西方に退却を始む。我第三聯隊は直ちに展開して敵の敗兵を猛射し、砲兵中隊も亦直ちに放列を村端に布きて敗兵を砲撃す。敵兵屈せずして田莊臺の西方村端に砲列を布きて我に抗射す。我歩兵は其一部を以て田莊臺の後方二臺子に通ずる道路に迫る。午前九時頃正面の我砲撃益す猛烈なるに堪へずして、敵の大部は逃走せむとしたるも亦我第二聯隊の射撃に逢ひ、究盛せしが、辛ふして、僅少なる間隙を穿ち、田莊台の南方に逸出せり。西少將は豫備隊を出して之を扼せしが、敵は止むを得ず、其方向を一轉し、又西方に走り、我第三聯隊と豫備隊との中間空隙なる處に出て去る。豫備隊より一部隊を分ちて左に向ひ、第二聯隊も亦其一部を以て之を追撃せしめたりと雖、



敵背面の  
空隙

此時二聯隊の一部と豫備隊の一部とは其中間に敗敵を挟さみて、之を射撃するとなれば、彈丸飛て味方を傷くるの恐れあるか故に十分なる猛射を行ふ能はず。之に加ふるに、此日一般方略に於て豫期せられたる第五師團が敵の左側背に出づる運動が、聊か遅滯して其時機に後れたるが爲に、田庄台の敵背面は第五師團と西旅團との間に空隙を生じたり。故に約五六千の敵兵は此空間よりして、脱出退走するを得せしめたり。而かも前に記する第二聯隊と豫備隊との中間より逃逸せるもの、大約一千人及び遼河に沿て南方に逃れたるもの亦約四五百人に降らざるべしと云ふ。

田庄臺の  
占領

是に於て、歩兵第三聯隊の一部隊は直ちに進み、田庄台市街に入りて、殘兵の抗敵する者を勦撃し、次て第三師團の鈴木大隊藤本大隊も亦遼河氷上を越ゑて、東面より市街に進入し、第一師團の總豫備隊たりし、歩兵第十五聯隊も亦砲兵陣地の左翼より遼河を渡り、田庄台の南方に迫り、午前十時過全く田庄台を占領せり。既に於て、第一師團も亦他の諸師團と均しく、午後田庄台より撤去し、遼河を越へて左岸に於る前夜の舍營地大房身附近に宿營せり。

### 第二十三

#### 田庄臺の全燒及死傷戰利品

市街燒夷

此日我軍の田庄臺を陥略するや、敵兵は千餘の屍を遺てして、逃走せりと雖、尙ほ其殘兵の市街家屋牆壁内に潜伏して、我に抗する者尠からず。我軍は牛莊の經驗あるを以て、直ちに火を八方に放ちて之を燒夷せしめたり。是れ一には敵の殘兵を驅逐する爲めなるも、一には我軍が遼河左岸に退きたる後、敵軍が重ねて來り之に據守するを慮かりて、豫しめ其患害を除くが爲に出づ。故に家屋千餘と河船三百餘隻とは、悉皆之を燒燬し、翌十日午後に至りて、其烟焰始めて消滅せりと云ふ。

被我的死  
傷  
戰利品

我戰死は、下士卒十六名、馬匹四、其負傷は將校五名、下士卒百三十九名、馬匹十一なり。敵の死屍は約二千に降らず。其戰利品は砲十八門、小銃若干なり。此他戰利品大砲小銃及び彈藥多數ありたるも、之を收拾せずして、灰燼に付せり。三月十日軍司令官野津大將は、桂師團長及び關院宮殿下と共に營口を巡覽し、高刊に至る。第三師團は高刊に宿營し、翌十一日、第十八聯隊の一箇大隊は、第一師團に代



りて營口守備隊と爲り、同地に派駐せしめられ、他の一個大隊は、田庄臺に派駐せられたり。  
是より先に、我第一軍及び第二軍の第一師團が、連合兵力を以て北進し、遼東樞要の地域を全く掃清して、之を占領するの目的は此に至りて、其成遂を告げたり。是に於て我

勅語

大元帥陛下は勅語を賜はりたるを左の如し

○第一軍に賜はりたる勅語

第一軍

其軍海城を占領せし以來能く沅塞に堪へ屢々敵の來襲を撃退し、今又進て鞍山站牛莊地方に轉戦し、終に第二軍の一部と共に營口地方即ち盛京省重要な地點を略取す。殊に牛莊に於ては激烈なる市街戦を以て大に敵の兵力を挫折せり。朕深く之を嘉尙す。

○第二軍に賜はりたる勅語

第二軍

其軍の一部曩きに蓋平を占領せし以來能く沅塞に堪へ來襲の敵を撃退し、今又鞍山站牛莊地方に轉戦する第一軍をして後顧の患無からしめ、終に之と協力して營口地方即ち盛京省重要な地點を略取す。朕深く之を嘉尙す。  
又皇后陛下よりも賞詞を賜はりたるを例の如し。  
右勅語并に皇后陛下の令旨に對し奉りたる第一軍第二軍各司令官の奉答文ありと雖、其旨趣例の如くなるか故に今之を略す

第二十四

征討大總督の任命

我大元帥陛下は三月十六日を以て參謀總長小松宮彰仁親王殿下を以て征清大總督に任命し、玉ひ且つ其進發を命せられたり。其勅語左の如し

征清大總督

勅語

陸軍大將一品彰仁親王

朕が征清の陸海各軍漸く其歩を進め既に作戦第一期を經過し、今將さに第二期



の作戰を開始せしむるに方り征清大總督を命し戰地に前進せしむるの必要を認む因て朕今卿に任し委するに出征全團の指揮を以てし假すに配下將官以下任免補叙の權を以てす卿其朕の意を躰し征て事に従ひ以て我國威を宣揚せよ

○御沙汰書

征討大總督 彰仁親王

今般大總督府を戰地に前進するとを命し大本營中作戰に必要な諸機關の一部を從屬せしむ

蓋し我征清軍の目的は太沽砲臺を陥れ山海關を抜き長驅して北京城に迫り以て城下の盟を作すに在り故に昨冬以來第一軍第二軍及び海軍の運動は單に作戰の第一期たるに過ぎず今や威海衛既に陥り營口田庄臺も亦陥れりと雖敵軍は尙ほ山海關太沽の砲臺を堅守せり故に是より進みて海陸相策應し以て直隸省に向て我征清軍の主力を集注せざるべからず是れ作戰第二期の開始せらるる所以なるべし故に征討大總督府は親しく戰地に設けらるるを必要とし該府を旅順港に設

一作の第一期

二期の第

日清講和

置せられ而かも大總督宮彰仁親王殿下は四月十三日を以て宇品港を解纜し旅順口に向て進發せられたり然れども幾はくも無くして日清講和の商議其歩を進め馬關條約の調印と爲り次て其批准交換と爲りたるが故に大總督府は第二期作戰を開始するとなくして撤回せらるるとは爲りぬ



# 日清陸戰史卷十

## 威海衛の戦

### 第一

#### 威海衛攻撃の計畫及榮城縣占領

敵兵の訓練せられし者たる者、其訓練の門、海軍の直隸省に

日清戦争に於て、其敵兵の最も能く訓練せられたる者にして、而かも其戦能く力めたる者は、威海衛に於る清軍なりとす。威海衛は、實に清國渤海直隸灣の關門として、其防禦の力は、旅順口の上に在り。清軍か海軍共に其全力を盡くして、之を固く守りたる所以は、固より偶然に非る也。是より先き、我征清軍は、既に遼東の要地を占めたりと雖、更に進みて北京に入る前に於て、清國北洋艦隊を殲滅するに非れば、以て我海陸兩軍策應の動作をして、充分靈活健全ならしむると能はず。故に我軍直隸省に上陸進入の第一準備として、先づ威海衛を占略するの大必要あり。是に於て、威海衛進略の計畫は、茲に決定せられたり。







月日	第二師團	第六師團	金州ニ駐在セル部隊	連合艦隊
一月十日	同十一日 宇品乗船			
同十二日				
十三日	航行			
十四日	門司乗船			
十五日	航行			
十六日				
十七日	大連灣に集合	大連灣乗船		
十八日	出帆準備	午後出帆		登州附近砲撃
十九日	午後一時發			
廿一日	山東省榮城灣	榮城灣上陸		上陸軍の援護成山角燈臺占領
廿二日	上陸	大連灣出發	同	

廿三日	榮城灣附近宿營	榮城灣上陸	空船は旅順に返る 兵站司令部を榮城灣に設く	
廿四日	先頭は沙格庄に達す	先頭は張格庄と齊頭面	旅順乗船	
廿五日	道路修築	先頭は沙格庄と齊頭面	榮城灣上陸	
廿六日	道路修築	先頭は石家河	各部隊及所屬隊と共に運動す	
廿七日	牙格庄不夜城間	鮑家石家河間	右に同じ	陸兵と連絡
廿八日	張家口子西賣山間	偵察艦隊と連絡	右に同じ	
廿九日	第六師團と連絡	孤山後東方開進	右に同じ	陸兵と連絡
卅一日	溫泉場張家口子に開進	鳳林集東方高地及び百尺崖攻 撃占領	右に同じ	協同海陸攻撃
二月一日	鳳林集東方高地及び百尺崖攻 撃占領	百尺崖處鳳林集間	右に同じ	
二日	溫泉場馬家窩曲	楊家墅	所屬部隊と共に運動す	
三日	徐家河釐島口間	楊家墅	右に同じ	
四日	攻撃準備艦隊と連絡	攻撃準備艦隊と連絡	右に同じ	陸兵と連絡
五日	威海衛及軍港の攻撃	總攻撃		



第二師團

是より先に、第二師團は明治廿七年十一月を以て、悉く廣島に集り、爾來同地に駐屯して日夜扼腕西天を望みたりしが、本年一月出發の令あり、一月十日より宇品港を發し同十六日頃には悉く大連灣に集合せり。

(按榮城灣上陸地の偵察は、廿八年十二月廿一日、參謀士官藤井砲兵少佐、及工兵部副官中村工兵少佐、石井砲兵大尉、共に其任務を帯ひ、八重山艦に乗込み、榮城灣内を周ねく偵察し、同灣内の龍睡灣を以て最も上陸に便宜適當の地と認定し同廿六日復命の上決定せられたるものなり。

榮城灣揚陸部隊の輸送は第二師團を二回に分ち一月十六日大連灣を發するものを第一回とし、十七日に發するものを第二回とす、第六師團を一回に輸送し十九日を以て大連灣を發せしむ、其輸送船名は左の如し、

○第一回輸送船名

遠江丸、三河丸、山口丸、豊橋丸、金州丸、廣島丸、鹿島丸、新發田丸、小倉丸、立山丸、酒田丸、三池丸、名古屋丸、薩摩丸、宗谷丸、空知丸、和歌浦丸、兵庫丸、有明丸。

計 十九隻

此第一回に運送せられたる者は、第二師團歩兵三聯隊と一中隊、同騎兵一中隊と半小隊、工兵一大隊、輜重一大隊、糧食二縱列半、彈藥大隊、歩兵彈藥二縱列、並に野戰病院二、及衛生豫備員、患者輸送隊、衛生隊、第二師團司令部及第三旅團司令部騎兵大隊本部也。

○第二回輸送船名

和泉丸、旅順丸、釜山丸、仁川丸、小樽丸、東洋丸、膽振丸、住の江丸、攝陽丸、旺洋丸、越後丸、神祐丸。

計十二隻

此第二回に運送せられたるものは、第二師團歩兵一聯隊、騎兵一中隊、野戰砲兵野砲一大隊と聯隊本部、山野砲彈藥各一縱列つゝ、歩兵彈藥二縱列、糧食半縱列、輜重監視隊三箇、兵站糧食二縱列、衛生隊、衛生豫備廠、兵站司令部四個、兵站部員、並に大工五十名、鍛工十名なり。

○第三回輸送船名

横濱丸、長門丸、福岡丸、神州丸、高砂丸、姫路丸、宇品丸、攝州丸、佐倉丸、伏木丸、萬國丸